

鍛冶屋兼因縁受人幻驚霊斬改

魅娜波

序章——闇の連鎖を断つには

時は江戸。將軍のお膝元。家の間を歩く一人の男がいる。その背は高い。

人だかりを見つけ、軽い気持ちで見に行く。

小料理屋の前を通りかかると、岡っ引きと定町廻り同心が駆けつけていた。殺されたのはこの店の看板娘らしい。殺した人物が武士だと分かると同時に、騒ぎが起るまでの一部始終を見ていた別の女が、この場所にいると言い出し、野次馬の端の方を示した。誰かがその場から逃げ出したのを目にする。あとは捕まえればいいだけだが、定町廻り同心はそれをせず、ことが漏れないように厳重なかん口令を敷いた。

「どうして捕まえないのでしょうか？」

隣にいた小柄な女がそう言った。

そんな同心を不思議に思いながら、男はその場を後にした。

店に帰り、水につけておいた刀を取り出し、砥石で何度か研ぐ。そのたびに出来栄を確認しながら慎重に研いでいった。

だいたいの仕事を終わらせ、男——げんしゅうれいざん幻驚靈斬は休憩していた。すでに日は傾き始めている。刃傷沙汰のことを考えていた。

すると、戸を何度か叩く音がする。

引き戸を開けると、一人の武士が立っていた。

「幻驚殿とお見受けする。ひとつ、頼みを聞いてもらえぬか」

「では、こちらへ」

靈斬は武士を部屋に上げた。

部屋の真ん中に、靈斬とその武士は向かい合って座った。

「それで、頼みとは？」

「この刀を直してほしい」

武士はそう言って、床に置いていた刀を差し出した。

「拝見いたします」

靈斬は断りを入れて、刀を手にとって鞘を抜き、刀身に目を走らせる。

丁寧に扱っているのはすぐ分かった。刀は武士の魂というほど、大切にしていることが、ひしひしと伝わってきた。

「承うけたまわりました。一週間後に、またお越してください」

靈斬は刀を仕舞うと、そう言って深々と頭を下げた。

「こちらの都合ですまぬが、お代は先払いでよいか？」

武士が袖から小判五両を出し、差し出した。

「はい」

「では、これで」

「お待ちください。こんなにはいただけません」

靈斬は慌てて、小判を返そうとする。修理ならばここまで高額にはならない。錢と銀があれば十分だ。

「そなたが幻驚だから、これほどの額を払うのだ」

靈斬はしぶしぶ小判を受け取った。

「……分かりました」

「では、失礼する」

そう言って武士は店を出ていった。

靈斬は武士を見送った後、修理を頼まれた刀を一瞥^{いちへつ}して、外に出た。

近くのそば屋の暖簾をくぐる。

「ごめんよ」

「空いてる席にどうぞ。お待ちになって」

この店のおかみが言いながら、奥に引っ込んでいった。
それなりに客は訪れていた。

「おや？ 刀屋じゃねえか！ 仕事はいいのか？」

「少しくらい休んでも、罰は当たらんさ」

靈斬は知り合いに軽口を叩く。

「幻驚の旦那は、真面目だからな！」

その一言で周囲がどっと笑い出した。

「そう見えるか？」

靈斬はそれに負けないよう、声を張り上げた。

「おうよ！ 真面目じゃなきゃ、鍛冶なんて務まらねえだろ！」

「まあ、人によるかもしれないな」

靈斬はそう返すと、奥の席に腰をかけた。

しばらくすると、お盆にお茶を乗せた一人の若い女が顔を出した。

「いらっしやいませ。ご注文は？」

「そば」

「かしこまりました」

女が立ち去った後、靈斬はその女が、昼間見た刃傷沙汰の現場に居合わせた者だと気づいた。

それからしばらくしてそばが出てくる。

そばを啜^{すす}っていると、女——千砂^{ちさ}に声をかけられた。

「もしかして、昼間、刃傷沙汰のあった場所を通りかかったお方ですか？」

「ああ」

向こうも靈斬の顔を憶えていたらしい。

「嫌な事件が続かなければ良いのですが」

「そうだな」

靈斬はそう言って、そばを啜った。

店に戻り、一時間ほど眠った。

武士に頼まれた刀を直しながら、違和感を覚えた。

——あのときはなんとも思わなかったが、どうしてあの武士は名乗りもせずに、修理を依頼した？

刀の状態もそこまで悪くない。靈斬が一週間と猶予を持たせたのは、その武士が怪しかったからだ。それに修理だけで、あれほどの金を積んだことも気になる。

武士の放った一言からも、靈斬の別の顔を知っているような気がした。

疑問はいくつもあるが、それに囚われているわけにもいかない。靈斬は刀を直す手を早めた。

刀を直し終えて、伸びをすると靈斬は夜が明けていることに気づく。

よくあることなので気にはならないが、少ししか寝ていないので、さすがに疲れが溜まる。眠気覚ましに顔を洗って、仕事を再開した。

その日の夜、靈斬は黒の長着と同色の馬乗り袴を身に纏^{まと}う。黒の足袋を履き、同色の羽織りを着る。懷に短刀を仕舞う。黒の布で鼻と口を隠すと武家屋敷に足を向けた。

武家というだけで、情報が漠然としすぎている。手がかりを得ようと潜り込んだ。

屋敷内に入り、一番賑やかな部屋の襖をわずかに開け、様子をうかがった。

酒を呑み、ある男の愚痴で持ちきりだった。そこには刀の修理を頼んでいた男の姿もあった。商売柄か、人の顔は憶えてしまうのですぐに分かった。

だが、その男は太刀を持っていたため、修理した刀の持ち主は別にいることになる。

靈斬はその場から離れ、屋敷の屋根に腰かけ、考え込む。

調べにきたものの、謎が深まるばかりだ。

——どうしたらいいもんかな……。

靈斬は曇天の空を眺めながら、店に戻った。

翌日の夕方、千砂の許を訪れた靈斬はこう問うた。

「刃傷沙汰について知っていることを、話してくれないか？」

「分かりました。他言無用でお願いします。それから、あなたはただの商人じゃない気がします」

千砂は笑顔で言い、そば屋の裏へと靈斬を案内した。

千砂と靈斬はそば屋の裏で、お互いに声を低めて話していた。

「俺が把握しているのは、修理した刀の依頼人と持ち主が別にいることだけだ」

「修理を依頼した武士の顔は覚えてる？」

突然碎けた物言いになり、靈斬は戸惑った。

「これがあたしの普通なんだよ」

千砂が苦笑して、付け加えた。

「そうか。昨夜、鍛冶町と武家屋敷の境目にある屋敷にいた男だ」

靈斬はうなずいて話を戻す。

「そうかい。まず刀を持ってきた男は園田綱吉そのだつなよし。刀の持ち主は、富川義徳とみかわよしのり。園田家とは主従関係にある。……少し、時間をくれれば、詳しい情報を渡せるよ」

靈斬は訝しげな顔をする。

「どうして俺に協力を？」

「あんたが いい男だから」

答えになっていないと思いつつも、靈斬は言葉を続けた。

「二日かどうか？」

「いいよ。二日後に、この場所で」

二人はその場で別れた。

千砂との約束の日まで、靈斬は修理に追われた。刀部屋にこもる日々が始まった。

箱輻はこふくと、鉄床かねどこ、その右側には水桶と金箸が置かれ、それらを避けるように空けられた真ん中の空間に腰を下ろし、袖をたすきで縛ると、慣れた手つきで刀を手にとって作業を始めた。

箱輻を押し、火力を調節してから、刀を押し込む。

真っ赤になるまで加熱すると、すぐに引っ張り出して水桶に浸す。ジュウ〜という音とともに水蒸気が上がる。

それを引き上げると、まだ赤い刀身を金槌で何度も叩く。

カン、カン、カンという音が小気味よい。

水に浸しては、金槌で叩くという作業を繰り返し、形を整えていく。

理想の形にすると、しばらく冷やすため、水に浸す。丁寧に研いで仕上げると、鞘に仕舞って自分の後ろに置く。

たすきを解くと、辺りが薄暗いことに気づいて、思わず苦笑した。

——朝から飲まず食わずで作業していたのか……。

靈斬は顔を洗ってから、腹を満たすためにそば屋へ足を向けた。

「あら、幻驚さん。いらっしやいませ！ 奥へどうぞ！」

靈斬の来店に気づいた千砂が、声をかけてくる。

賑やかな店内をよそに、無言で言われた席に腰をかける。

「ご注文はいかがなさいますか？」

「そばをひとつ」

「かしこまりました」

千砂はそう言い、小声で「少しお手を拝借」と言い、ひっくり返したお盆を近づけてくる。

靈斬は疑問に思いながらも、手を差し出すと、小さく折りたたまれた和紙が置かれる。

頼んでいた仕事になにか変化があったのだろうと察し、靈斬は彼女の目を見てわずかにうなずいてみせた。

「二日もこもって仕事をなさっていたんですか？」

千砂が、そう尋ねてきた。

「ああ」

刀を直している間は時間を忘れてしまう。そのことを痛感させられた瞬間だった。そばを平らげた後、錢を置いて店を後にした。

店に戻り、千砂からもらった小さな和紙を開く。『情報収集完了。打ち合わせた場所で、今夜待つ』という短い内容に少し安堵する。女性らしい、可愛らしくも、読みやすい文字だった。

情報さえ手に入れてしまえば、こちらが少しでも有利になる。それを確信している靈斬

は、夜が更けてから店を出て、そば屋の裏手に向かった。

裏手にまわったものの、千砂の姿はない。しばらく壁によりかかり、腕を組んで待っていると千砂が姿をあらわした。

「待たせたようだね」

「気にするな」

「じゃ、こっちにきて」

どこにいくのだろうと思いつながら、靈斬は彼女の後に続く。

千砂はそば屋から、かなり離れた場所の家に足を踏み入れる。

「どうぞ」

「ここは？」

靈斬は入ってから尋ねた。

「情報収集するときの拠点。隠れ家みたいなもんだね」

「そうか」

靈斬は土間を上がった先の床に胡坐あぐらをかいて座る。

千砂も彼と向かい合うかたちで正座する。

「早速、本題に入るよ。義徳が一番頼りにしているのが綱吉。一番のお気に入りともいえる」

「やはりそうか……」

「それと、富川家は愛人の子と衝突中で、義徳が刃傷沙汰を起こした張本人」

「感謝する。では、情報料を……」

靈斬は言いながら、右手を袖に突っ込む。

「ちよいとお待ち。あたしはそんなもん、もらわないよ」

「……分かった」

靈斬は苦笑して隠れ家を後にした。

夕方、園田が店に顔を出した。

店に招き入れるや、園田は口を開いた。

「予定より早くきてすまぬが、刀は直っておるか？」

「はい。こちらでございます」

靈斬は、さっそく刀を見せる。

「たしかに」

「失礼ですが、私に修理の依頼をしたのは口実でしょうか？」

園田は苦笑して、頭を掻いた。

「……はい。しかし、武士の恥ということもあり、どう話したらよいものかと」

「そのまま構いません。決して他言はいたしません」

「我が主は、ある理由で賊から命を狙われている」

「賊……ですか」

「うむ。こちらでも調べたが、去るお方の指金らしい」

「では、去るお方についてお尋ねします。あなた方とはどういったご関係ですか？」

「主とは義兄弟に当たる。だが、その方の母親がどうも地位に固執しているようだ。主も私も、彼らに憎しみこそあれ、それをどこへ向けたら良いか分からぬ」

「そうでございましたか。承知いたしました。それからひとつ、確認したいことがございます」

「なんだ？」

「あなた様も主様も、人を殺めぬこの私に頼んで、二度と後悔なさいませんか？」

「もちろんだ。依頼内容は賊の退治と、できればこの状況の打開だ」

「承知いたしました。念のために言っておきますが、当日、私の邪魔だけはなさらぬよう、よろしく願います」

靈斬は言葉こそ丁寧なものの、喧嘩を売った。

「分かっておるわ」

その言葉が気に喰わなかったのだろう。園田はぶつきらぼうに言葉を返し、刀を持って、店を後にした。

靈斬は園田が店を去った後、今回の依頼内容について考えていた。

——賊の退治はともかく、状況の打開と言われてもなあ。

靈斬は一人、溜息を吐いた。

「失礼いたす！」

「はい！ ご用件はなんでございますか？」

靈斬はすぐさま、奥の部屋から出て、訪れた武士に丁寧に対応した。

「この店で一番良い出来の刀を二本、買いたい」

「この店の刀のみならず装飾品すべて、一番の出来にございます」

「ならば、手近なものを一本みせてくれ」

「かしこまりました」

靈斬はそう言って指定された刀を、武士に差し出す。

武士は慣れた手つきで刀を抜き、刀身に視線を走らせる。

「うむ。……よい出来だ。これとその隣のを一本、もらおうか」

「かしこまりました。少々お待ちくださいませ」

靈斬はそう言い、二本の刀を手に刀をつくる部屋の反対側、階段簞笥へ向かい、小さい引き出しから刀袋を二枚取り出す。素早く二本の刀を袋に入れる。

「お待たせいたしました。お品物でございます」

靈斬は刀を自分の前に置き、武士に向かって、頭を下げた。

「では、これを。失礼いたす」

靈斬がお代を受け取るのを見て、武士は刀を持って店を出ていった。

二日後、いつものように奥の部屋で刀を作っていると、表の方から声が聞こえてきた。

「幻驚！ いるかあ？」

聞こえてきた大声に溜息を吐き、作業を中断して、表へと向かった。

「大声を出すな」

靈斬は言いながら、訪れた男を睨みつける。

「店に出ていないお前が悪い」

などと言うのは、鍛冶仲間の喜助だ。きすけ まともな用件であったためしがなく、靈斬は内心で呆れている。

「それで、今日はなにをしにきた？」

「お前が通っているそば屋の娘が、可愛い子なんだって？ 紹介してくれよ」

「女房持ちのお前に、紹介なんぞ誰がするか」

「相変わらずの毒舌だな」

喜助は言いながら、にやっと笑う。

「つたく……。もう戻るぞ」

溜息混じりに頭を掻いた靈斬は、そう言って部屋に戻ろうとする。

「じゃ、俺はそろそろ。早く女見つけろよ！」

「ああ。……黙れ、馬鹿」

靈斬は最後にぼそっと吐き捨てると、奥の部屋に戻り、刀作りを再開した。

決行当日。靈斬は黒の長着と同色の馬乗り袴を身に纏う。黒の足袋を履き、黒の羽織りを着る。同色の布で鼻と口を隠す。階段簞笥の隠し棚から黒一色の刀を取り出す。鞘を抜いて黒い刀身を見てから、腰に帯びる。草履を履いて、店を出て、富川家へ向かった。

靈斬が店を後にしたのを、忍び装束姿の千砂が物陰から見ていた。靈斬の素性を知りたくてきたのだが、初っ端から肝を冷やした。

——こんな時間に、どこへいくのだろう？ 格好が普段と違う。

靈斬に気づかれないように後を追った。

千砂は靈斬のことについて考えていた。

端正な顔立ちをしているのに、闇を纏っているような雰囲気は放つ男。

直接話すとそんな雰囲気は微塵も感じないが、話していない間だけの独特な雰囲気になる。あの男はなにに影響を受けて、そこまで変わってしまったのか。とても興味深いと思った。

そのころ、靈斬は屋根を歩いていた。

屋敷内が見えてきたころ、片膝についてそうっと顔を覗かせると、入り口に見張りの侍が二人ほど立っている。

通りがかりの侍が二人を斬りつけ、堂々と屋敷に入っていく。次から次へと出てくる部下達を容赦なく斬り、骸を増やしながら、進んでいく。

その後を追い、次期当主の部屋を天井の板をずらして眺めていると、叫び声が聞こえてくる。

みれば次期当主の部屋に刺客が迫っていた。

次期当主は叫びながらも少人数の部下を引き寄せ、自分の身辺を守らせた。

しかし、それも空しく斬り伏せられてしまった。

残るは園田と次期当主のみ。

刺客が刀を振り上げた瞬間、靈斬が割って入った。

刀同士がぶつかり合う音が響く。

「誰だ？」

「名乗るほどの者ではない」

靈斬は刺客の刀を押し返し、左肩を斬り裂く。

刺客は怯んだ様子もなく、刀を振りかざして襲いかかってくる。

次々に繰り出される斬撃を、紙一重の距離で躲けていく。

しかし、頬に刃が触れ、紅い筋が滲む。

わずかに目を細めると、刺客の首筋に刀を突きつける。

「貴様、ひとりか？ それとも……」

刺客は無言のまま、指を鳴らした。

どたどたと複数の足音が聞こえてくる。

右腕を斬り裂くと、刺客を蹴り飛ばす。

刺客は庭に転がり落ち、痛む腕を引き摺^ずっていずこかへと消えた。

その後を追わせまいとするかのように、複数の刺客が靈斬を取り囲む。

——増えても同じだというのに。

内心で呆れながらも、その中に突っ込んでいく。

靈斬は相手の腕や脚を狙って斬りつけていく。

自^や棄^けになって突っ込んできたところを躲して、一撃。再起不能に。

前後から同時に繰り出された二本の刀を避けると、お互いの肩を刺してしまい悶絶する。

その隙を狙って脚をそれぞれに斬りつける。

なんとも質^{たち}の悪い戦い方だが、それが一番効率的であることを靈斬自身が証明していた。

人数では不利であるのにもかかわらず、それを感じさせない気迫と動き。

その場にいた人間は誰も口を挟むことができず、見ていることしかできなかった。

靈斬の後に続いて、屋敷に侵入し屋根から様子を見ていた千砂は、警戒を解かぬまま、呆氣にとられていた。

人数が不利、相手は自分を殺す気で刃を向けてくる。真剣同士であっても、決して相手を殺さない。

——あれだけの殺気を放ちながら、なぜ。

千砂はそう思わずにはいられなかった。

「なにをしているの！ さっさと奴を押さえないさ！」

その場に姿をあらわした女は、金切り声を上げた。

反対側の廊下に現当主が姿を見せた。

「おぬしが黒幕か？」

「なぜ……あなた様がここに？」

「実の子を殺し、自分の子を次期当主にと考えていたのではあるまいな！」

「だとしたら、なんだというのです！ 私^{わたくし}の子が次期当主になるのは当然のことですわ！」

「黙らんか！ そのようなこと、このわしが認めんぞ！」

二人の喧嘩は収まらなかったが、そのことは誰も気に留めていなかった。

その間、靈斬は刺客の中でも耐久力の高い男を相手取っていた。

急所以外はすべて斬りつけたが、倒れる様子がない。対する靈斬も無傷ではなく、腕や

肩に傷を負っている。

これ以上長引けば、不利になるのは確かだが、相手を殺すわけにもいかない。みねうちでも思ったが、相手にこれ以上舐められるのは癪に障る。

そんなことを考えていると、男が攻撃を繰り出してきた。慌てて躲すも腹を少し掠^{かす}ってしまった。

靈斬は痛みを顔に歪める。

駄目もとで靈斬は大声を出した。

「誰か、自身番、呼んでくれないか？」

「それならもう手配済み。あと五分ほどでくるよ」

その声に答えたのは千砂だった。

千砂は靈斬の近くまできて、目の前の男を肘打ちで伸ばす。

忍び装束の千砂に、靈斬は驚きを隠せない。

「そんなことより、いいのかい？」

千砂にそう言われ我に返った靈斬は、未だに続く二人の言い争いに待ったをかけるため、声を張った。

「富川義徳！」

「大声で呼ばないでください」

静まった中庭で、その男は困ったように言った。静かに靈斬の前へと歩みを進める。

「いったい、なんですか。急に入ってきて」

「無礼を承知で言おう。先の小料理屋の一件、貴様の仕業だな？」

「はて？ なんのことやら」

靈斬は溜息を吐く。

「貴様の父親が起こした不祥事を収めるため、武士を辞めさせられ、あの日、憂さ晴らしに呑んでいたんだろう？」

そう尋ねる靈斬の声は冷ややかなものだった。

「たしかに、その日は呑んでいましたね」

義徳はうなづく。

「そうか、こんな話も聞いたぞ。武士と商人の喧嘩に、怒り狂った貴様は、誤って看板娘を斬ってしまった」

義徳の様子が少しずつ変わっていく。

手を握りしめ、額には汗が浮かんでいる。

それでも、靈斬の話は続く。

「なにをしてしまったのか理解もできず、貴様はその場から逃げた。しかし、また小料理屋に戻った。だが、隠れていられず、屋敷に逃げ帰った」

靈斬は偉そうにしている現当主——義徳の父親に視線を向ける。

「息子のしでかしたことを知ったあんたは、自分の地位を守るためだけに、自身番に圧力をかけた。違うか？」

義徳は怒りのあまり震えながら、懷から取り出した短刀の柄に手をかけていた。

靈斬は言葉を続けた。

「これで、恐れることはなにもない。そう思ったんだよな」

「黙れ！ お前さえいなければ、白紙に戻せる！」

義徳はそう言い、短刀を抜きながら斬りつけてきた。

靈斬は自分の刀に触れもせず、その攻撃を躲し、足を払った。

体勢を崩し、仰向けに地面に転がった義徳の胸を、草履で踏みつけた。念のため目の前に転がっていた抜き身の短刀を遠くへ投げる。暴れる義徳を再度踏みつけると、大人しくなった。

「あんた、面白そうなことしているねえ。情報が欲しけりや、いつでもきな」

「どうして、ここにいる？」

靈斬が問うと、千砂は鼻で笑った。

「それには後で答えるよ。さっさといかないと、面倒なことになるよ」

千砂にそう言われ、しばらく黙っていた男女を一瞥する。

自身番の連中の声が聞こえてきた。

靈斬と千砂は隠れ家に戻った。

「医者になんかなくていいのかい？」

隠れ家に着くや、千砂が口を開いた。

「この時間帯だと、相当不機嫌なんだよな」

格子の隙間から見える、白んできた空を眺めながら、靈斬は溜息を吐いた。

「放っておくわけにもいかないだろうに。知り合いなんだろう？」

「まあな」

「なら、さっさといこうじゃないか」

「どうしてお前がついてくる？」

靈斬は不愉快そうに顔を歪めた。

「ただの付き添いさ」

「そうか」

怪我人を一人でいさせることが心配だと、あえて口にできなかったことから、素直じゃない奴だなど、靈斬は思った。

「ちよいと待ってな」

千砂はそう言つて奥の部屋へ引つ込んだ。

少し気が抜けたのか、傷の痛みが、酷くなってきた。

——こりゃ、明日医者に行くなどと、悠長なことは言つてられねえか。

靈斬は思わず溜息を吐いた。

「じゃあ、いこうかね？」

着替えを済ませた千砂に、靈斬はうなずき、診療所に足を向けた。

その道中、千砂が声をかけてきた。

「あたしがあの場にいたのは、あんたがなにをしようとしていたのか、知りたかったからさ」

靈斬が苦笑する。

「まさか、見られているとは思わなかった。……俺に関わるな」

靈斬は手を引くなら今のうちだと言わんばかりに、静かな声で告げた。

「嫌だね。また今回みたいなこと、続けるつもりかい？」

千砂は鼻を鳴らした。

「お前には関係ない」

千砂は首をかしげた。

「どうしてそんなに、拒絶するんだい？」

「独りの方がいい。……それだけだ」

靈斬は吐き捨てるように言った。

「もし、あたしのために言ってるんだとしたら、それはやめてもらいたい」

千砂は靈斬を睨む。

「なにかを知りたいと思うことは、罪じゃない。あたしだって、覚悟、決めてんだよ。——
靈斬」

靈斬の目に驚愕の色があらわれる。

平穏な世だからこそ、嫉妬、憎悪といった闇が表面化してきているのだろう。

殺した者、殺された者、遺族……。殺した者はもちろん危険だが、さらに危険なのは、遺族ではないだろうか。

殺した者を憎むだけならいい。自ら手を下そうと早まらなければ、失うものは減る。感情のままに行動してしまわないよう、折り合いをつける機会を与えれば、止められるのではないか。

方法は、この世のありとあらゆる闇を、人を殺めないことを条件に、肩代わりする。裏の世では「因縁引受人」あるいは見えないものを斬るという意味で「靈斬」の名で知られている。

依頼人が金を持っているのであれば、報酬として受け取る。なければ無償で行う。ただし依頼人に二度と後悔しないと堅く約束させる。それと、刀の修理を以て。

「……お前、烏揚羽か」

千砂の通り名を呟いて、靈斬は溜息を吐いた。

彼女は裏の世でそう名乗り、情報屋として暗躍している。

「そうだよ」

「いつから、気づいていた？」

「あんたと刃傷沙汰の現場で居合わせたときさ。最初はただの勘でしかなかったけれど」
靈斬は空を仰いで言った。

「そうか」

二人は黙ったまま、診療所へ向かった。

四柳院診療所と書かれた屋敷の戸を叩く。

「俺だ、靈斬だ」

そう名乗ると不機嫌そうな声とともに、戸が開いた。

「時間知らずな奴だな。こっちは眠いんだ」

そう言って姿を見せたのは、中肉中背のごく普通の顔立ちをした男——四柳院だった。五十歳くらいに見える。靈斬は四柳と呼んでいる。

「悪いな」

「女連れて、こんなところんな」

「あたしはただの付き添いさ」

「ついてきな」

不機嫌な四柳の後に二人は続いた。

部屋に入るや、千砂はその場で待たされ、靈斬は奥の部屋へ通された。

「……診せてみる」

靈斬は、黙って上着を脱いだ。

「相変わらずだな。新しい傷、作ってんじゃねえよ」

治療をしながら、四柳が毒づく。

靈斬の引き締まった身体は古傷だらけだった。死ななくて不思議なくらい心臓に近い傷もある。今回は左肩と右腕、脇腹に刀傷が刻まれている。

「そう言われてもな。そういう稼業をしている」

「俺には、お前みたいなことはできんよ」

その一言に靈斬は苦笑する。

「死ぬんじゃねえぞ。怪我したら治してやるから、こいよ」

左肩と右腕、腹に晒し木綿（現代でいう包帯）を巻き終えると、四柳がぼそつと言った。

「ああ」

靈斬はそう言ってお代を置こうとするが、四柳が断る。

「お前は怪我が多すぎる。そんな奴から、金はもらえねえよ」

「そういう奴だったな、お前は」

靈斬は苦笑して、千砂の許へ戻る。

「あんたもこいつのこと、知っているのか？」

「まあね」

「あんたも怪我したらここへこい。手当てなら、してやる」

「ありがとう」

「礼なんていい。俺は仕事をするだけだ」

そう言って四柳は、手で蠅を払う仕草をした。

「じゃあな」

それが四柳なりの別れの挨拶だと理解している靈斬は、そう言って千砂とともに診療所を後にした。

「まったく、変わった人だったねえ」

「俺も最初はそう思った」

靈斬の物言いはあまりにも、そっけなかった。

「そう」

この男はいったいどんな秘密を抱えているのか、知りたいと思ってしまふ千砂だった。

第一章——鍛冶屋幻驚

鍛冶町の外れに、一軒の店がある。

引き戸は閉じており、屋根には店の名が書かれた看板が置かれている。引き戸には商い中と書かれた板が下がっている。

そんな中、カン、カンと音が響く。

入ると刀だけではなく、根付や鏢といった装飾品なども含め、数多くの商品が並べられている。右側の奥には階段箆筒。真ん中には部屋があり、よくここで依頼人と刀の修理などについて話をする。左側にはもうひとつ部屋がある。戸が閉まっているが、先ほどの音はここからしている。

室内の壁側には箱鞆がついた炉があり、中では炎がめらめらと燃えている。その反対側に、熱した刀身を冷やすための水桶、隣には金箸が置かれている。

その中心に胡坐をかいて座り、鉄床の上に熱したばかりで赤くなっている刀身を金槌で叩く靈斬がいる。

歳は二十八。引き締まった身体つきをしている。漆黒の長髪は後ろで一つにくくっている。刀身を見る、切れ長で髪と同じ色の瞳と端正な顔は真剣そのものだ。袖はたすきで縛っており、動きやすそうな青の着物を着ている。

鍛冶屋「幻驚」の店主。客から修理の依頼を受けたり、刀を作ったりしている。腕がいと噂が広まり、繁盛している。

幾度か金槌で叩いた後の刀身を水で冷やし、状態を確かめてから、靈斬は部屋から出る。大きく伸びをした。

「昼時か」

格子から見える空を眺めながら、たすきを解く。戸締りをして店を出た。

靈斬は普段、店から近いという理由で、そばを食べるのだが、いい加減飽きていた。通りをぶらつきながら店を探していると、角にそば屋の看板が見えた。

何度か食べており、美味しいので、通ってもいいかもしれないと思っていた。

軽い気持ちで、店に入った。

店の中は広々としており、客達が机を囲んでいる。昼時には人が多い。人気の店で繁盛しているのだろう、と予想がついた。

「いらっしやいませ！ 空いている席にどうぞ！」

結った黒髪に黄色の小袖を着た女——千砂が、彼を見るなり、声をかけてきた。

今まで通っていた店では、客に対してあっさりとしすぎており、入ってすぐに声をかけられることがなかった。内心で驚きながらも、空いている席に腰を下ろした。

「そばをひとつ！」

千砂が出てくるころあいを見計らって、大声で注文した。

「少々お待ちを！」

注文を終えた後、さりげなく店内を見回した。武士、近くの商人、旅の者など様々な人が利用しているようだ。

「お待たせしました！ ご注文の品です」

机に置かれたお茶をそっちのけで、そばを見る。

そばを食べ始めた。

美味かったからだろう、ものの五分で食べ終えてしまった。

「いかがでした？」

お茶を飲んでいるころ、千砂に声をかけられた。

「美味かった」

「それは良かったです！」

「ああ」

千砂は普通の人からすれば美形と言われる顔立ち。けれども、男にはない淑やかな印象を受けた。歳は靈斬より三つほど下くらいか。

お代を机に置き、席を立った。

「ごちそうさん」

千砂にそう言い、店を後にした。

第二章——過去の片鱗

靈斬はいつも通り、刀を直していると、急かすように戸を叩く音が聞こえてくる。
「いらっしゃいませ……って、お前か」

靈斬は戸の側に立っている人物を見た瞬間、愛想笑いをかき消した。
「ちよいといいかい？」

そこにいたのは千砂だった。
とりあえず千砂を招き入れ、商い中の看板をひっくり返して戸を閉める。

「仕事はいいのか？」
「休み、もらったんだよ」

靈斬の店を見て、千砂が呟く。そんな彼女をよそに、靈斬は奥へいくよう、顎で示した。
それに倣い、奥の部屋へ向かった千砂が正座をすると、靈斬も彼女の正面に胡坐をかく。
靈斬は口を開いた。

「……なんの用だ」
「怪我は、よくなったかい？」

「裏稼業を休んでいるから、少しはましになった。お前に聞きたいことがある」
「なんだい？」

「どうして、俺の名を知っていた？」
千砂が苦笑する。

「長く裏にいるせいかね。有名なんだよ」
「そうか」

「……しかし、あんたの仕事ぶりには驚いた。依頼人の代わりに命を懸けるなんてさ」
「依頼人の憎悪や悲哀に比べたら、俺の命は安いもんだ」

千砂は驚いた。そんなふうに自分の命を軽々しく扱うこの男に。本来なら平手打ちでも喰らわせてやりたい。が、よほどの事情があるのだろうと思い、それ以上の追及はできなかった。

「お前は どうして、情報屋をしている？」
「一人で生きていくためさ」
「……そうか」

靈斬は苦笑して、物思いに耽った。
これまで依頼人の憎しみや怒り、悲しみを幾度となく見てきた靈斬は、生きること絶望していた。

幾度となく訪れる依頼人達は、藁にも縋る想いで、自分を頼ってくる。その姿だけでも

哀れでならない。彼らの心は救われても、自分は決して救われない。そう思うようになって、ようやく、この仕事が楽にこなせるようになってきた。

未だに過去のことは燻^{くすぶ}っている。それを気にしていられないほどの、依頼人達の闇を見せつけられてしまうと、自分のことはどうでもよくなってしまう。

この仕事をしてから、何度絶望したか分からない。それほどまでに闇が深い仕事だったのだ。自分が始めた手前、最後までやり抜くしかない。

口を噤^{くみ}んだ靈斬は、諦めと絶望がない交ぜになった表情を浮かべていた。

そんな表情を見た千砂は、それ以上見ていられず、静かに店を後にした。

靈斬は戸を叩く音で我に返る。

千砂は帰ったのかと思いつながら、表に出ていくと、一振りの刀を持った男がいた。

「どうなさいました？」

「鍛冶屋の次郎ってもんですが、この刀、見てもらえませんか？」

「では、こちらに」

靈斬は支度中の看板をそのままに、次郎を招き入れる。

お互い正座で座ると、靈斬が切り出した。

「では、見てみますね」

そう次郎に断りを入れて、問題の刀を受け取る。

鞘を外そうと静かに動かした瞬間、刀身と鞘の間から液体がしたり落ちる。

次郎がぎよっとしたが、靈斬は動じずその液体に指先で触れる。

「この刀は、いつ、あなたの許へ持ち込まれたのですか？」

「今朝です」

「これは血と雨が混じったものです」

指で触れた少しぬるぬるした感触と、今朝の雨から、そう推測を立てた。

「血ですって!？」

そう聞いた次郎は仰天してしまう。

「持ち主が、雨の中、誰かを斬り、血や雨を拭わないまま鞘に納めた……と言ったところでしょうか」

その証拠に靈斬が鞘を抜くと、刃に血糊がついていた。

「雨が降っていたのに、どうして血が……?」

「小雨だったからでしょう。この刀を持ち込んだ方の特徴は?」

「笠を被っていたので、顔までは分かりません。ただ……紋があつたような……」

「どのような紋でしたか?」

靈斬は次郎が思い出している間に、筆と和紙、硯^{すずり}の用意をし、そう尋ねた。

次郎はしきりに首をかしげながら、紋を描いた。

「ありがとうございます」

「あ、あの！」

次郎は慌てて声を出した。

「なんでしょう？」

「その人が言っていたんです。〃その刀を幻驚のところへ持って行ってほしい〃って。お代も預かっています」

次郎はそう言って、懷から小判一両を取り出し、靈斬に手渡した。

「そうですか。ありがとうございます。この件については他言無用で」

「は、はい！ では、失礼します」

次郎は刀を靈斬に預けると、そう言って店を後にした。

靈斬は血糊を落とし、改めて刀身に視線を走らせる。刃先が少々劣化し、切れ味が落ちているだけで、修理自体は簡単に済みそうだ。

ただ、そこまで焦っていたのだろうと思うものの、その理由が分からなかった。血のつき方からして、殺めたようには思えない。

靈斬は持ち主について考えながらも、修理を始めた。

その日の夕方、靈斬は千砂の隠れ家を訪れた。昼間にそば屋で会う約束をしていた。

「なんだい？」

「この紋、見憶えないか？」

靈斬はそう言って紋の描かれた和紙を見せる。

「こりゃ、光里家みよりの家紋じゃないか」

「やはりそうか」

面倒なことになってきたかもしれないと思い、靈斬は眉間にしわを寄せる。

光里家とは、旗本で將軍のお氣に入りと言われている家だ。

——そんな奴らに、なんの恨みがあるんだ？

靈斬の疑念は深まる一方だった。

翌日の昼間、靈斬はそば屋を訪れた。

「いらっしやいませ！ 奥へどうぞ」

元気な声の千砂に会釈をし、靈斬は奥の方へ足を進め、腰を下ろした。

「そばをひとつ！」

「かしこまりました」

「なにそばなんか頼んでるんですかい？」

と酔っぱらった客に絡まれる。

「……」

靈斬は無言。

しばらくするとその客は、靈斬から離れていった。

「幻驚さん、話さなくて正解ですよ」

と話しかけてくるのはこの店の常連客だ。

「どうかしたのか？」

「ただのやけ酒ですよ。女に振られたとかで」

そう言った瞬間、周囲に笑いが起こるが、靈斬は表情ひとつ変えなかった。

「そんなことで、いちいち吞んでいたら、身体がもたないな」

「さすが、幻驚さん！ いいこと言うじゃねえか！」

「そうか？」

「はいはい。お客さんをからかうのは、そこまでにしてください」

男達のくだらない会話に、終止符を打ったのは千砂だった。

「そうだな」

靈斬は手を合わせ、そばを啜った。

周りがさらに騒がしくなった。

「千砂ちゃんのいけずー！」

「どうしてこう、うちの客って失礼なことばかり言う男しかいないのかしら」

千砂は溜息を吐く。

「いい男ならここにいますぞ！」

先ほどの酔っぱらいが声を上げる。

「そんな男、こっちから願い下げだよなあ、千砂ちゃん？」

「そんなことより、そばを食べてください！」

「はい」

千砂の喝を受けた男達は先ほどのまでの勢いを失くし、それぞれにそばを啜り始めた。その様子をそばを食べながら、靈斬は面白そうに眺めた。

それから二日後の夕方。

曰くつきの刀の修理を終えて、休憩している靈斬の許に、一人の武士が顔を出す。その男の羽織りを見て、光里家の者だと分かった。

「いらっしやいませ。刀の修理でしたら、つい先ほど終わったところでございます。お持ちいたしましょうか？」

「頼む」

そう言った武士は店に入っても笠は取らず、居間の床に胡坐をかく。

「こちらでございます」

靈斬はそう言って刀を恭しく差し出した。

「良い出来だな」

「ありがとうございます」

靈斬が頭を下げると、武士が重々しく口にした。

「……そなたが、因縁引受人の靈斬か？」

「はい」

「なら、こんなものは不要か」

武士はそう言って、笠を外した。床にことんと小判を置いた。

「ここに小判十両ある。依頼をしたい」

「その前にひとつ、確認したいことがあります。人を殺めぬこの私に頼んで、二度と後悔なさいますか？」

「後悔はしない」

「では、依頼内容をお教えくださいますか？」

「ある男を、懲らしめてから、自身番に突き出してやりたいのだ」

「ある男とは？」

「わが家にまつわるあらぬ噂を流す輩、十兵衛じゅうべえという男だ」

「その方と面識はあるのですか？」

「顔は見たことがある。私は十兵衛の行動を監視していた。あの男は、武士だというのに賄賂で得た金を、女遊びや賭けで使っている、ろくでもない輩だ。ある日、酒に酔った十兵衛がわが家のことを容赦なく馬鹿にしたため、かつとして、肩を斬ってしまった。近くの鍛冶屋に言伝を残したはいいが、このような遠回しなやり方でしか、お主に会えなかったのだ」

「刀に血がついておりましたが……？」

「正気に戻ったのが、刀を仕舞った後だった」

「そういうことでしたか」

靈斬は一人、納得したようにうなずいた。

「というと？」

その武士が口を挟んだ。

「いえ。では、噂はただのほらであつたと。でしたら、その人物が立ち寄りそうな場所はどこですか？」

靈斬はその言葉を聞き流し、話を進めた。

「光里家近くにある自分の屋敷か、賭け場か……」

「そうですね。ありがとうございます。では一週間後にお会いしましょう」

そう言つて、靈斬は武士と別れた。

靈斬はいつもの服装で、夜中、江戸で一番大きな賭け場に足を伸ばした。

戸を開けて中に入ると、五つほどの集団に分かれ、それぞれ賭けに興じている。

商人、下級武士など身分関係なしに、酒を片手に男達は賭けを楽しんでいる。

「次はいくら賭けますかい？ 十兵衛の旦那？」

という声を聞き、靈斬は静かに歩み寄ろうとするが、別の男に声をかけられる。

「その兄ちゃんよ。少し、遊んでいけないか？」

そう誘つてきた男は、十兵衛の右隣で賭けをしていた。

「ああ」

靈斬は男の後をついていった。

男はその賭け場の仕切り人らしい。

その集団に加わると、たまたまだが、十兵衛と背中合わせの位置になった。

靈斬は賭けをしながら、十兵衛の方に聞き耳を立てた。

「有り金、全部かけてやらあ！」

「おっと、十兵衛の旦那、大きく出たな！」

その会話を聞いた靈斬は、思わず苦笑する。

——勝てるかどうか分からない賭けで、有り金を使い果たすほど、馬鹿な話はないな。

「兄ちゃんの番だぜ」

言われてかけ金を出す。銭五枚である。

「あっちの旦那とは大違いだな」

賭けを続けながら、靈斬は話を進めた。

「有り金をなくす奴は、結構多いのか？」

「ああ。大金をかけるころあいを間違えて、零になっちゃうのさ。でも、いつの間にか金を貯めて戻ってくる。その繰り返しさ。あの十兵衛って男もそう」

「あーあ、また負けちまったよ」

そんな中、十兵衛の落胆の声が聞こえた。

思わず、話していた男と顔を見合わせ、苦笑した。

「さて、俺はこれで上がるぞ」

「なに言ってるんだい！ これからがいいところだつてのに」

「引き際も肝心だろう」

「それもそうだな」

靈斬はそう言って、十兵衛を一瞥する。

十兵衛は有り金をすべて使ってしまったことをおいおいと泣いていた。どうやら、近くで酒でも引っかけたらしい。座っているとき、とても酒臭かった。

十兵衛を鼻で笑った靈斬は、賭け場を後にした。

翌日、目が覚めたのは、昼頃だった。

——夜は静かな方がいい。

昨晚の賭け場を見て、靈斬は素直にそう思った。

——十兵衛の情報も少しは手に入った。

それで良しと決め、まだ疲れが溜まっているのか、欠伸をした靈斬は、再び眠りについた。

靈斬が目を覚めたのは、ちょうど夕餉時だった。

「それにしたって、寝すぎだろうよ……」

溜息を吐いて、身体を起こす。

着替えを済ますと眠気覚ましに、散歩に出かけた。

頬にあたる夜風が心地いい。

——夜はやはりこうでなくては。

のんびりと夜道を歩いていると、声をかけられた。

「こんな夜更けに散歩かい？ 幻驚の旦那？」

「千砂か」

その声に靈斬は微かな笑みを浮かべた。

「お前の方こそ、どうしたんだ？」

「あんたが、なにか隠しているような気がしてね」

「つけていたのか」

千砂の回りくどい言い方に、靈斬は溜息を吐く。

「店にくるといい」

「そりや嬉しいね」

とついてくる千砂に、呆れるばかりの靈斬だった。

「あれから光里家の武士が俺の許にやってきた」

靈斬は店に着くや、片膝を立てて柱に寄りかかると話し始めた。

それを千砂は正座をして聞いている。

「ある男を自身番に突き出してほしいと依頼を受け、その男が立ち寄りそうな場所を、昨晩見にいっていた」

千砂は淡々と語る靈斬に疑問をぶつけた。

「立ち寄りそうな場所？」

「江戸で一番大きい賭け場だ」

「だから、あんた一人で？」

「そうだ」

靈斬はわずかに顔をしかめた。

「ちよっと待ってろ」

靈斬はそう言うや、刀部屋に引っ込んでしまった。

「いったい、なんだって言うんだい。急に……」

残された千砂は不満を漏らした。

「やはり、こうなったか」

靈斬は上着を脱いで、晒し木綿が巻いてある左肩と右腕を一瞥する。晒し木綿にはべつたりと血がついている。

裏稼業は休めるが、本職の仕事は休めない。

少し無理はしたんだろうと思いつながら、上着を着た。

——たしか、刀を打っているときに痛みがあったな……。

靈斬は思い当たる節を思い出し、千砂にどう言おうか考えながら、苦笑した。

「傷でも開いたのかい？」

千砂の許へ戻ると、開口一番にそう言った。

「どうして分かった？」

「血の匂いがしたからねえ。それで、四柳さんのところへいくのかい？」

「お前は猟犬か。……いくが、ついてくるのか？」

そう言う千砂に、靈斬は呆れたように突っ込みを入れた。

「そりゃね」

「なにがあっても知らんぞ」

面白そうな千砂に対し、靈斬は冷たく言い放った。

二人は診療所に向かって歩き始めた。

診療所に二人で顔を出し、四柳と靈斬は奥の部屋へ。

「この馬鹿もんが！」

しばらくして、四柳の怒号が響く。

その声の大きさに千砂は飛び上がった。

対する靈斬はうるさそうに顔をしかめただけだった。

四柳が怒ったのは、靈斬が傷を悪化させていたことだ。

「そう怒鳴るな」

「お前が言うこっちゃない！ これじゃあ、仕事もできんぞ！」

「……そうか」

靈斬は痛み顔をしかめながら、ぽつりと呟いた。

「どれくらいで治る？」

「三日。ただし、今日はここに泊まれ。それと、仕事は厳禁だ」

「……分かった」

靈斬は痛み堪えながら、一息吐くと、仰向けに寝た。

それから十分後、すべての治療が終わり、靈斬は深く息を吐いた。

額の汗を拭った四柳は、靈斬に言った。

「ゆっくり休め。嬢ちゃんには俺から言っておく」

「……ああ」

靈斬は疲れた声で言い、目を閉じた。

それを見届けると四柳と助手達は部屋を後にした。

四柳は千砂の許に戻ると、まずは詫びた。

「悪かったな」

「気にしないでおくれ」

「……四柳さん、ひとつ聞いてもいいかい？」

千砂は静かな声で尋ねた。

「ああ」

「靈斬は、いつもああなのかい？」

その質問に四柳は苦笑した。

「ああ。俺も本職を休めとまではあまり言えない。そんなに金がないように思えんがな」

「それは、どうして？」

四柳は重い口を開けた。

「……まだ会って間もないころ、俺は仕事を休めと言ったことがある。そうしたら、あいつが怒ってな。それだけはごめんだと。そんなことできるか！ とな」

「そうだったのかい。靈斬らしいね」

ふっと千砂が笑った。

「今回だけは素直に言うことを聞いたが、ありやあ、また仕事するんだろ？」

「たぶんね」

「どうして、そこまでして続けるのか、俺は知りたくない」

「あたしは知りたいかも」

「ほう。そりやあ、どうして？」

四柳は驚いた顔をして、千砂を見つめる。

「さあね」

「そうかよ」

「じゃ、あたしはこれで。靈斬のこと、よろしく」

「任せておけ」

その言葉にうなずいて、千砂は診療所を後にした。

そのころ靈斬は微睡まどろみながら、幼いころのことを思い出していた。

名すら呼ばれず、兄ばかり可愛がられていて、自分のことはなんとも思っていない親。最初は理不尽だとも思ったが、彼らの様子を見てみるとそれも普通なのかと思っていた。

「……夢か」

目を開けると、腕と肩に激痛が走る。それに堪えながら、内容を思い出す。心がどす黒いなにかに覆われていくような気がした。

靈斬は周囲に視線を走らせると、差し込んでくる光から朝だと気づかされる。

「入るぞ」

その声に応えると、四柳が部屋に入ってくる。

「起きるな。どうだ？ 具合は」

身を起こそうとした靈斬を、四柳が止めた。

「まだ痛む。無理にでも動けそうだが」

「動くな、馬鹿」

と四柳は怒りをあらわにする。

「そうだよな」

靈斬は微笑した。

「この腕じゃ、仕事はできないな」

三角巾で吊るされた右手を少し振って、靈斬は苦笑する。

「そこ、落ち込むところだろう」

「そうなのか？」

「ま、お前の落ち込んでいるところなんざ、見たくねえや」

四柳の言葉に、靈斬はふっと笑った。

「だが、そろそろ帰った方がいいだろう」

「そうは言ってもな……。うん？ どうした」

助手が駆け寄ってきたので、四柳は話を聞く。

「靈斬」

「ん？」

「嬢ちゃんがきたってさ」

「そうか」

「失礼するよ」

言いながら、千砂が入ってきた。

「具合はよくなさそうだね。表情はいつも通りなのに」

「こいつ、あんまり顔に出ない奴だからな」

「そうだったね」

靈斬が口を挟む間もなく、話が進んでいく。

「なにをしにきた」

「見舞いに」

靈斬は息を吐いてゆっくりと半身を起こす。二人はひやひやしながら見守った。

「そんなに心配するな」

「悪いけれど、説得力ない」

と千砂にばっさり切り捨てられる。

靈斬は苦笑した。ゆっくりと上着に袖を通す。

「起きていた方が楽か？」

四柳の間に靈斬がうなずいた。

「そろそろ帰る」

ゆっくりと立ち上がった靈斬を支えようとする千砂を止め、一歩ずつ確かめるように歩いていく。

「四柳、じゃあな」

「ちゃんと休め。それと二日後、こいよ」

「ああ」

靈斬は振り向きもせず歩き出す。

千砂はその背を追った。

帰り道、靈斬が口を開いた。

「お前も物好きだな」

「そうかもねえ」

千砂は暢氣のんきに言った。

「怪我がよくなったら、うちのそば、食べにきなよ」

「ああ。それと光里家のこと、調べておいてくれ」

靈斬はそう言って千砂と別れた。

靈斬は店に着くや看板が支度中になっているのを確認すると、戸を閉める。

歩いただけなのに、予想以上に疲れが溜まっていた。

着替えもせずなんとか階段を上ると、布団の上に倒れ込んだ。そのまま眠りについた。

仕事ができないとなると、靈斬にとっては暇でしかなかった。

一日中、寝て過ごし、寝ざめが悪いときは酒を呑み、再び眠った。

断続的に思い出す過去の出来事。それに今でも翻弄される自分がいることは、認めざるを得なかった。忘れようとする、逆に忘れられなくなる。それが嫌で仕方がなかった。

一日目はまったく寝れず、二日目の朝は寝ざめが悪かった。

小さく舌打ちをした靈斬は重い身体を動かし、着替えを済ませると診療所へ向かった。

「ちゃんときたな」

「当然だろう」

四柳はいつものように靈斬を奥の部屋に通した。

「診せてみる」

靈斬は黙って上着を脱ぐ。

四柳は右腕と左肩の晒し木綿を解いて、傷の具合を見ていく。

真剣な顔つきで傷を見ていた四柳が治療を開始する。

「経過は良さそうだな。一日中寝ていたのか？」

「ああ」

「お前らしいな」

四柳は苦笑する。

「酒もたまに呑むとうまいもんだな」

「俺は毎日呑まなきゃ、やってられん」

「そうか」

今度は靈斬が苦笑を浮かべる。

「終わったぞ」

「ああ。じゃあな」

靈斬はそう言い、四柳に背を向ける。

「靈斬、たまには呑もう」

「そうだな」

四柳の一言に苦笑した靈斬は、診療所を後にした。

決行まで残り二日。

靈斬は完成させた刀を並べ、店番をしていると一人の武士がやってくる。

「いらっしやいませ」

「この刀を研いでもらいたい」

「承知いたしました」

その間、武士にお茶を出し待たせると、靈斬は受け取った刀を手にも奥の部屋へと入っていった。

丁寧に何度か砥いでから、武士の許へ向かう。砥いで仕上げるまでの時間はおよそ数分。

「お待ちせいたしました」

武士は刀を受け取ると、鞘を抜いて状態を確かめる。

「いい腕だな」

「ありがとうございます」

武士はそう言い、お代を渡してくる。

靈斬がそれを受け取ると、店を出ていった。

靈斬はその武士が戸を閉めるまで、頭を下げていた。

その後、靈斬は二日ぶりにそば屋に顔を出した。

「いらっしやいませ！ あら、幻鷲さん、こちらへどうぞ」

靈斬はいつもの席に座り、注文を済ませ、そばを待った。

その間、常連客の一人が声をかけてきた。

「二日も、店、開けてなかったらしいじゃねえか。大丈夫なのか？」

「二日くらい閉めたって、商売に影響出ねえよ」

「まあ、腕がいいって有名な幻鷲さんなら、それもそうか」

「なに暢気なこと言っているんですか。あなたも、幻鷲さんくらいに働いたらどうです？」

千砂の口調から、この常連客は、あまりまともに商売をしていないらしい。

「千砂ちゃんまで、そんなこと言うなよ」

「自覚しているだけましだな」

「どうなんでしょうね」

靈斬の言葉に、千砂が苦笑する。

「おまちどうさま」

千砂は言いながら、そばを置く。

靈斬は礼を言いながら、そばを啜る。

その話を聞いていた別の常連客が口を挟む。

「羨ましい。俺なんて店二日も閉めちまったら、これにもありつけねえよ」

言いながら、箸でそばを指さしてみせる。

「幻鷲さんは真面目に働いているから、それでも平気なんですよ」

「そういう奴なら、もう一人知っているぞ」

靈斬はそう言い、千砂に視線を向けた。

「私……ですか？」

千砂はきよんとする。

「千砂ちゃん、その顔、可愛い！」

「もう！ 幻鷲さん、余計なことを言わないでください！」

「悪かった」

靈斬は言いながら、お代を置くと、店を後にした。

その日の夜、靈斬は黒の長着と同色の馬乗り袴を身に纏い、その上から黒の羽織りを着る。短刀を懷に仕舞い、口と鼻を布で隠す。数日ぶりに十兵衛の屋敷に向かった。

その途中、忍び装束姿の千砂に会った。

「首尾はどうだ？」

「噂のような暗い話はなかった」

「十兵衛の方が怪しいか」

「あたしもそう思う。ただ、そんな家なのに、どうしてそこまでの噂が広まったのかねえ？」

「十兵衛に話を聞けば分かることだ」

「そうだね。もしかして、いくのかい？」

「そうだが？」

「あたしも」

「好きにしろ」

靈斬はぶつきらぼうに吐き捨てて、夜の街を駆けた。

その後を千砂が追い駆けた。

十兵衛の屋敷に忍び込んだ靈斬と千砂は、思わぬ光景を目にした。

天井の板をわずかにずらして見えたのは、浴びるように酒を呑み、おいおいと泣く十兵衛の姿だった。

二人は思わず顔を見合わせた。

十兵衛の声が聞こえてきた。

「金がねえよう。つまんねえよう」

十兵衛は言いながら、酒を呑み続ける。

靈斬は溜息を吐いて、その様子を見る。

ちらりと千砂に視線を向けると、不機嫌そうな色が浮かんでいた。

これ以上、様子を見ても無駄だと思ったのか、千砂が靈斬の肩に手を置く。

うなずいた靈斬は、千砂とともに十兵衛の屋敷を後にした。

「どうしようもない奴だったねえ」

「まったくだ。面倒なことを起こさなければいいが」

「そうだね」

「頭が痛くなってきたな、ったく」

帰り道、二人は十兵衛の愚痴を言い合っていた。

――世の中には、どうしようもない屑くずがいるのかもしれない。

靈斬がそう思うほど、十兵衛は酷かった。

自業自得であるにもかかわらず、賭けや酒に溺れるその姿が。

千砂はその間、なにも言わず隠れ家までついてきた。

「ひとつ、聞いていいか」

隠れ家に着いて、しばしの沈黙の後、靈斬が口を開いた。

「なんだい？」

「今回も俺の仕事を見届ける気か？」

「もちろん。悪いかい？」

「いや、少し考えたかったただけだ」

靈斬は即座に否定し、そう告げた。

「考えたかった、ねえ……」

千砂はその言葉に引っかかったのか、呟いたものの、靈斬には聞こえていなかった。

「決行は明日の夜。場所は、十兵衛の屋敷だ」

靈斬はそれだけ告げて、隠れ家から姿を消した。

「分かったよ」

誰もいなくなった隠れ家で一人、千砂は呟いた。

翌日、刀の持ち主である光里家の武士が、靈斬の店を訪れた。

「お待ちしておりました」

「前置きは良い」

「では、こちらへ」

靈斬は武士を奥の部屋へと通した。

「あれからそれなりに経ったが、なにか分かったか？」

「おっしゃる通り、十兵衛とはろくでもない男であったということ。それから、まだ断定はできませんが、なんらかの形で、十兵衛本人が噂を広めたのではないかと。申し訳ございません。私が調べるには少々荷が重く、この程度しか判明せず……」

「気にするな。こちらでも気になったのであれから調べてみたが、あいつは下級武士の三男坊で出来損ない。ろくに働いてもいない。というより、あの男が真面目に働いていたと

いう話は、今まで聞いたことがない」

さすがは武家といったところか。少々、情報網に違いがあるようだ。

「そうでございましたか」

「成功報酬として、小判十両出す。頼むぞ」

「お任せください」

靈斬は深々と頭を下げた。

早めに着替え始めた。黒の長着と同色の馬乗り袴を身に纏う。黒の足袋を履き、黒の羽織りを着る。同色の布で鼻と口を隠す。刀を帯びた靈斬は隠れ家に向かった。

彼が到着するよりも先に、忍び装束の千砂が待っていた。

「決行まで、まだ三十分はあるぞ」

靈斬は言いながら、顔の下半分を覆っている布を下ろした。

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ」

「……」

靈斬は困ってしまい、口を閉じる。

すると、千砂が笑い出す。

「ふふっ。あんたでも、そんな顔、するんだねえ」

「困らせるようなことを言うからだだろうが」

靈斬はぼそつと吐き捨てた。

千砂は内心で安堵した。先ほどまで険しい表情を浮かべていた靈斬の顔が、ほんの少し、緩んだことに。

このとき気づいたのだが、靈斬は死んでもいいと思っっているのか、その眼には並々ならぬ決意の色が見て取れた。そんな眼を千砂は見ていたくなかった。

だから、とつさに誤魔化そうとした。無理だろうと分かっている。

そんなこと、つゆほど知らない靈斬は、口を開いた。

「どうして、俺の仕事に興味を持つ？」

「今回の仕事が終わったら、教えるよ」

「そうか」

靈斬は布を引っ張り上げ、鼻まで隠すと、先に隠れ家を発った。

靈斬は十兵衛の屋敷に着くや、正面の扉を開けさせ、下仕えの者を気絶させた。正面から堂々と乗り込んだ。

「曲者！」

という言葉に続いて、数人の男達が姿を見せるが、一步進むごとに一人ずつ倒れていた。

そのたびに返り血を浴びるも、本人は気にもせず、奥の座敷を目指して廊下を進んだ。

その様子を、屋敷の反対側で見ていた千砂は、前回同様、息を吞んでいた。自分の周りには敵も適度に倒しつつ、靈斬の後を追った。

屋敷の一番奥の座敷に靈斬が辿り着くと、刀を持ってがたがたと震えている十兵衛がいた。その姿はあまりにも哀れだった。

「こ、殺しに、き、きたのか？」

十兵衛は怯えながら声を出した。

「違う」

靈斬は言いながら、周囲に視線を走らせた。

千砂が屋敷の天井板をずらし、上から見ていることを知りながら無視。逃げ場がないことも無視し、こう言った。

「噂をどうやって広めた？」

「こ、答えるわけがないだろう」

「ならば」

靈斬は言葉を切り、十兵衛との距離を詰める。刀を十兵衛の肩に置き、刃を首にぴたりとつける。冷たい感触に十兵衛は情けない声を上げた。

「ひいひい！」

「黙れ。そこから動くな」

靈斬はそう命じ、簞笥の中などを捜し始めた。

十兵衛が座っていた後方、小さな簞笥に手を伸ばそうとした瞬間、

「や、止める！」

十兵衛が叫んで斬りかかってきた。

「動くな、と言わなかったか？」

靈斬は半歩下がって、振り向きざまにその刀を受け止めると、ぞっとするほど冷ややかな声で告げた。

靈斬は刀に込めた力をわざと抜いて、十兵衛の体勢を崩す。右腕を斬り、無防備になった腹を蹴り飛ばす。

十兵衛の身体はそのまま襖を二枚破り、壁に激突した。

靈斬は十兵衛が気を失っていることを確認すると、先ほど手を伸ばしていた簞笥の中身

を確認した。

中に入っていたのは、瓦版との約束事と題した封書だった。

中身を見ると、瓦版に嘘の情報を流したという事実を隠し続けること、それができている間は、稼ぎの三分の一を支払うという内容だった。

——これが証か。あかし

靈斬はそれを懷に仕舞うと、先ほどから出入り口を塞いでいる男達を睨みつけた。

「怪我をしたくなければ、そこを退け^ど」

そう告げると、男達は怯んで、彼に道を譲った。

遠くからピーツと笛の音が聞こえてくる。

靈斬と千砂はその場を後にした。

靈斬は十兵衛の屋敷から、自分の店に直行した。

依頼完遂後に、成功報酬が支払われる手はずになっていたからだ。

靈斬が慌てて刀を鞘ごと抜き、隠し棚に仕舞う。着替えを済ませると同時に客がきた。

「御免！」

「いらっしやいませ」

と言いながら出ていくと、光里家の武士だった。

支度中の看板を確認し、奥へ通した。

「それで十兵衛はどうした？」

「気絶するまで、痛めつけておきました」

「そうか。報酬だ」

武士は言いながら、小判十両を置き、靈斬の前にすつと差し出した。

「では、私からはこれを」

靈斬は同じように、封書を差し出した。

「これは？」

「見ていただければ分かります。これで光里家の暗い噂は払拭されることでしょうね」

靈斬は言いながら、報酬を袖に入れた。

「そうか。承知した。では、失礼する」

「なにかありましたら、またご来店くださいませ」

靈斬は深々と頭を下げた。

それからしばらくして、戸を叩く音が聞こえてきた。

「ちよいと失礼するよ」

普段着の千砂が顔を見せた。

「なんの用だ」

「あんたに言わなきゃと思つてさ、どうして仕事に興味を持つのかつて」

靈斬は無言のまま奥へ通し、お茶を出すと正座をした千砂が目を丸くする。

「長いんだろ。そんな顔するな」

ぼそつと吐き捨てて、靈斬は徳利と盃を持ってきて、壁に寄りかかった。

「珍しいこと続きだねえ」

のほほんと言いながら、千砂はお茶を飲んだ。

「それで？」

「不思議なんだよ。自分が死ぬかもしれないという覚悟までして、あんな殺気まで放つておいて、相手を殺さないなんてさ。そうそうできるもんじゃない。あんた、相当な剣の使い手だろう？」

靈斬は酒を煽る。

「そこまで分かるのか」

靈斬は敵わない、というように溜息を吐く。

「褒めたつてなにもでやしないよ。それで、どうなんだい？」

「……その通りだ。俺は武士が憎い。依頼を受けるたびに斬つてやろうかとすら思う。だが、そんな下郎にはなりたくないんでな」

「この稼業は、いつからしているんだい？」

靈斬は遠い目をしながら言った。

「俺の刀が売れ始めてからだ。……三年か」

「そんなに前から……」

千砂は唇を噛んだ。そう言っているくせに、靈斬は表情ひとつ変えない。

「どうしてそんな顔をする？」

靈斬が不思議そうに尋ねた。

「あんた、辛くないのかい？　こんな稼業をしていて」

千砂は思わず食つてかかった。

「辛い……。そんなもん、ずいぶんと前に忘れちゃったよ」

「……」

千砂は言葉を失った。

——辛さを忘れたなどと、どうしたら口にできる？

千砂はそう思わずにいらなかったが、なにも言えなかった。

重苦しい沈黙が、二人の間に降りた。

第三章——追憶

数か月後、刀の修理依頼を受けた靈斬は、違和感を覚える。

刀の先端がなにか固いものに当たったのか、わずかに歪んでいるのだ。

少々雑につくられたのだろう。それこそ同じ刀でない限り、このような歪み方はしないはずだ。

——いったい、なぜ……？

靈斬の疑念は晴れることがなかった。

靈斬は気分を切り替えようと、そば屋に立ち寄った。

「今日はやけに難しい顔をしてるじゃねえか」

「そうか？」

常連客の言葉にそう返す。

「ああ、眉間にこう、しわを寄せて、ちよつと怖いくらいだ」

常連客は靈斬の真似をして見せ、本心を述べた。

それを見ていた他の客らが、

「似てない」

と声を大にして言う。

「うるせえ！ ……つたく」

常連客は席に着いた。

そんな光景を見ている靈斬の横顔は、わずかだが、先ほどまでの険しさが緩んでいた。

「面白い人達ですよね」

千砂がいつものそばを持って近づいてきた。

「ああ」

いただきます、と手を合わせ、そばを啜った。

三日後、修理を依頼した武士が姿を見せるなり、小判五両を出して言った。

「我が家の悪事を暴くため、力を貸してほしい」

「どういうことでしょうか」

「我が佐田家にはある噂が実しやかに囁かれています」

答えになっていないという突っ込みは入れず、靈斬は先を促した。

「噂、ですか？」

「賄賂の疑惑だ。私はそれを訴えたい」

——訴えたい？ 自分の家をわざわざ潰すようなものだ。いったいこの男、なにを考えている？

靈斬は眉をひそめた。依頼人はたいてい、誰かに対する憎しみや怒りを持っており、それを理由にしている場合が多い。だが、この男、そうではない。

「自ら声を出したところで捻り潰される。……だから、ここへ？」

「そうだ」

「……依頼の件はひとまず保留とさせていただきます。それよりも、これを」

靈斬は修理した刀を差し出した。

「感謝する」

「もしや、この刀で誰かと斬り合いになりましたか？」

「ああ。賄賂の中心人物とされるお方とな。本気でかかってこいの命^{めい}だった」

「刀に弾かれましたか？」

「なぜ、それを」

武士は、はつとして、靈斬の顔を凝視する。

靈斬は苦笑して答えた。

「刀の状態を見ただけです。……依頼の件ですが、明日まで、時間をください。少し、考えたいのです」

「分かった。出直すでしょう」

武士はそう言って、小判五両を懷へ仕舞うと、店を後にした。

武士が帰ってから、靈斬は残りの仕事を終えた。

床に寝転ぶと、依頼をどうするかを考えていた。

——自分に火の粉がかかってもいい、と言っているようなものだった。

それが本心なのか、自棄なのかはさておき。

——そこまでの覚悟は買うべきか……？

一人、難しい顔をして、考え込んだ。

翌日、約束の時間きっかりに武士が姿を見せた。

商い中の看板を支度中に変えてから、武士を奥へ通した。

「して、依頼は受けてもらえるのだろうか」

「はい。ですが、ひとつ、確認させてください」

「確認？」

「人を殺めぬこの私に頼んで、二度と後悔なさいませんか？」

「もちろんだ。では、前金を」

と言い、小判五両を差し出した。

「分かりました」

靈斬は小判を袖に仕舞う。

「私が知っている限りの情報を、お教えいたす。おそらく、賄賂の中心は、佐田芳之助と吉之助親子でござる」
よしのすけ

「ありがとうございます。こちらでも調べてみますゆえ、一週間後にここへいらっしゃいませ」

「分かった。これも渡しておこう」

武士はそう言い、紙を二枚差し出してきた。靈斬がそれを受け取るのを見て、武士は店を後にした。

夜も更けてきたころ、床に寝転んで、考え事をしていた靈斬が身体を起こす。

——あいつのところへいくか。

靈斬は隠れ家へと足を運んだ。

「いるか？」

「なんの用だい？」

「調べてほしい奴らがいる。一緒に探るってのはどうだ？」

「それで、誰を？」

「佐田芳之助と、その息子の吉之助」

靈斬は懷から二枚の紙を取り出して、千砂に見せた。

「これは、ずいぶんと丁寧に」

千砂は思わず呟いた。

それは二人の肖像画だった。依頼人から預かったものだ。絵師に頼んで描かせたのだろう。紙に名まで載っていた。

「俺もそう思った」

「顔は覚えたよ。それでいつ屋敷に忍び込むんだい？」

「明日の夜だな」

「分かったよ。……この前、武士が憎いつて話していたけど、どうしてだい？」

「……俺は元を辿れば、武家の生まれだ。だが、育った環境が悪かった。兄に気にかける親だったから、俺のことはどうしてもよかったんだ。自分の幼名ですら憶えていない」

「……」

——なんということだ。名を呼ばせず、兄ばかり気にかけるなど。

千砂はそう思ったのか、悔しそうに唇を噛んだ。

その横顔を見ながら、靈斬は語った。

当時、父、母、三つ年上の兄である錦と暮らしていた。しかし、両親は彼を育てることはなく、乳母に全てを任せ、次期当主となる錦の教育に全力を注いだという。そして、次男の名を決して呼ぶなど、父が命令していた。

当時三歳で、まだ口の回らない彼は乳母に聞いた。

「どうひて、僕はお父様とお母様、兄様と、別なの？」

「お父上がお決めたことなので、私には分かりません」

乳母は悲しそうに目を伏せて言った。

「なら、お父様に聞いてくる！」

たまたたと駆け出そうとした彼を、乳母が止める。

「なりませぬ！」

乳母の厳しい声にびくっと身体を震わせる。

乳母の許へ戻った彼は、肩を落とした。

それから五年、彼が八歳になったころ、乳母がこっそりと、木刀を渡してくれた。親に見捨てられても武士の子だ、と彼に認識をさせるかのように。

彼の部屋からは昼間、錦が剣の稽古をしているのが見えるため、その様子をじっと見つめていた。

そして皆が寝静まったころ、稽古で見ていたように、右手で木刀をつかみ、構える。息を吐いて、素振りを始める。空気を裂く音が心地いい。

ひたすら木刀を振り下ろす彼の姿を見ていたのは、乳母だけだった。彼女はその姿を見て、はっとした。

彼が秀でているのは、勉学だけではなかった。今まで、勉学以外にすることがなかったため、彼の可能性に気づけなかったということもある。

木刀を振るう横顔は、険しい。その動きは、少しの隙もない。初めて木刀を振るう者とは到底思えない、大人顔負けの気迫に満ちている。

——兄と弟。当主になるのはともかく、武士として成長できるのは、どちらだ？ 兄は賢いというわけでもなく、武術に優れているわけでもない。一方、弟は賢いし、武術を学ばせれば、素晴らしい才を発揮することだろう。しかし、それをさせないのが親だ。名を呼ばせないところを見ると、彼の存在をこの家から消そうとしているように、思えてならない。もう彼は、自分の幼名など憶えていないだろう。とくになんの才もない普通の親から生まれたはずなのに、どうしてここまで違うのか。見た目だけではなく、性格、環境、全てがこの兄弟は正反対だ。

あまりに彼が可哀そうだと思う乳母は、視線を離し、部屋に戻った。

彼は内から湧き上がる感情を抑えて、木刀を振るっていた。父が兄に対して、感情に任せて刀を振るうな、と言っていたことを思い出したからだ。むやみに斬りかかってはいけない、冷静であることが重要なのだ、と。

その言葉が彼に向けられたことなど、一度もない。それでも構わなかった。彼の望みは生きていくための術^{すべ}を身につけること。そのうちのひとつが、剣術であっただけ。

彼なりのやり方で、剣の腕を磨く日々が始まった。

それから、密かに剣の腕を磨き続けていた、ある日の明け方のことである。

練習を始めてから、二年の歳月が流れ、彼は十歳になっていた。練習の様子を見ている乳母が言うには、兄や父にも勝てるとのことだった。その言葉を聞いた彼は、内心で首をかしげた。

そのときの光景を思い出しながら、いつものように練習をしていた。

「なにをしている！」

父の怒鳴り声が聞こえる。彼は振り返ろうとするが、嫌な予感がしたため、木刀を構えたまま、身体を反転させる。父は眦^{まなじり}を吊り上げ、木刀に手を伸ばす。彼はその手を木刀で打った。

父は痛みに顔を歪め、睨みつけてくる。しかし、彼に手を出すことはなく、

「……ついてこい」

と言って、歩き始めた。

「錦！」

連れてこられたのは、錦の稽古場である中庭だった。

「はい！」

返事をして部屋から出てきた錦に、父は無言で木刀を持たせる。

「父上？」

錦の言葉に対し、父は彼を指差した。本人は木刀を構えている。

「……勝てば、よろしいですね？」

その言葉にうなずいた父は、両者の間に立ち、叫んだ。

「いざ尋常に、始め！」

「武士として育てられていないお前になんか、負けない！」

そう言つて、錦が木刀を振り下ろす。

彼はその攻撃を受け止めた。

「なんで……。お前が……！」

「知るか。……稽古を受けていたんだろう？」

次々に繰り出される、隙だらけの攻撃を受け止めながら、彼は問う。

「当たり前だ！」

「その割には、教えを忘れている」

「お前に分かるのか？」

「感情任せに刀を振るうと、自身を危険に晒す」……お前の父は、そう言つてなかったか？」

「なっ……！」

「隙あり」

彼は言いながら、兄の左手を打つ。そのまま、木刀の先を喉に向けた。

「……そこまで！」

父の声が響いた。

すぐさま母が錦に駆け寄る。

「大丈夫ですか？ 痛いでしょう？」

「これくらい、平気です」

母の言葉に、錦はそう呟いた。そして、二人は去った。

残ったのは父と彼だけ。

「いつからだ。……いつから、お前は剣の腕を磨き始めた？」

父は落ちた木刀を拾って構え、彼に問う。その声音は静かだった。

「今から、ちょうど二年前です」

「どのように腕を磨いた？」

「中庭で稽古をしているのをじっと観察し、夜に記憶を辿りながら、練習を繰り返してきました」

「腕に自信があるようだな」

「ありませんよ」

「本気で向かってこい。お前の腕がどれほどのものなのか、私に見せてみる」

「……分かりました」

彼はそう言い、右手で構える。

「なぜ、両手で構えんのだ！」

「その方が、動きやすいんですよ。……こちらから、仕掛けますよ」

彼はそう言い、父との距離を詰め、木刀を振り下ろす。それをなんとか受け止めた父であったが、彼の力に^お圧されている。

父の顔には怒りと驚愕が入り混じった、複雑な表情が浮かんでいた。

父は一步下がって、彼の体勢を崩そうと突きを繰り出した。が、その攻撃は躲され、体勢を戻そうとしたところで、木刀を喉につきつけられた。

「信じられん……」

「これが現実です。正直、俺も驚いています」

「驚く？」

「あなたに勝てる、とまでは思っていなかったんです。この武家の将来が楽しみです」

彼は冷たくそう言って、木刀を喉から引き、背を向けた。

「た、頼む。家に戻ってくれ。私が間違っていた。お前に当主の座を渡そう。今までのことは、水に流してくれないか」

彼はその申し出に対し、鼻で笑った。肩越しに父を睨みつけた。

「断る。あなたを赦すつもりはありません。ここに、俺の居場所はない」

彼はそう言い放った。乳母とともに、育った武家を去った。

「最低な奴らだった」

靈斬は憎しみをあらわに呟く。

「本当に、その通りだよ。どうして、あたしにこんな話を？」

「お前は俺が興味深いという変わり者だからな。これくらい言ってもいいかと、思っただけだ」

「そうかい。あたしは、親の顔すら憶えてない」

呟くように言う。と靈斬は、千砂の顔を凝視する。

「物心ついたとき、あたしは忍びの里にいた。あたしは貧しさあまりに、売られてここに来たらしいって教えてもらった。そこからはずっと修行。子どもらしいことなんてなにもとつない。ただ、強く優秀な忍びになるために、育てられた」

千砂は遠い目をして、簡単に経緯を語った。

「そうか……」

ほんのわずかだが、お互いの距離が縮まった瞬間でもあった。

翌日の夜中、靈斬と千砂は、佐田家へ忍び込んだ。

千砂は屋根から、靈斬は中庭から、佐田家を徹底的に調べ始めた。

靈斬は廊下を歩いていく人を一人一人、観察。千砂は屋根裏へ侵入し、天井板をずらしながら、一部屋ずつ、該当する人物がいなか捜した。

千砂は脇息に寄りかかっている芳之助を見つけ、静かに様子を見守った。

しばらくして靈斬の方では、息子の吉之助が部屋に入っていくのを確認する。

千砂はそのまま、様子を見ることにした。

靈斬は部屋の近くまでいき、聞き耳を立てた。

「おお、きたか。吉之助」

「父上、なに用でしょうか？」

「その前に、もう少し」

「は」

吉之助は父との距離を詰める。

「例の件、どうなっておる？」

「あの方への賄賂ですね？　すでに準備は整っております」

「よし。では、あの方へ伝言だ。六日後にここでお渡しするとな」

「承知いたしました」

吉之助はそう言い、座敷を後にした。

靈斬は吉之助が出てくるころには、中庭に身を潜めていた。千砂と合流し、屋敷を後にした。

隠れ家に戻ると、靈斬が口を開いた。

「決行と同じ日で、まだ良かったかもしれない」

「そうだねえ」

「じゃあ、またそば屋でな」

「はいよ」

二人はその場で別れた。

それから六日後の昼、靈斬はいつものようにそば屋を訪れた。

相変わらず店は賑やかで、大声で注文を済ませなければならぬくらいだった。

「すっかり常連になったな！」

「このそばは美味いですから」

年上の常連客にそう言われると、靈斬は苦笑して答えた。

「嬉しいことを言ってくださいますね！　ありがとうございます」

千砂が言いながら、そばを持ってきた。

嬉しそうに戻っていく彼女の背中を見送りながら、そばを啜った。

それから数時間後、店に依頼人が訪れた。

「お待ちしておりました」

「して、首尾は？」

「本日の夜、佐田親子がある人物に、賄賂を渡すことが分かりました」

真剣な顔をして依頼人がさらに聞く。

「場所は？」

「佐田家です」

「分かった」

「ああ、忘れるところでした。最後に忠告を。私は彼らを逃がさず倒しますが、よろしいです
すね？」

靈斬は思い出したというように、話し出した。

「ああ」

「それから、騒ぎが落ち着くまでは近づかない方が賢明でしょう。証など、自身番に見つけ
させれば良いのです」

靈斬はにやりと嗤^{わら}った。

「そうかもしれぬな」

と言い、依頼人は店を後にした。

靈斬は決行の時間が近づくと、着替え始めた。黒の長着と同色の馬乗り袴を身に纏い、
その上から黒の羽織りを着る。短刀を懷に仕舞い、口と鼻を黒の布で隠す。刀を携え、
佐田家へ向かった。

決行まで二十分を切ったころ、靈斬は早めに佐田家に忍び込んでいた。
千砂も後を追ってきたようで、途中で会った。

靈斬は屋根裏に侵入し、取引が行われるであろう、座敷の天井板をずらし、様子を見て

いた。千砂も一緒だった。彼女にはあらかじめ、その場にいるように指示しておいた。

「これは、三井様。お待ちしておりましたぞ」

芳之助が深々と頭を下げた。

「良い。それより、例のものは？」

それを制した三井は、そう急かした。

「こちらに」

吉之助が進み出て、なにかを差し出した。

三井は中身——小判五十両を確認すると満足げな笑みを浮かべた。

「では、これにて」

「待て」

靈斬はそれを止めると、天井から座敷に降り立った。

「誰だ！」

大声を出すその他の武士達が五人、座敷へどたどたとやってきた。

「靈斬、と言えば分かるか？」

靈斬は恐れをなした三井を昏倒させる。

すると畳に小判が散らばる。

「いったい誰が貴様に頼んだ！」

「答える必要はない」

慌てて小判を拾っている吉之助の顔を蹴り上げ、靈斬は芳之助と対峙した。

「邪魔しおって！」

芳之助は抜刀し、すぐさま靈斬に斬りかかってくる。それを斜め前に半歩出て躲すと、

左肩を斬りつけた。両手で刀を振るうことはできなくなった。傷の悪化を恐れ、芳之助は

刀を畳に捨てた。

「隙あり！」

いつの間にか復活していた吉之助が、抜刀して靈斬に斬りかかる。

靈斬は振り返ることしかできない。

次の瞬間——

金属同士がぶつかり合う音が響く。

「ちよっと、参戦するよ」

苦無を構えた千砂がその刀を受け止めていた。

彼女の姿を見た吉之助の顔が歪む。

「好きにしろ」

千砂は振り下ろされる刀の力を利用して受け流すと、右肩を斬りつけた。

「ぎゃっ！」

吉之助が怯んだ隙に、苦無を逆手に持ち、頭めがけて振り下ろす。

その間に体勢を立て直した吉之助は突きを繰り出す。躲しきれず左肩を掠ってしまったが、怯まず苦無を振り下ろした。

吉之助が動かなくなったのを確認して、千砂は靈斬に向き直った。

靈斬は芳之助に刀を突きつける。

「人払いを」

「……者ども、下がれ」

五人の武士がしぶしぶ、去っていった。

「物分かりがいい」

靈斬はそう言い、柄で殴ろうとした。しかしそれを隙とみた芳之助は、小太刀を抜き放ちながら、突進してきた。腹を斬られた。鮮血が飛び散る。

襖にぶつかり、痛みに顔をしかめた靈斬は、身体を起こすと、首に手刀を食らわせる。大人しくさせると、静かに立ち上がった。

「近いな」

笛の音を聞いて、靈斬が呟いた。

腹から出血しているのにもかかわらず、その声はあまりにも静かだった。

「そうだねえ……」

答える千砂の声に元気がない。

靈斬は刀を仕舞い、千砂に駆け寄る。

左肩からの出血は止まる様子がない。

「傷は？」

「……浅いはずだよ」

千砂を座らせると、それだけ尋ね、吉之助の刀を鞘ごと抜いて、刀身を見る。

光の反射が鈍いことから、刀身にはわずかに、なんらかの液体が塗られているのが分かった。

靈斬は懷から紙を取り出すと、液体を拭き取って仕舞った。

靈斬は舌打ちをすると、千砂の許へ戻り、囁いた。

「走れないか？」

「そうだねえ……。ちよっと、きつい」

「悪いな。それと、喋るなよ」

靈斬は一言断り、左肩に触らないように、横向きにして抱き上げる。

傷口を布で塞いでやりたいところだが、下手に処置をしない方がいいと靈斬は思った。それで悪化させてしまったては余計に困る。

毒の回りが早いのか、千砂は虚ろな目で靈斬を見上げた。
静かに素早く、佐田家を後にした。

靈斬は診療所に直行した。

口を覆っていた布を乱暴に下ろして、大声を出した。

「四柳！」

「なんだよ！」

戸を開け、言い返した四柳は、靈斬に抱かれた千砂を見て目を丸くする。

「急いでくれ」

「分かった。そのまま、奥へ」

四柳の後に続いて、奥の部屋へいくと、千砂を静かに横たえる。

「なにがあった？」

「なんらかの液体が塗られた刀傷だ。傷は浅いが血が止まらん」

靈斬は言いながら、先ほど採取した液を見せた。

「この匂い、それとこの色……」

「なんとかなるか」

「すぐ解毒剤を作って飲ませる。向こうで待ってる」

「……分かった。着替えてくる」

苦しそうに息をしている千砂をちらりと見た後、靈斬はそう言い残し、いったん店に戻る。

十分後、青い着物を着た靈斬が診療所に顔を出す。

早く良くなればいいと焦る自分に驚きながらも、待つこと十五分――。

四柳が奥の部屋から出てきた。

「どうだ？」

胡坐をかいて座ったまま、靈斬が聞いた。

「解毒剤を飲ませて、今はぐっすり眠ってる。じきに毒も抜けるだろう。傷の方は大したことなかったぞ」

「そうか」

――良かった。

靈斬は内心でそう続けた。

安堵したのか、身体のだこかに激痛が走った。

靈斬は顔をしかめるだけでやり過ごした。

「会ったときも思ったが、お前、怪我してるな」

「お見通しか」

靈斬は溜息を吐いて、上着を脱いで、半裸になる。腹部に横一線の刀傷と、右肩に打ち身があった。

「ここで手当てする」

四柳は治療箱を持ってくると、刀傷から手当てを始めた。

幸い傷が浅かったので縫いはせず、薬草を塗った布を当て、晒し木綿で巻いていく。

その間、靈斬は顔こそしかめるものの、大人しくしていた。

「右肩には、これを当てとけ」

四柳は水を入れた革袋を靈斬に渡した。

「ああ」

靈斬はそれを受け取り、右肩に当てると、上着を肩にかけた。

その場に座っているのが疲れたのだろう。靈斬は柱の近くに移動し、寄りかかる形で片膝を立てて座った。

格子窓から空を見上げると、明け方が近いのか白んでいた。

「四柳、夜までここにいていいか？」

「いいぞ。嬢ちゃんも夜にならないと目覚めないだろう」

「そうか」

靈斬は深く息を吐き、ゆっくりと立ち上がる。

「おいおい！ まだ動いちゃいけないぞ！」

四柳は言いながら、靈斬に肩を貸す。

「千砂と同じ場所にいた方が、楽だろ」

「それはそうだがな……」

——素直じゃねえな。嬢ちゃんの様子が見たいって言えばいいのに。

四柳は内心で苦笑し、靈斬を支えながら奥の部屋へ向かった。

靈斬は四柳から離れると、襖の左隣にある柱に背を預けて座った。

「横にならなくて大丈夫か？」

「この方が楽だ」

靈斬は言いながら、革袋を差し出す。

冷えていたはずの革袋は生ぬるくなっていた。

「ちよっと待ってろ」

四柳はそう言って部屋を去った。

靈斬は千砂の穏やかな寝顔を眺めながら思う。

——一人で生きていくためとはいえ、どうして命を懸けるんだ。他に方法はいくらでもあるのに。

そう思わずにいられなかった。

四柳は革袋の水を替えながら、一人思案する。

——靈斬の焦った顔なんて、初めて見た。

理由はともかく、そのような部分があったことに安堵している自分に苦笑する。

——さて、あの二人はどうなることやら。

明けてきた空を見ながら、四柳は思った。

「靈斬」

「ん」

靈斬は革袋を受け取り、右肩に当てる。

「嬢ちゃんのこと、心配か？」

「まあな。……しくじった」

——素直だな。

四柳は内心でそう思いながらも、話を続けた。

「仕事するとき、ずっと一人だったのは、誰も巻き込みたくなかったからか？」

「そうだ。正直、あいつがいくと言いつ出したときには止めた。だが、聞かなかった」

靈斬は苦笑する。

「あの子は強情なところがあるんだな。……お前も、少し眠れよ」

「ああ」

うなずいた靈斬を見て、眠っている千砂にも視線を向けると、四柳は部屋を後にした。

靈斬が目覚めます。差し込んでくる光から、すでに日が傾き始めていることを悟る。

傷が痛み、思わず顔をしかめた。

「ん……」

「起きたか」

目を覚ました千砂に声をかけた。

「ここは……どこだい？」

「四柳の診療所だ」

「……そうかい。あんたは……怪我したのかい」

千砂は靈斬をちらりと見た。

靈斬は苦笑して答えた。

「まあな。……すまなかった」

「あんたが謝るようなことじゃないよ。怪我したくらいで」

「だがな……」

食い下がろうとした靈斬を、千砂を止めた。

「あたしが勝手に、ついていく、って言ったんだ。これくらい、覚悟してた」

「……そうか。次から、怪我、するなよ」

——頼むから。

靈斬は内心でそう続けた。

「あんたに心配されるのも、なんだか気持ちが悪いから、そうしようかね」

「なんだよ、それ」

「仲がいいな」

四柳が部屋に入ってくる。

「どうしてそう見えるんだ」

靈斬は溜息を吐く。

「嬢ちゃん、具合はどうだ？」

「少しずきずきするけど、だいぶ楽になったよ」

「そりゃあ、なによりだ。靈斬は？」

「いくらかましになった」

「そうか」

四柳は言いながら、新しい革袋を差し出す。

古い革袋と交換した靈斬は、右肩に当てる。

それを見た四柳は部屋を出ていった。

「あの勢いで突進されたら、打ち身のひとつやふたつ、できそうだね」

「そうかもしれないな」

「あんたに聞きたいんだけど、自分のことを一番に考えたことはあるかい？」

「戦い以外なら、ない。今さら、自分のために生きるつもりもない。そうでなければ、こんな裏稼業、始めたりなんかしなかっただろうよ」

靈斬はそう吐き捨てた。

「そうかい。あんたはあたしと真逆だね」

「真逆？」

靈斬は首をかしげた。

「あんたは他人のために生きる。あたしは自分のために」
千砂はゆっくりと言い、靈斬に視線を向けた。

「なら、どうして俺についてきた？」

「あんたに興味が湧いたからさ」

「それだけの理由で……」

「あんたなら、なんとかしてくるって、見捨てないって、どこかで思っていたからね」
千砂はしてやったりと言わんばかりに笑った。

「お前って奴は……」

靈斬は苦笑しながら溜息を吐いた。

数日後、武士が店を訪れた。

奥へ通すと、武士が口を開いた。

「あの騒ぎの後、賄賂として受け取るという書状が見つかった」
「そうですか」

「報酬だ」

武士は言いながら小判十五両を差し出した。

「また、なにかありましたら、おいでください」

靈斬はそう言って、頭を下げると、小判を袖に仕舞った。

第四章——呉服屋の悲哀

それから一か月後、靈斬はいつものように刀を作っていた。

「ごめんください！」

という声がしたので、靈斬は手を止めて表に向かう。

「なんの用でございますか？」

靈斬が言いながら戸を開けると、一人の女が立っていた。

「失礼ですが、幻鷲様で間違いございませんでしょうか？」

「はい」

「折り入った話があるのです」

靈斬は女を奥の部屋へ通した。

女にお茶を出し、正座をして靈斬は問いかけた。

「折り入った話とは？」

「ここにすれば、『因縁引受人』に会えると聞きました。あなたがそのお方ですか？」

「はい」

女は少し驚いた表情をした後、顔を引き締めると話し始めた。

「私は呉服屋の娘でございます。あなた様に修理の依頼をさせていただきたく、参りました。それから……ある武家に対しての憎しみが消えません」

「なぜ、憎んでいるのですか？」

靈斬が静かな声で尋ねる。

「……実の親を、殺されたからです」

そう言う女の声は氷のように冷たかった。

「その武家の名は、ご存知ですか？」

「西日家にしびです。当主の三津五郎みつごろう」

女は憎しみのこもった双眸を向けて言った。

「分かりました。では、人を殺めぬこの私に頼んで、二度と後悔なさいませんか？」

「はい。それでは、これを」

女は懷刀を床に置いた。

「どうか、あの家を壊してくださいまし」

「承知いたしました。では、一週間後、またお越しください」

靈斬が頭を下げると、女は店を去った。

靈斬は預かった懐刀の刀身に目を走らせる。

鞘とこすれた瑕きずさえも少なかった。

——ほとんど使われていない。

そう思いつつも、靈斬は目の細かい砥石で研ぎ始めた。

それから修理を終えると、床に寝転んで今回の依頼について考えていた。

——女からの依頼は初めてだな。

靈斬は身体を起こし、草履を履いて店を出た。

靈斬は、千砂の隠れ家に向かった。

「いるか？」

「はいよ」

千砂は応じると、靈斬を招き入れた。

靈斬は部屋に入るや、壁に寄りかかって片膝を立てて座った。

千砂は彼と向かい合うように、正座をする。

「依頼が入った。今回は西日家だ」

靈斬は静かな声で告げた。

「そうかい。あの家は昔、忍び込んだことがあるけれど、後ろ暗いことはなにも聞かなかったよ」

「そうか。西日三津五郎の情報を頼む」

「任せておくれ。二日、くれるかい？」

「ああ」

靈斬はそれだけ告げると、さっさと隠れ家を後にした。

千砂は部屋で一人、少し焦っているように見えた靈斬を疑問に思いながら、支度を始めた。

その日の夜、千砂は西日家に忍び込んだ。

千砂が見た光景は、家族皆集まって、静かに食事をとる西日家の姿だった。

千砂が見るのはいつも、不快になるものばかりで。今回のような普通の様子を見るのは、とても久しぶりで、新鮮だった。

食事を終え、全員がそれぞれに動き出す。千砂はその中での一番年上の男の後を追った。

その男は自室に入り、なにやらしたためている。
と、声が聞こえてくる。

「三津五郎様」

「どうした？」

「お客様がきております」

「分かった」

三津五郎が部屋に出て表に向かう。千砂もそれに続いた。

「夜分遅くにすみません」

「幻驚殿。いかがなされた？」

「たまたま、近くを通りまして。刀の調子が気になったものですから」

靈斬は愛想笑いを浮かべて答えた。

「ちようど良い。少し刀の切れ味が落ちておってな。近いうちに寄ろうと思っておったところよ」

三津五郎は言いながら、家の中へ招き入れる。靈斬はその後に続いた。

靈斬が部屋で待っていると、小太刀を持った三津五郎が戻ってくる。

「これを研いでくれないか？」

「かしこまりました」

靈斬は小太刀を受け取り、頭を下げた。

懷から刀袋を取り出し、小太刀を仕舞って、隣に置いた。

三津五郎は脇息に肘をかけ、靈斬に問いかけた。

「あそこに店を構えて、どれくらい経つ？」

「八年にございます」

「よくその歳で、ここまで有名になったものだな」

「お客様あつての商売です」

「謙遜などするな」

「事実を申したまでにございます。では、私はこれにて失礼を」

靈斬はそう言って、預かった小太刀を持って、部屋を後にした。

靈斬が去った後の部屋で一人、三津五郎が呟く。

「わしは、なんてことをしてしまったんだ……」

その様子を屋根裏から見下ろしていた千砂は、その言葉に疑問を感じた。と同時に、内
心で驚いていた。

——まさか、靈斬が顔を出すとは。

千砂は、今日のところはこれでいいかと思い、西日家を後にした。

翌日の昼時、靈斬はそば屋へ足を向けた。

注文を済ませ、いつもの席に座る。

がやがやとしているが、今回は常連客の一人も見かけなかった。

こんな日もあるだろうと思いつながら、お茶を飲んでみると、そばが運ばれてくる。

いただきますと手を合わせ、そばを食べる。

十分ほどかけてそばを堪能すると、お茶を飲む。

お代を机の上に置いて、店を出た。

靈斬はその足で、近くを少し散歩してから、店に戻った。

大した発見はなかったが、たまには良いものだな、と思った。

靈斬は刀部屋へいき、預かった小太刀を手に取り、研ぎ始めた。

千砂はその日の夜、西日家に潜り込んでいた。

今度は三津五郎以外の家族の様子を探ることに決めていた。

自分と同じ年と思われる女が廊下を歩いていく。その後を追うと、一人の男と二人の子

どもがじゃれ合っている部屋に辿り着く。

——息子夫婦の部屋か。

千砂はそう思い様子を見ていたが、やがて屋敷を後にした。

靈斬は翌日、そば屋に立ち寄り、千砂に伝言を残した。それからしばらくして、隠れ家
に顔を出した。

「待っていたよ」

千砂は言いながら靈斬を招き入れる。

靈斬は壁に寄りかかり、片膝を立てて座ると、口を開いた。

「それで、どうだった？」

「その前に、どうして西日家を訪ねたんだい？」

千砂は少し苛立ちを込めて言った。

「店のお得意様だった、というのと、気が向いた」

——そんな理由かい。

千砂は溜息を吐く。

「……西日家は、いたって平和な家だったよ。平和すぎるような気もしたけれどね」

「平和すぎるか……。三津五郎の様子は？」

「なんてことをしてしまったんだ、と言っていたね」

「そうか。直接、本人の口を割らせるしかないか」

靈斬は溜息混じりに言った。

——不穏な動きがあるのなら、正々堂々と乗り込めるが、仮初めであっても、平穏を壊すのは、少し、気が重い。

「情報、感謝する」

靈斬は内心でそう思いながらも、言葉少なに告げて、隠れ家から去った。

それから決行前日の夕方、店の戸を叩く音が聞こえてきた。

表に向かい、戸を開けると、依頼人の女が会釈をした。

依頼人を奥の部屋へ通し、自分も正座をする。

「それで、どうでしたか？」

「……平穏そのものです。ですが、三津五郎本人があなたの親を殺めたことを、ひた隠しにしているのは、間違いないでしょう」

「親を殺した人が、そんな生活を送っているなんて……。許せません」

靈斬は悔しそうに、唇を噛む女に視線を向けた。

「……三津五郎には、孫もあります。家族の関係も良好のようです」

「それでも……。壊してください。そうしなければ、前に進めません」

「分かりました」

唇を噛んでいた女は、なにかを思い出したのか、懷に手を入れ、小判五両を取り出し、すっと床に置いた。

「ありがとうございます」

靈斬はそう言いながら、小判を袖に仕舞った。それと代わるように、手許に置いていた懷刀を差し出した。

「決行は明日の夜です」

「分かりました。どうか、よろしくお願いいたします」
依頼人は懐刀を受け取り、頭を下げた。

翌日の夜、靈斬は黒一色の長着と馬乗り袴を身に纏い、その上から黒の羽織りを着る。
隠し棚から取り出した黒い刀を腰に下げる。黒い短刀を懐に仕舞った。黒い布で鼻と口を
覆う。研いだ三津五郎の小太刀も持って、店を出た。

千砂と途中で合流し、西日家を目指して屋根を走る。

到着すると、静かに屋根裏に侵入し、三津五郎の部屋の真上までいく。天井の板をずら
して様子を見る。

三津五郎はぐっすりと眠っていた。

靈斬は静かに、屋根裏から飛び降りると、三津五郎を揺り起こす。

「なっ……！」

叫ぼうとした三津五郎の口を塞ぎ、黙らせる。

「ある人からの依頼できた」

「そなたが、因縁引受人靈斬か」

三津五郎の静かな声に、靈斬はうなずいて見せる。

「わが家になんの用だ？」

「貴様の過去を調べさせてもらった。昔、ある家族を斬ったそうだな。子どもを一人残し
て」

「……なぜそれを」

——一度も口にしなかったのに。

と言わんばかりに三津五郎は顔を歪める。

「人の口には戸が立てられない。貴様が黙っていたところで、どうせ誰かには知られてい
たことだろう」

靈斬は冷ややかな声で応じる。

「わしに、それを認めろというのか」

忌々しげに顔を歪めた三津五郎は、声を震わせて言った。

「そうだ。罪から逃げず、過去と向き合え。貴様が蒔いた種だ。自分で摘み取れ」

「……応じなかったら、どうなる？」

「貴様の家族を、死にそうになるまで痛めつける」

靈斬は懐から短刀を取り出し、三津五郎の首に刃を食い込ませる。少しでも動けば切れ
てしまうのではないかと思うほど、力がこもっていた。

——さあ、どちらを選ぶ？

靈斬は布の下で残酷な笑みを浮かべる。

三津五郎は蒼白した顔で靈斬を見ていたが、やがて声を絞り出した。

「……罪を認めよう」

「これで、貴様以外、すべての人間が救われる」

——我ながら、残酷な言葉だ。

靈斬は内心でそう思いながらも、首に突きつけていた短刀を静かに仕舞う。

三津五郎の小太刀をその場に置く。

靈斬は西日家を後にした。

千砂もその後が続いた。

隠れ家に着くと千砂が口を開いた。

「初めてだね」

「なにが？」

靈斬は中に入ると、鼻と口を覆っている布を乱暴に下ろし、床に片膝を立てて座った。

千砂は頭巾を外して、靈斬の前に正座した。

「あんたが誰も傷つけずに、依頼を達成するなんて」

「そうだな」

靈斬は静かな声で言った。

「三津五郎を信じるのかい？」

「信じちゃいない。俺は脅して、選ばせたただけだ。依頼人の良いように。……少し様子見だな」

靈斬は鼻で笑った。

「様子見？」

千砂が首をかしげる。

「本当に、俺の言うとおりにしたのかをな」

靈斬はそう言うと、布で鼻と口を隠して、隠れ家を去った。

翌日の夕方、靈斬は自身番を訪れた。

「おや？ 刀屋、なんの用で？」

岡っ引きが顔を出す。

「西日三津五郎って、知ってるかい？ お得意様なんだが」

「そいつなら、今朝ここへきたぞ。なにやら話があるってんで、聞いてやったところさ」

「そうかい」

「もういいか？　これから生き残っているっていう娘を、捜しにいきなきゃならねえから」

「ああ」

靈斬はそれだけ言うと、自身番を後にした。

その日の夜、靈斬は黒装束に身を包み、懷に短刀を仕舞う。西日家に足を運んだ。

「まさか突然いなくなるなんて……」

三津五郎以外の家族全員が居間に集まり、話をしていた。

靈斬はその様子を、廊下の僅かに開けた襖の隙間から見守った。

「父が置いていった手紙だ」

「読んだの？」

妻の言葉に、夫がうなずいた。

「どうしていなくなったのかは分からない。だが、僕達のことを想ってくれているのは確かだと思う」

三津五郎の息子がそう言い、その場にいた全員が悔しそうに、子ども達は泣きじやくつていた。

靈斬はその光景を目にし、西日家を後にした。

それから数日後、依頼人が顔を出した。

「決行の翌日、自身番の人が私を訪ねてきました」
わたくし

靈斬が座ると、女が口を開いた。

「自身番の方はなんと？」

「西日が関わったとされる事件の話を知りたいとのことでした。なので、すべてお話いたしました。お世話になったので、あなたにも話しておこうと思います」

女はそう言って、語り始めた。

まだ女がほんの幼いころ、米問屋を営んでいたひとつの家族は、平和な日々を過ごしていた。

しかし、ある日の夜、彼女は物音で目を覚ます。

一緒に寝ていたはずの父の姿がない。

「……父上？」

寝ぼけた声を出し、父を捜しにしようとしたのを、母に止められた。

「いってはいけません」

「どうして？」

その問いに、母は答えなかった。

しばらくすると、戸が開いた。複数の男達が、なにかを引き摺っている。そのうちの一人が、提灯をこちらに向ける。

「まだ、誰かいるぞ！」

どたどたと土足で男達が上がってくる。

「今を見たな？」

提灯の光に、抜き身の刀が反射する。

母に身体をつかまれ、背に回される。

「なにをしたの？」

母は気丈にもそう尋ねた。

「お前の旦那を……殺めただけだ」

——父上が、死んだ……？

幼い子にはあまりに残酷な言葉であったが、彼女はしっかりと聞いていた。

「私のことはどうでもいい！……どうか、どうか、この子だけは見逃してください！」

「それでいいんだな？」

母はなにを考えているのか、その言葉にうなずいていた。

その様子を見ていた彼女の瞳に涙が浮かぶ。

「や……」

止めてと叫びたかったけれど、できなかった。

刀が肉を断つ嫌な音がして、母はそのまま横に倒れた。

「母上！ 母上！」

何度も声をかけたが、いっこうに答えない。

彼女は憎しみのこもった眼で、親を斬った男を見た。

「西日様！ 西日三津五郎様！」

人を殺めたというのに、ぼうつとしていたその男は、名を呼ばれて我に返った。

男達は、惨劇と化した家から去った。

その後、母と父の骸を見た彼女は、涙を流した。

「話は以上になります」

女は静かな声でそう告げた。

「辛いお話をさせてしまいました」

申し訳ありません、と靈斬は頭を下げた。

「お気遣いなく。昔のことですから」

女は苦笑した後、靈斬の顔を見て尋ねた。

「西日はどうなりましたか？」

「過去の罪と向き合うよう、本人に告げたところ、自分から自身番にことの真相を告げにいったそうです。近いうちに刑に処されるやもしれません」

「西日家の様子は？」

「突然いなくなったために、動揺と悲しみに包まれておりました」

「そうですか。では、これを」

女は、これで憎しみから解放されると、安堵の笑みを浮かべると、小判五両を差し出した。

靈斬はそれを受け取り、袖に仕舞った。

「また、なにかありましたら、お越しく下さい」

それから数日後、靈斬は四柳の診療所に足を運んだ。

「四柳、いるか？」

「靈斬か、どうした？」

靈斬は手に持っていた酒を持ち上げて見せた。

「まあ、上がれ」

四柳に続いて、診療所の中に入っていった。

「初めてだな、お前が治療以外で顔を出すのは」

四柳の一言に、靈斬は苦笑するしかない。

徳利の栓を開け、四柳が持ってきた盃にそれぞれ注ぐ。

「俺はずいぶん長く医者をやっているが、お前みたいな奴は、なかなかいない」

四柳はしみじみと言った。

「そうなのか？」

靈斬が首をかしげる。

「長い付き合いだからな」

それもそうだと、靈斬は苦笑する。

「なあ、四柳。どうして、医者になったんだ？」

「……人助けがしたかっただけだ」

「そうか」

「……俺からすれば、今の方がだいぶましになったように思うぞ？」

「前は、毎日、依頼を受けていたからな」

靈斬が呑みながら苦笑する。

「よく、今日まで生きてこれたものだ。感謝しなければな」

靈斬は言いながら、四柳を見る。

「礼なんていい。俺はな、できるだけ人が死ぬのを見たくないだけだ」

四柳はぶっきらぼうな口調で言う。

「……人の死なんて、あっけのないものだぞ」

靈斬が冷やかな声で告げた。

「そうかもしれんが、見ないに越したことはないだろ」

「そうだな」

——人の怒りや憎しみ、苦悩や悲哀を、身近に感じる事がなければ、俺の人生、少しは変わっていたのだろうか？

靈斬はふっとそんなことを思った。

第五章——ただ働き

それから数週間後、店の戸を叩く者がいた。

「いらつしやいませ」

訪れた人物に靈斬は目を丸くした。

「その節は、どうも」

目の前に立っていたのは鍛冶職人の次郎だった。

靈斬は商い中の看板を支度中にとすると、次郎を招き入れた。

「今日はどうした？」

「お得意さんの武士から、『因縁引受人』あるいは『靈斬』という人がいるらしいって聞いたんだ。その人はなんでも、恨みを代わりに晴らしてくれるんだとか」

——そんな噂が広まっていたのか。

靈斬は内心で溜息を吐きながらも、先を促した。

「それで？」

「本当にいるのか知らないけれど、頼みたいことがあるんだ。幻鷲さん、その人のこと、知ってるかい？」

「どうして俺を訪ねた？」

靈斬は怪訝そうに次郎を見る。

「有名な鍛冶屋は幻鷲さんしかないから、なにか知っているんじゃないかって……」

——俺以外にも売れている奴はいるがな。

靈斬は冷静に分析しつつ、どう誤魔化したものかと思案する。

武家の人間ならともかく、鍛冶職人の連中に正体は知られたくない。

「その人物のことなら聞いたことがある。会いたいのなら、今夜、鍛冶屋町の路地裏、袋小路になっているところが一か所だけある。修理前の刀を持って、そこへいくといい」

「ありがとう、幻鷲さん！」

予想もしていなかった情報が手に入って嬉しいのだろう、次郎は顔を輝かせて礼を言った。

「礼などいい」

靈斬はそう言って、出ていく次郎を見送った。

その夜、靈斬は黒装束に着替え、同色の布で鼻と口を覆う。短刀を懷に仕舞うと、自分が伝えた場所へと向かった。

靈斬は、袋小路近くの屋根に身を隠し、次郎を待った。

「ここで良かったかな？」

次郎は言いながら、提灯を片手に、辺りをきよろきよろと見まわす。

「そうだ。提灯で俺を照らすなよ」

「わっ！」

次郎は驚きながらも、言われた通り提灯を下げたままだった。

靈斬は物陰から姿を見せるも、暗闇に溶け込んでいるせいで、その姿は分からない。

「因縁引受人靈斬だ。依頼の前に確認したい」

次郎がおどおどしながら尋ねた。

「なんででしょうか？」

「人を殺めぬこの私に頼んで、二度と後悔なさいませんか？」

「ああ。そのためにきたんだ」

「金はあるのか？」

「……家族を食わせていくのに精一杯だから、ありません」

「ならば、その覚悟をお代代わりとしよう。修理する刀はあるか？」

「は、はい」

刀を差し出してきた。それを受け取り、

「それで、依頼内容は？」

靈斬は冷ややかな声で尋ねた。

「うちにいつも無理難題な注文をしてくる客がいます。なんとかしてこないようにしてほしいんです。一か月で刀を五本用意しろって。うちも限界なんです」

「その客の手がかりは？」

「顔に黒子があって、見た感じは人当たりのよさそうな人。この近くの……えっと、君津家の人だと聞きました」

次郎は顎に手を当てて言った。

「分かった。では、一週間後のこの時間、またここにくるといい」

「はい」

次郎が去っていくのを見送り、靈斬はその場から姿を消した。

靈斬はその足で、君津家へ向かった。

君津家は江戸の中で四番目に権力を持つ家だ。加え、規模も大きい。

屋敷はそれに相応しいくらいふさわの贅を尽くした造りになっていた。

——無駄なところに金かけやがって。

靈斬は内心で溜息を吐く。

そのまま、屋敷に侵入し、屋根裏へ向かう。

音もなく入り込むと、聞こえてくる会話を聞きながら、目的の男を捜した。

「現在、いくつかの鍛冶屋に一月以内に刀を五本ほど依頼しております」

と声が聞こえてきたため、靈斬は足を止めた。声からして、歳は三十ほどか。

「さて、どれくらいの鍛冶屋が、五本揃えて持ってくるのだろうか？」

楽しみだと言わんばかりの、別の声が聞こえる。

——そんなに刀を集めて、なにをしようっていうんだ。

靈斬は思索しながらも、天井の板をずらし、そうっと顔を覗かせる。

次郎の言う通り、黒子のある男がいた。対するは老年の男。だが、人懐こそうな印象は見受けられなかった。

一言二言話すと、男は一礼し、その場から去った。

靈斬は様子を見ると天井の板を戻し、君津家を後にした。

——まったく、疑問しか湧かねえじゃねえか。

店に戻ると靈斬は、内心で溜息を吐いた。

男の素性が分かっただけまし、という程度だが。

——どうしたもんか。

考えても仕方がないと思い、その日はすぐ眠った。

翌日の昼間、靈斬はそばを啜っていた。

靈斬が難しい顔をしているので、常連客らはひそひそと話をしていた。

「なんであんな怖い顔して、そば啜ってんだよ」

「そんなもん、知るかよ」

「仕事、上手くいってねえのかな？」

「憶測でものを言うな、馬鹿！」

「大人が、なにこそこそ話しているんですか」

千砂は呆れたように突っ込んだ。

「だ、だってよお、なんだか怖いじゃねえか」

「それもあって、聞きにくいし。なあ？」

と言うと話している常連客三人がうなずく。

千砂は溜息を吐いて、靈斬に声をかけた。

「幻驚さん、どうしてそんなに難しい顔をしているんですか？ 皆さん、怖がってますよ」

「ちよっと、千砂ちゃん！」

「なにをしているの!？」

「あゝあ、怒られる……」

三人はそれぞれに言葉を発する。

千砂の声に気づいたのか、靈斬が振り向く。

「ん？ 悪い。考え事をしていただけだぞ」

靈斬はそう言い、そばを啜りに戻る。

「な、なあんだ」

「びっくりした〜」

「怒られなくてよかった〜」

——まったくこの三人は……。

その様子を見ていた千砂は、呆れる他なかった。

靈斬は依頼について考えながら、無言でそばを啜った。

店に戻ってから、靈斬の思考はすべて依頼のことに使われていた。

金には困っていないため、少しくらい、働かなくても良いだろうと思ってもいる。

最近、刀の注文や修理依頼もなく、作る気もないため、靈斬は床に寝転んで考え込んでいた。

頭には、とりとめもない、考えとも呼べない、曖昧なものが浮かぶ。

どうしたらいいか、分からなかった。

ただ、とても、疲れていた。

そば屋にいく気にもなれず、靈斬はそのまま目を閉じた。

眠っている靈斬の横顔に汗が流れる。

穏やかな寝顔だったのはほんの少し。その寝顔が苦悶に満ちた表情に歪む。

——俺はもう……殺したくないんだ。

靈斬は夢の中で、魘うなされ続けた。

それから数時間後、姿が見えないことを心配した千砂が、様子を見にきた。戸を叩いても応答がない。無礼だと思いつつ、戸を開けて中に入った。

靈斬の苦悶な表情を見るなり、起こそうと揺り動かす。

「起きな！ 靈斬！」

「くるな！」

靈斬は自分の声で目を覚まし、千砂の手を無意識に払いのけていた。

千砂と目が合った。

「悪い」

「どうしたんだい？ そんなに汗かいて」

千砂に指摘されて、靈斬は頬に手を当てた。

彼女の言う通り、びっしりと冷や汗をかいていた。

「嫌な夢でも見たのかい？」

「まあ……そんなところだ」

靈斬は手拭いを持ってくると顔を拭い、肩にかけた。

「なにをしにきた」

「様子を見にきたんだよ。朝から、店、開けていないみたいだったから」

「……そうか」

——依頼のことを考えていたら、余計なことを思い出しまったか。

靈斬は溜息を吐くと、千砂に言った。

「新たな依頼が入った。決行日にこの近くの袋小路にこい。時間は日暮れ。俺のことはいいから、もう帰れ」

「はいはい」

千砂はそう言って、店を後にした。

そば屋に戻って仕事をしながらも、靈斬の様子がおかしいと思っていた千砂は、疑念を抱かずにはいらなかった。

——仕事が終わったら、四柳さんのところ、いつてみようかねえ。

千砂はそんなことを考えながら、仕事をこなした。

そのころ、靈斬はというと一人、顔をしかめていた。

悪夢を見たせいで、気分は最悪だった。

それを紛らわそうと、靈斬は刀部屋へ向かい、修理を始めた。

切れ味が落ちて、錆も出て^{さび}いる。

持ち主は相当、刀を雑に扱っているようだ。

とにかくなにかをして、余計なことを考えずにいたかった。

靈斬はその一心で、修理に精を出した。

一方、仕事を終えた千砂は、四柳の診療所を訪ねた。
「千砂です」

「ああ、嬢ちゃんか。どうした？」

「靈斬について聞きたいことがあってね」

四柳は首をかしげた。

「靈斬のこと？ 俺が答えられる範囲でなら」

四柳は言いながら、奥の部屋へと通した。

「靈斬のなにを聞きたいんだ？」

四柳は千砂を正面から見ると、そう尋ねた。

「知ってること全部」

正座をした千砂はそう言った。

「そうきたか。いったいどうして、あいつのことを知りたくなったんだ？」

四柳は苦笑して、尋ねた。

千砂は今日あった出来事を、簡単に話した。

「そういうことか。あいつは、あまり自分のことは喋らない奴だぞ」

「だから、直接聞かず、きているんだよ」

千砂は苛立ちを込めて言う。

「そう急かすなよ。教えてやるから」

千砂が落ち着いたのを見計らって、口を開いた。

「俺が靈斬と初めて会ったのは、十年前だった」

四柳は遠い目をして、当時のことを語り始めた。

夜中に診療所の戸を、乱暴に叩く人物がいた。

「いったい誰だ！ こんな時間に！」

「遅くにすまない。手当てをしてもらえないだろうか。金ならある」

十代後半の青年が血塗れになって立っていた。真っ黒の着物姿で、腰に太刀を帯びている。

「さっさと入れ」

四柳はそう命じ、奥の部屋へ通すと慣れた手つきで治療を始めた。刀傷を全身に受けており、その中でも左腕と左脚が酷かった。

青年は大人しく治療を受けている。

「名は？」

四柳が尋ねた。

「幻鷲」

幻鷲はそれだけ答えると口を閉ざした。

しばらくすると、四柳が声をかけた。

「終わったぞ。念のため、今日はここに泊まって……」

「断る。お代だ」

幻鷲は四柳の言葉を断ち切ってそう言い、小判一両を渡してきた。

——どうしてこんな大金を……？

「世話になった」

幻鷲は足を引き摺りながら、診療所を去ってしまった。

四柳はその場に立ち尽くす他なかった。

「どうしてあのころの靈斬が、小判を持っていたのか、未だに謎だが、俺との出会いはそんな感じだ」

四柳は軽い口調で言った。

「他に知っていることは？」

「ない」

即答だった。

「話してくれて良かったよ」

「お安い御用さ」

「手間、取らせて悪かったね」

「気にするな」

千砂はその言葉を聞いて、診療所を後にした。

それから四日後の夜、靈斬は黒一色の長着と馬乗り袴を身に纏い、その上から黒の羽織りを着る。隠し棚から取り出した黒い刀を腰に下げる。黒い布で鼻と口を覆う。袋小路へ向かった。

ちょうど次郎もきたところだった。

「よくきたな。お前には最後まで見届けてもらう。こいつの案内に従ってくれ」

靈斬は前もって千砂には依頼内容を話しており、そう言うと、千砂が次郎の前まで進み出た。

「よろしく」

「は、はい！」

「では、君津家で落ち合おう」

靈斬は姿を消した。

残された次郎がおろおろしていると、千砂が言った。

「さあ、いくよ。走りな」

そう言う千砂に次郎は続いた。

君津家近くの目立たぬ場所で、三人は落ち合った。

「俺が囷になる。続いて入れ」

靈斬はそう言うと、扉を開けさせ、出てきた男を昏倒させると、堂々と屋敷に押し入った。

「曲も――」

靈斬はその男をあっという間に倒すと、屋敷の庭から土足で上がり、北側の部屋へ一直線に進んだ。

千砂と次郎は庭の草木の陰に隠れる。

「刀に、血がついてますけれど、殺していないんですよね？」

「そうだよ、少し黙ってな」

次郎の不安を拭ったものの、そう告げる千砂の声には棘とげがあった。

靈斬は、部屋の障子を開け放つ。

その先には動揺した黒子の男がいた。

「貴様に聞きたい」

靈斬はその男の喉元に刀を突きつけ、訊ねた。

「なにをだ」

「あちこちの鍛冶屋から、刀を集めて、なにをする気だ？」

「……」

「答えろ！」

靈斬は突きつけた刀に力を込めると、男の首に血が滲んだ。

「……幕府への挙兵に必要な武器を集めていた」

靈斬は刀を引くと、隙とみられたのか黒子の男が斬りかかってきた。その攻撃を躲し、右腕を斬りつける。

右腕をだらりと下げた男は、刀を左手に持ち替えて斬りつけてくる。

躲そうにも距離が足らず、左肩を斬りつけられてしまう。

互いに負傷しながらも睨み合う。

幾度となく斬り結ぶと、互いに傷が増えていく。靈斬は左腕も斬られてしまった。

それでも靈斬は動じず、攻撃を繰り返す。

その動きに男が驚く。腕を庇うことも、痛みに怯むこともない。

右肩に攻撃を受けた男は痛みに怯んだ。だが、すぐに立て直し、突きを繰り返した。

靈斬はその攻撃を腹に受ける。顔をしかめたが、刀を持ち上げた。

柄で頭を殴ると、男が倒れる。

気を失っていることを確認した靈斬は、屋敷を去った。

それに千砂と次郎が続いた。

靈斬はそのまま、袋小路に直行する。

三人揃ったところで、靈斬が口を開く。腰からもう一本、修理済みの刀を抜いて渡した。

「これで終了。このことは一切他言無用だ。もういいぞ」

「あ、ありがとうございます！」

次郎はそう言い、刀を受け取ると、その場から去った。

「すぐにいかせて、正解だね」

「これ以上、放っておくわけにはいかないしな」

靈斬は溜息を吐いて、左腕を一瞥すると、診療所へ足を向けた。

「四柳」

「またお前か」

「悪いな」

靈斬は苦笑する。

「いい。上げれ」

そう言って、靈斬を奥へ通し、千砂は待つことになった。

「靈斬よ。仕事の頻度、減らした方がいいんじゃないか？」

「なぜ？」

治療を受けている靈斬が聞き返す。

「一週間に一回。一か月に四回。日によれば、もっと酷いときもある。こんなに怪我してる
と、身体がもたねえぞ」

靈斬は溜息を吐く。

「昔に比べたら、数は減らした。それに俺は、ここにすれば、傷ならいくらでも治る」

「靈斬……。この裏稼業、していて得があるのかよ？」

靈斬は考え込んだ。

「……強いて言うなら、莫大な金が入る。と言っても興味はないんだが」

「それを得とは言えねえなあ」

四柳は溜息を吐いた。

「なら……ない」

「得のない仕事を、よくもまあ、続けられているな」

「俺は自分のために仕事をしているわけじゃない」

四柳は重い口を開く。

「それにしたって……釣り合ねえよ」

「なにと？」

「お前の命と、依頼人の頼み」

「なんだと？」

靈斬は怪訝そうな顔をする。

四柳のような考え方をしたことがなかった靈斬は、ただただ疑問に思う。

「俺はお前の稼業のことは、噂程度のことしか知らん。だがお前は、依頼を受けるたびに
死にそうになって、ここへやってくる。傷が軽い程度だったことなんか、一度もない。依頼
人は、お前が血を流していることを知らん」

「……そうだな。依頼人には、余計なことを言わん方がいい。自分の復讐が誰かの命を犠
牲に成り立っているなど、知りたくもなからうよ」

靈斬は静かな声で言った。

「俺は医者だ。でもな、今お前が言ったことは、常々俺が感じていたことだ」

「そうか……」

「お前、自分の命の重さ、考えていないだろう？」

四柳が核心をついてくる。

「それを考えてしまったら、裏稼業ができなくなる」

靈斬は静かな声で言った。その双眸にはなんの感情も浮かんでいなかった。それは、まるで、波ひとつ立たない水面のようだった。

四柳は彼の美しさに目を奪われた。だが頭を振ると、激怒したい気持ちを抑えて尋ねた。

「お前はなんのために、この裏稼業をやっている？ お前の手を穢けがしてまでやることか？」

「俺以外の誰かが、傷つく姿を見たくない。だから、依頼人の代わりに憎しみや怒りを晴らしている。誰かのためになるのなら、穢れようが、辛かろうが、俺には関係ない」

靈斬は四柳を見ながら、冷やかな声で告げた。

——なんて奴だ。

四柳は言葉を呑んだ。

自分のことを他人事のように捉え、他人のことをまるで自分のことのように考えるとは。いったい、この男の、なにがそうさせるのだろうか。

「……そうかよ」

いじけたような口調になってしまったが、四柳はそう返した。

「ほら、終わったぞ」

「助かった」

靈斬はそう言い、足を引き摺って出ていこうとする。それを四柳が止めた。

「少し休んでいけ。今、動いたら傷に障る」

「……分かったよ」

靈斬は壁際に座り、左脚を伸ばして片膝を立てる。

身体を見下ろすと左腕が三角巾で固定されている。左肩にも晒し木綿が巻かれており、下手に動かせなかった。靈斬は、この様子じゃ、しばらく仕事は無理だな、と思った。

四柳は黙って部屋を出ていった。それに代わるように千砂が入ってきた。

「大丈夫かい？」

「ああ」

——強がってばかり。

千砂は思わず溜息を吐いた。

「大丈夫そうに見えないんだけど」

「そうか」

「あんたって、危なっかしいね」

「お前にはそう見えるのか」

靈斬は苦笑する。

「そりやそうさ。他人にそこまでする奴なんて初めて見たよ。いつか、その理由を聞いたいね」

千砂も苦笑を浮かべる。

「また今度、気が向いたらな」
靈斬はそう言って微笑した。

第六章——噂

それから数日後、左腕に晒し木綿を巻いた靈斬が、そば屋に顔を出す。このとき、三角巾が外れていた。そば屋に寄る間だけ、三角巾を外したのだ。怪我をして以来、しばらくの間、そば屋には寄らなかつた。しかし、この日は無性にそばが食べたかつた。

「幻驚さん、聞いたか？」

「なにを？」

「〃因縁引人〃なんて奴がいるらしいぜ」

「なんだそれは？」

靈斬が首をかしげると、常連客が瓦版を見せてくれた。

瓦版には「挙兵を目論んだ武家、因縁引人によつて暴かれる」と書かれていた。

——前は結構派手にやつたからな。

「そんな奴がいるのか」

靈斬は内心で思いながらも、そう惚^{とぼ}けてみせた。

「本当にいるのなら、会つてみたいよな」

「つてことは、代わりに恨みとか晴らしてくれるのかな？」

「じゃ、お前、恨んでいる奴とかいるの？」

「いない」

「俺だったら、頼みたいかも」

常連客らが次々に喋る中、靈斬は空いているいつもの席に腰を下ろした。

——頼んでもろくなことがないぞ。

靈斬は内心で溜息を吐いた。

「千砂ちゃんだったら、どうする？」

「私は止めておきます」

「そっか」

常連客はしよげたような声を出した。

——どうして落ち込む？

千砂と靈斬はそう思った。

「おまちどうさま」

千砂は言いながら、常連客を眺める。

常連客らは未だにはしゃいでいる。実在したらどんな依頼をするかという話で盛り上がっており、別の話題に流れていく様子もない。

「まったく、馬鹿な連中だねえ」

千砂が小声で言いながら囁う。

「そうだな」

靈斬もそれに同意しながら、そばを啜った。

店に戻ると、靈斬はそば屋の様子を思い出し、溜息を吐いた。

あそこまで噂が広がっているとは、思いもしなかった。

「実在するかどうかすら怪しいから、あんなにもはしゃぐのだろうか」

靈斬はそう呟きながら、内心でこう思った。

——実在したら、あいつらはどんな反応をするのだろうか？

恐れるのか、奇異の目で見るのか、好奇心に駆られるのか、その三者だろう。

そんなことを思いながら、外しておいた三角巾をつけ直し、ぼんやりと天井を眺めた。

それから半月後のある日、戸を叩く音が聞こえてくる。このとき、まだ晒し木綿を巻いていたが、吊る必要はなくなっていた。

「いらつしやいませ」

「良いか？」

「はい。奥へどうぞ」

靈斬は武士を招き入れ、商い中の看板を支度中にひっくり返すと、戸をぴしやりと閉めた。

そのまま、奥の部屋へ案内する。

「〃因縁引受人〃に会えると聞いてきたのだが」

「はい。私が因縁引受人、またの名を靈斬と申します。本日はどのようなご依頼でしょうか？」

靈斬は静かな声で尋ねた。

「まずは、鍛冶屋幻驚としての頼みを。この刀を研いでほしい」
武士はそう言って、一振りの刀を差し出した。

「承知いたしました。して、次の頼みとは？」

「遊女にうつつを抜かす一人の男を、懲らしめてほしい」

「なるほど。ひとつ、確認させていただいてもよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「人を殺めぬこの私に頼んで、二度と後悔なさいませんか？」

「後悔などせぬわ」

「そうですか。懲らしめる方法なら、私に頼まずともいくらでもあるはずでは？」

「そういうわけにもいかぬ。あまり表沙汰にしたくないのだ。それなりに名のある家ゆえな」

「そうでございますか。では、どのような罰をお与えになったのですか？」

「謹慎、反省文、妻への謝罪。あまり過激なこともできぬゆえ、そこまでしかできなかった」

武士は話を続ける。

「肝っ玉の据わった奴で、ほとぼりが冷めると遊郭に足が向く。稼いだ金はすべて遊郭に溶かしているらしい。金貸しに厄介になってはいないものの、我々もほとほと困っている」

武士は溜息を吐く。

「武士にも休息が必要だろう。しかし、あやつの場合は度が過ぎる」

——そうなのか。

靈斬は内心で納得する。

「では、そのお方のお名前を」

「野々宮三左衛門」
ののみやみざえもん

「こちらでも調べてみます。一週間後、またご足労願いますか？」

「分かり申した。では、これにて」

武士はそう言って、店を後にした。

靈斬は刀の状態を見て、二日で直せると判断し、依頼内容のことを考えていた。

——そういえば、ここ最近の依頼対象は、どうしようもない奴らばかりだな。

靈斬は素直にそう思う。賭けで破産になった者や、今回のような者。救いようもない連中ばかり。

罰を受けて然るべき者達、なのかもしれない。

「俺にもいつか罰が下るのだろうか」

靈斬はふっとそんなことを思った。

靈斬は三日後、千砂と待ち合わせをして、隠れ家で落ち合った。

靈斬が腕を組み替えた際、晒し木綿が覗いたため、それを見ていた千砂が言った。

「まだ腕はそんな調子かい？」

「少しは動かせるようになった」

「そうかい」

「今回の依頼は、遊郭に入り浸る男を懲らしめる」

「なんだか、どうでもいいことに使われていないかい？」

依頼内容を聞いた千砂が尋ねた。

「知らん」

靈斬はその発言をばつさりと切り捨てた。

「しかし、どうしようもない男だねえ」

「まったくだ」

靈斬は同意する。

「その男の名は野々宮三左衛門」

「結構名のある家じゃないか」

「そうなのか」

「そういうところ、あんたは気にしないか」

千砂は少し呆れたように言った。

「頼むぞ。どれくらいで済む？」

「二日」

千砂は即答した。

「分かった」

靈斬は短く告げて、隠れ家を後にした。

靈斬はその二日の間に、刀を研ぐことにした。

——切れ味が落ちているということは、誰かを斬ったのだろうか。それとただの稽古のしすぎか？ 今度聞いてみるか。なにもなければいいんだが。

まだ痛む左腕と肩を庇いつつ、静かに砥石を動かす。その手つきは普段とは違い、繊細なものを扱うような手つきだった。

千砂はそのころ、野々宮家に夜、侵入し、情報収集にあたっていた。

活気はあるが、見た目に反して裏のある家のようにであった。

——嫌な家だ。

千砂はそう思いながら、必要な情報を集めていく。

後ろ暗い情報ばかりが集まったが、それでもないよりはましだと思い、屋敷を後にした。

二日後、隠れ家で靈斬は千砂を待った。
しばらくすると忍び装束姿の千砂が、姿を見せた。

「珍しいな、お前がその格好とは」

「待たせちゃったかい？」

千砂が頭巾を外しながら、尋ねた。

「そうでもない」

「野々宮家だけど、活気のある家だった。だけど、裏でいろいろやってるようだよ」

「というと？」

「賄賂だったり、遊郭通いだったり、賭け場通い。相当腐敗しているね」

「そうか」

靈斬は短く返した。

「野々宮三左衛門だけれどね、だいたい、あんたから聞いたとおりだった」

千砂は話を続ける。

「何度怒られても、罰されても、遊郭通いを止めない。ある意味の肝っ玉だと城内で噂になっていたよ」

「どうしようもない男だな。そんなふうに噂されて」

「そうだねえ」

千砂は靈斬とともに苦笑する。

「他には？」

「金遣いが荒い。妻に怒られてばかりで不仲。あんなんで、よく武士が務まるものだと思う
たよ」

「やはり、最低な男か」

靈斬は、くくつと嗤った。

「そうだねえ」

千砂も嗤った。

それから二日後、武士が店を訪れた。

「お待ちしておりました。ご注文の品、できあがっております」

「出来栄えをみるとするか」

「こちらに」

靈斬は刀を差し出した。

刀を受け取った武士は慣れた手つきで鞘を抜き、刀身に目を走らせる。

「良い出来だ」

「ありがとうございます。切れ味が落ちていたのは稽古のし過ぎですか？」

「そうだが？」

「いえ。では、こちらへ」

「うむ」

鷹揚にうなずいてみせると、武士は靈斬の後に続いた。

「して、その後どうなった？」

「こちらでも調べましたところ、あなた様のおっしゃる通り、最低の男だと分かりました。決行は今夜。自身番への連絡もこちらで行いますので、ご心配なく」

「では、前金として、小判十両、渡そう」

靈斬は出された小判を受け取り、袖に仕舞った。

「では、決行後にまたお会いしましょう」

「うむ」

武士は店を出ていった。

その日の夜、靈斬は黒一色の長着と馬乗り袴を身に纏い、その上から黒の羽織りを着る。隠し棚から取り出した黒い刀を腰に下げる。黒い布で鼻と口を覆う。草履を履いて野々宮家を訪れると、屋敷を後にする三左衛門の姿を目にする。

そのまま後をつけ、遊郭の道中で襲いかかる。

後ろから口を塞ぎ、暗がりに連れ込む。

抵抗する三左衛門を離すと、静かに刀を抜く。

三左衛門も見えない敵に怯えながらも刀を抜き、敵がいるであろう場所に向かってめちやくちやに刀を振るう。

——危ない奴だな。

夜目の利く靈斬は、それが落ち着くまで、静観する。

その様子を少し先の物陰に隠れて、千砂が見ていた。

靈斬は三左衛門が落ち着く気配がないため、静かに溜息を吐くと、右肩を、続いて左脚を斬り裂いた。

「ぐああっ！ どこだ！」

三左衛門はそう吠え、靈斬を捜そうと躍起になった。

それより少し前、千砂は普段通りの着物に着替えると、自身番へ駆け込んだ。

「大変でございます！」

「いったいどうしたんだい？」

「野々宮家で、襲われまして……」

「なんだって！」

「これは噂ですが、賄賂のやり取りもしているとか」

「あんたはここに！ ほら、いくぞ！」

岡っ引きはそう言って、笛を吹きながら野々宮家へ走っていった。

千砂はそのまま夜の街へ姿をくらませた。

笛の音がだんだん近づいてくる。

「聞け。遊郭通いを止めろ」

「なぜだ！」

「止めなければ、次は、死ぬぞ？」

ぞっとするほど冷たい声で告げると、三左衛門は情けない悲鳴を上げて、左脚をずるずると引き摺って屋敷の方に逃げていった。

靈斬はその場から姿を消した。

それから一週間後のある日、武士が店を訪れた。

奥へ通すなり、武士が口を開いた。

「よくやってくれた」

と言いながら、小判十両を差し出した。

靈斬は無言で、それを袖に入れる。

「あの後、家がてんわやんわだった。わしはなににも手出ししていないから、縛から逃れたが、それ以外の者達は今ごろ、獄の中であろう」

「そうでございますか」

「では、これにて」

武士は店を後にした。

第七章——平穩

次郎の依頼で受けた傷はすっかり良くなり、靈斬はこれで仕事ができると、安堵していた。

それから数か月後、靈斬は依頼された刀を作り始めた。

最初に下鍛えという工程に入る。鉄を取り出して鉄床に置く。それを箱鞆の中に入れ、取っ手を手で押し、火力を強めながら、様子を見る。

真つ赤な鉄になったところで、箱鞆から出し、金槌で何度も叩いて伸ばす。中央に折り目を入れ、縦横方向で、何度も折り重ねる。これを繰り返し鍛錬という。玉鋼、銑鉄、包丁鉄の三種類の下鍛えを終わらせる。

次に、小槌で叩いて鉄片にする。それぞれの鋼の配合が適切になるよう選び、積み上げて溶かし固める。これが積沸かしという。この段階でそれぞれ異なる心金、棟金、刃金、側金の四種類がねの銅ができる。

続いて上鍛え。心金で七回、棟金で九回、刃金で十五回、側金で十二回ほどの繰り返し鍛錬を行う。叩き延ばした鋼を折り返ししながら、鍛錬を重ねることで、硫黄や不純物、余分な炭素などを追い出し、数回の戦にも及ぶ強靱な鋼へと仕上げていく。

先ほどの四種類の鋼を棟金、心金、刃金の三層を鍛接し、厚さ二十ミリ、幅四十ミリ、長さ九十ミリほどの材料が四個とれるくらいに打ち延ばし、四つに切り離す。これを芯金と呼ぶ。側金も加熱し、心金の倍になるくらいに叩き伸ばす。中央を切り離し、心金と同じ長さの側金を二本つくる。側金、芯金、側金の順で重ね、沸かして鍛接し打ち伸ばす。てこが切り離され、刀の握る部分になる茎なかこが沸かされ、鍛接する。

そこまでの工程を終えると、格子窓から見える日の高さから、昼時だと気づく。刀作りをいったん中断して、靈斬はそば屋へ足を向けた。

「いらっしやいませ！ 幻驚さん」

靈斬は千砂の後に続いて、いつもの席に腰を下ろす。

「いつものを」

「かしこまりました」

千砂はそう言って奥へと戻っていく。

「幻驚さん！ つかぬこと聞くが、好きな女はいないのかい？」

靈斬は思わず、飲んだお茶で噎むせる。

「急になにを言い出すんだ。……いねえよ」

常連客の一言にそう返す。

「こんなにカッコいいのに、なんで女の一人いねえんだよ。もったいねえ」

「黙れ」

「おお、怖っ！」

「幻驚さんを怒らせて、どうするんですか！」

千砂が怒る。

「そんなんじゃないって」

「余計なことを言わなければいいだけの話だ」

けろっと機嫌を直した靈斬は、千砂にそう言った。

「そうですか。もう怒らせたりしないでくださいね？」

千砂は言いながら、靈斬のところへそばを置く。

「なんだか、二人とも、仲良さそう」

「ご冗談を」

千砂が苦笑した。

それに同意するように、靈斬もうなずく。

その常連客は、他の客に同じ話題を振り、盛り上がっていた。

靈斬はその様子を、そばを啜りながら眺めた。

その後、靈斬は店に戻り、商品の状態をひとつずつ確認した。一時間ほど経過すると、刀部屋にこもり、作り途中の刀を手を取った。

次は刀の形に打ち延ばす素延べを行う。先端を三角に切り落とすも、そのままだと刃先に棟金や心金があらわれてしまう。そのため、尖った先を背の側に打ち曲げ、硬い刃金だけが刃の側にくるようにする。この段階での姿が最終的な日本刀の完成形を決めるため、慎重に小槌で形を整える。

刀身の棟は三角になるように叩いて、刃の側（平地）は薄くなるように叩き延ばす。茎の棟を叩いて丸みをつけ、最後に鎬地しのぎを叩いて姿を整える。刀身全体を小豆色まで低く加熱し、徐々に温度を下げていく。

刀の仕上げに取りかかる。まずは空締め。

刀が冷えてから、表面の黒い汚れを荒砥石で砥ぎ落とし、平地と鎬地を小槌で叩いて冷間加工を行う。棟と刃の直線を修正し、銑せんと呼ばれる鉄を削る押し切りの刃のような大振りの押し鉋で、凹凸を削る。この段階で刃渡りと区まちが決まる。

次は鉋の削り跡を砥石で砥ぎ落とす、生研ぎ。その後、水を含む藁灰で油脂を落とし、乾燥させる。

火を扱わない工程まで作り進めると、額に浮いた汗を拭う。格子窓から空を見上げると、日が落ちていた。汗でぐっしよりの着物を着替え、靈斬は外へ出た。

そのころ、千砂は仕事を終え、家に戻ってきた。

「疲れた」

独り言を言いながら、簡単な夕餉を準備し、一人で食す。

銭湯へ向かい、身体を清める。傷ひとつない肌でないことが気がかりだが、仕方がないと諦め、風呂を済ませる。

家に戻り、裏に干してある、忍び装束と手拭いの乾き具合を確かめ、取り込む。明日の仕事の準備を簡単に済ませると、布団に入り、眠りについた。

そのころ靈斬は、夜風が気持ちいいと思いながら、飯屋に向かっていた。

暖簾をくぐると、

「いらっしやい！」

と元気な声が聞こえてくる。

「おや、幻鷲さんじゃないか！」

「久しぶりだな」

「いつもの場所でもいいかい？」

「いや、今日はここがいい」

そう言って靈斬は、大将の正面に腰かけた。大将は四十代後半くらいだ。

「ご注文は？」

「酒」

「あいよ」

「前にきたのはいつだったか？ 三年前か？」

「そうだな」

「幻鷲さんは変わらん、俺は少し歳食っちゃったが」

「なにを言っている。そんなことはないぞ」

「ほらよ」

大将は言いながら、酒を出す。

靈斬は無言で受け取り、盃に注ぐ。

「幻鷲さん」

「ん？」

酒を呑みながら、靈斬が首をかしげる。

「酒、似合うな」

「そうか？」

靈斬は思わず、酒と大将を見比べる。

靈斬は疑問に思いながらも酒を呑み、時折、大将との会話を楽しんだ。

靈斬は店に戻り、刀作りを再開する。

加熱した刀身を水などで急激に冷やす焼き入れの準備として、土置きを行う。平地用、刃紋用、鎗地用の三種類の焼場土を刀身に盛る。平地に専用の焼場土を均一に薄く塗り、刃紋に筆で刃紋焼場土を描く。刃紋から棟までを鎗地用の焼場土を厚く盛る。そうすることで、焼き入れでの急冷時に刃側は素早く冷やされ十分に焼きが入る。棟の側は比較的緩慢に冷えるため、焼きはそれほど入らなくなる。焼きにより、容積が膨張しながら硬くなり、日本刀独特の刃側が出っ張った湾曲ができる。棟の側は膨張が少なく高度より、靱性に富んだ鋼となる。硬いが脆い刃側の鋼を支える機能を担う。

焼き入れのときには作業場の明かりを暗くして、鋼の温度をその光加減で判断をする。土置きした刀身を火床に深く入れ、先から元までむらなく加熱する。加熱の温度は最も重要で、細心の注意を払い、最適の過熱状態を見極め、一気に刀身が入るほどの器に急冷する。

刀身は水の中で反りが生じ、十分な冷却の後に引き上げる。荒砥石で砥ぎ、焼き刃が確認できる。その後、刀身は炭の炎焔で炙る焼き戻しを行う。これが合い取りと呼ばれる作業だ。これを行うことにより、刃に適度な柔軟性を与える。反りは横方向にも少し生じるため、木の台で小槌を使って修正する。茎も焼きなまし形を整える。

靈斬は作業を中断し、伸びをする。切り上げ、眠りについた。

翌日、仕上げの段階に入る。焼き入れを終了させた刀の反り具合を修正し、荒削りをする。このときに細かい疵や、肉のつき具合、地刃の姿を確かめながら、最終的な調整を行う。

次に茎仕立て。茎は銚ややすりで形を整え、柄に嵌めるときに使用する目釘穴をひとつ開ける。この後に刀鍛冶独自の鑢目（滑り止め目的）を加える。

次に地金と刃金を砥石で砥ぐ下地研。

この作業には数日かかった。

次に銘切り。鑿たがねを使い、自らの名や居住地、制作年などを茎に銘を切る。一般的に表（太

刀や刀を身につけたときに外側になる面）に刀工名や居住地を切り、裏に制作年や所持者名などを切ることが多いが、裏銘や無名などの例外もある。

靈斬は制作年と刀工名（幻）を銘切りし、次の工程へ進んだ。

仕上げ研ぎ。必要な道具を用意して、親指で砥石を扱って作業を行う。

最後の工程を終え、二週間かけて、一本の日本刀が完成した。

刀工は年に二四本まで刀を作ることしかできず、月平均二本作るのが限界である。

靈斬は肩を何度か回すと、溜息を吐いた。

第八章――身分を超えた恨み

それから数か月後、靈斬の許に行商人が訪れた。

「いらつしやいませ」

「鍛冶屋ですか。なかなか大きい。さすがは江戸ですな」

「江戸の外からおいでで？」

「はい」

「それはそれは」

「ある人を捜して、ここまできたのです」

行商人の後ろに立つと、靈斬は商い中の看板をひっくり返し、戸をびしやりと閉める。

「ある人とは？」

「江戸のどこかにいるという、因縁引受人 靈斬」というお人です」

「なぜ、その方をお捜しに？」

靈斬は刀屋としての芝居を続ける。

「晴らしていただきたい、恨みがあるからです」

「では、こちらに」

靈斬は言いながら、奥を示した。

きよろきよろしている行商人を案内し、正座でお互い向かい合うと、行商人が話し始めた。

「まずはこれを」

使い古された短刀を差し出した。

「直してくださいますか？」

「承知いたしました」

靈斬は愛想笑いで短刀を受け取ると、状態を確認する。はばき（鞘の鯉口と重なる部分）の辺りが緩んでおり、短刀の滑らかな鞘抜き邪魔をしていた。

短刀の状態の確認を終えると、靈斬が口を開いた。

「その前にひとつ、確認したいことがあります」

「なんでしょうか？」

「人を殺めぬこの私に頼んで、二度と後悔なさいませんか？」

「はい」

「……依頼内容をお聞かせ願えますか？」

「では、あなたが……！」

行商人は顔を輝かせる。

「因縁受人 靈斬と申します」

靈斬は頭を下げる。

「私は以前、江戸で武士をやっておりました。武家はなにかと体面ばかりを気にする身分。それが嫌になり、私は武士を辞めたのでございます。それでもあの家に対しての恨みは晴れませんでした」

靈斬は話を聞きながら、尋ねた。

「あの家とは？」

「利津家としつです」

その名を聞いた瞬間、靈斬は顔から血の気が引いていないかと焦った。なぜそんな心配をするのかも分からなかった。なんとか平然を装い、尋ねた。

「……どのような恨みがあるのですか？」

「私の家がお取り潰しに遭ったのでございます」

「なぜですか？」

「利津家は、武士を一人斬ったというのに、その罪を我らに着せたのでございます。自らの家を守るため。私どもは利津家より下でしたので、それに従わざるを得ませんでした」

行商人は言いながら、唇を噛んだ。

靈斬はその話を聞きながら、なんて野郎だと思った。

「それはいつごろの出来事にございますか？」

「今から三年前にございます」

「その人物はご存じですか？」

「はい。重五郎じゅうごろうにございます」

「承知いたしました。こちらでも調べてみますので、一週間後に、またお越しくださいませか？」

「分かりました。では、これにて」

行商人はそう言い、店を後にした。

「利津家、か」

靈斬は行商人が去った後、一人、床に寝転んで天井を睨む。

動じたときを思い出したが、誤魔化しができていることに、安堵している自分がいた。どうしてあんなに動揺したのか、皆目見当がつかない。

忌々しげに舌打ちをした後、短刀の修理に取りかかった。

——しかし、あそこまで、はばきが緩むとなると相当使い込んでいるのだろうか。だが、武士の身分を捨ててまで行商人になったのに、まだ命を狙われているのだろうか？

靈斬はそんなことを思いながら、手を動かした。

修理を三日で終わらせると、靈斬はそば屋へ向かった。

「いらっしやいませ！」

千砂の声に出迎えられ、靈斬はいつもの席に座る。

「千砂」

「はい、なんでしょう？」

「耳を貸してくれ」

靈斬は小声で、今夜隠れ家にいくことを伝える。

小さくうなずいた千砂は、靈斬から離れた。

「おお？ 逢引の約束か？」

「違います！」

常連客の茶化しに、千砂はとっさに否定する。

——まあ、似たようなもんだけどな。

靈斬はそう思いながら、お茶を飲んだ。

それから数時間後、すっかり日も暮れた時間に、靈斬は隠れ家に向かった。
すでに千砂がおり、靈斬は思わず聞いた。

「待たせたか？」

「いいや。ついさっき、きたところさ」

「なら、良かった」

靈斬は胸を撫で下ろす。

「それで、今回は？」

「利津家の利津重五郎。それと家族の様子も。頼んだぞ」

「はいよ」

靈斬はその言葉を聞くと、隠れ家を後にした。

千砂は忍び装束に着替えると、利津家に向かった。

屋根裏で聞こえてくる会話に耳を澄ませた。

「あの子はまだ見つからないのか！」

「家を出て乳母の実家にいたところまではつかんでいるのですが、それから先の足跡がばったりでして……」

「満久は、当主に相応しくない！ あの子しかないのだ！ さっさと見つけ出せ！」

話を聞いていた千砂は訝しむ。

——なんだい、そりゃあ。

千砂は移動し、再び声を聴く。

「父上も諦めが悪い。もう弟が家を出て二十年以上にもなるというのに、未だに捜しているとは。私なりに精一杯やっているのに」

「ええ、そうですね。父上はあれから狂ってしまわれた。あの子が戻らぬ限り、あのままでしょう」

千砂は無言でその場から去った。

——どういふことだ。当主に相応しくないだけで、二十年も前にいなくなった息子を躍起になって捜すとは。

千砂は元きた道を走りながら、そう思った。

千砂は翌日の同じ時間、利津家に潜り込んだ。

「おい、三年前の件は、誰にも嗅ぎつけられてないだろうな？」

「は、はい！」

「これが世に知られたら大変なことになる。分かっておるな！」

「は！」

——なんて野郎だ。

千砂は心底そう思った。

二日後、靈斬は隠れ家を訪れた。

そこに普段通りの格好をした千砂が姿を見せる。

「お待たせ。さっそくだけど、重五郎は三年前のことをずっと隠している」

「隠すくらいなら、口に出さなければいいものを」

そう吐き捨てる靈斬は、恐ろしいくらいに冷たかった。

「それから、重五郎は今、息子を捜している。正確には自分の次男を」

「おい、嘘だろう？」

靈斬は呆れた。

「いいや、事実さ」

「……」

靈斬はなにも言えなくなった。

「私もあんたと同じように思ったさ。あたしは、なにかに憑かれているんじゃないか、とすら思えたね」

「……それで、家族の様子はどうだった？」

靈斬は重い口を開いた。

「兄は、父に認められなくて不満を持っている。重五郎の妻は、兄が認められないことを嘆いていた」

「……そうか」

そう言いながらも、靈斬の瞳は焦点が合っていないかった。

千砂は茫然としている靈斬を、見ていることしかできなかった。

依頼人が店を訪れてから一週間後、靈斬の店に行商人がやってきた。

「お受け取りください」

靈斬は言いながら、短刀を差し出した。

行商人は短刀を抜いて、首をかしげた。

「おや、はばきを新しくしたのではないのですか？」

「そうです。ですが、そのまま使うと目立ってしまうので、艶を消しました」

「ふうむ。その方が自然ですね」

「はい。……ひとつ、お尋ねします」

「なんでしょう？」

行商人が首をかしげた。

「今もお命を狙われているのですか？」

「……はい。利津家の放った刺客だと思います。それから逃れられないかと思っていたのです。それで、どうでしたか？」

「三年前のことをひた隠しにしているのは事実のようです。それを明らかにすれば、利津家の信頼は地に落ちます」

「私からすれば、良い結果ですな」

「そうでございますか。では、決行後にお会いしましょう」

「では」

行商人は軽く頭を下げて、店を後にした。

その日の夜、靈斬は黒の長着と同色の馬乗り袴を身に纏う。黒の足袋を履き、黒の羽織りを着る。同色の布で鼻と口を隠す。黒い短刀を懷に忍ばせる。黒い刀を帯びると、利津家に向かった。

千砂もその後を追った。

靈斬は正面から、千砂は屋根裏から屋敷に侵入した。

靈斬の横顔は、無意識に険しい顔つきになっていた。

「曲者だー！」

あえて叫ばせて、その後動きを封じた。

大勢の雑魚が出てくる。苛立ちながら、一人につき一太刀で、倒していく。

周囲を囲まれた状態での攻撃を受けたが、靈斬は刀一本でそれを受け止めた。

みな一様に驚いたようだったが、靈斬は気にも留めずそれらを弾き返した。無防備になった瞬間を使い、それぞれ右腕に狙いを定め次々に斬りつけていった。これで、六人を一気に片づける。

返り血を浴びても気にせず、ずんずんと進んでいく。

部屋の襖を片っ端から開け、次から次へと右腕を斬りつけていく。男も女も関係なく。

呻き声がさらに靈斬を苛立たせていく。

中庭に入った。敵を倒しながら、小さな納屋に視線が移る。

「おらあ！」

敵の怒号で我に返ると、靈斬はなににもなかったかのような顔をして、戦いを再開した。

その様子を見ていた千砂は、今まで以上に殺気立っていることを痛感する。

——こんな靈斬、見たことない。

靈斬の暗い感情が目に見えて溢れ出しているようにも思う、千砂だった。

もうなん部屋の襖を開けたのだろう。多すぎて覚えていなかった。

なぜだろう、今はただ斬りたかった。できれば殺してしまいたい。そんな猟奇的な衝動が込みあげてくる。しかし、殺さないように、と細心の注意を払っている自分もいる。葛藤を抱えながら、次の障子を開けた。

十人ほどの雑魚が、武器を手に闘志をあらわにして、靈斬を睨みつけている。先手必勝とばかりに、まずは五人の雑魚が襲いかかってきた。

それぞれの武器を捌いて^{さば}躲し、武器同士をぶつけさせ、攻撃を逸らす。その隙について、五人の右肩を次々に斬りつける。

「ぐあっ！」

五人分の呻き声が響く。

五人が畳の上に転がる。

それを器用に避けながら、靈斬は第二波に備える。

今度は一人ずつ、攻撃を仕掛けてきた。

一人目は大振りの刀を振り下ろしてきた。それを躲し、右肩を斬りつける。それでもと思ったのか、左手に刀を持って突きを繰り返した。靈斬はこれも躲し、左肩から左腕までを斬りつけた。

立ち上がり、痛みを堪えながら震える切っ先を靈斬に向ける。

——脚の方が良かったか。

と思いつつも、靈斬が構える。

「はあ！」

痛みに打ち克つためだろう、声を張った男は、袈裟切りを放つ。

それを難なく受け止めると、そのまま壁に押しやる。

「ぐはっ！」

痛みに堪える男はそれでも武器を手に行っている。

その執念深さには頭が上がりなれないと思った靈斬だったが、急所を外し、腹を一閃する。

鮮血が飛び散る。

男が刀を横へ薙ぐ。それを靈斬は頭を後ろに反らして躲す。

靈斬は男の左脚に刀を突き立てる。

「ぐああっ！」

男が叫ぶのを気にもせず、一度抜いた刀を再度突き立てる。新たな鮮血が噴き出す。その後、右脚にも二度、刀を突き立てた。

「くそっ！」

一人目の刺客が、畳に膝を落とす。

得物はつかめないだろうが、念のため、刀を遠くへ蹴り飛ばした。

二人目の刺客は野太刀を構えていた。

「ふんっ！」

靈斬を真つ二つにしようとしたのか、野太刀を横へ薙ぐ。靈斬は一步下がってその攻撃を躲し、距離を詰めようとするが、野太刀に阻まれる。

靈斬は忌々しげに舌打ちをすると、距離を取って隙をうかがう。

野太刀は一撃が重く、距離をそれなりに取らないと扱いにくい。攻撃を繰り出した直後であれば、隙もできるはずだ。そう考えた靈斬は、男が攻撃を繰り出した直後に距離を詰める。とつさに野太刀を戻そうとした男だったが、靈斬の動きには間に合わない。

「ぐっ！」

靈斬は右肩を刺すと、素早く男との距離を取った。

男は再び野太刀を手になしようにするものの、傷のせいで持てない。

靈斬は野太刀を蹴飛ばし、男の戦意を削いだ。

三人目は短刀を二本持っていた。身軽な動きでもするのかもしれないと思っていたが、その通りだった。素早く動いて、攻撃を仕掛けてくる。それを刀で防いだ。しばらくの間、靈斬は守りに徹した。動きをできるだけ把握するために。男は躍起になっていた。これだけの攻撃をしているにもかかわらず、傷ひとつつけられないことに。その焦りを読み取った靈斬は、あえて守りの手を抜く。隙ができたと勘違いした男は、そこに向かって短刀を繰り出してくる。それを躲すと、まずは右腕をぎっくりと斬り裂く。

右手の短刀を落とし、まだ使える左手の短刀を振りかざして、靈斬に攻撃を仕掛けた。しかし、それも躲され、新たな傷を負う結果となった。両腕を負傷した男はもう立ち上がりもせず、呆然としていた。念のため短刀二本を遠くへ蹴飛ばした。

四人目は細身の槍を構えていた。

「やあ！」

いきなり掛け声とともに、突きを繰り出してくる。それをひよいと躲す靈斬。負けじと連続して突きを繰り出すものの、すべて躲される。忌々しげに舌打ちをしたのは男の方だった。

今度は槍を薙ぎ、靈斬めがけて振り下ろす。その攻撃を躲した靈斬だったが、振り下ろした槍が畳に深々と突き刺さったのを見た瞬間、少し冷や汗をかいた。

——あんな攻撃、喰らいたくもない。

靈斬はそう思いながら、攻撃を躲し続けた。その代わり、壁や畳などに傷が増えてゆく。男は槍を自分の手足のように扱い、何度も攻撃を仕掛けてきた。まるで舞を舞っているようだ、靈斬は思った。これが命のやり取りではなかったら、ずっと見ていたいと思うような素晴らしい動きだった。だが、靈斬の方が数枚上手だった。次々に繰り出される攻撃を受け止め、受け流し、捌き、躲しながら、男の隙を探した。だが、見つからないので、

こちらにも攻撃を仕掛けることに。右から斬りつけると、槍に阻まれる。左から斬りつけても結果は同じ。突きを繰り出すと、それを受け流して、斬りつけてくる。それをとっさに防いだ靈斬だったが、内心ではひやつとした。

男の槍が、左肩を掠る。痛みに顔をしかめた靈斬は、槍を外側へ弾き返すと、無防備になった右腕を斬りつける。

「ぐうっ！」

痛みによろけた男は、なんとか踏ん張って、左手で槍を繰り出す。それを躲し、懐に入り込む。

靈斬の背後に槍が迫る。懐に入っただけの、傷はつけられず、靈斬は刀を背後に回した。

刀と槍がぶつかる固い音が響く。

互いに舌打ちをする。

靈斬は、かたかたと音を立てている槍を、強引に弾き返すと、上に投げる。切っ先を下にして落ちてきた刀を一瞥し、一步下がった。

すると男が踏み込んできた。同時に、落ちてきた刀が右肩を斬り裂いた。

肉を断つ嫌な音がし、鮮血が溢れ出す。靈斬は返り血を浴びても動じなかった。畳に刺さった刀をつかみ、両膝を突き刺す。

「ぐあああっ！」

痛みに叫んだ男だったが、ようやく畳に膝をついた。

最後の男は刀を肩に担いでいた。

「俺達相手に、それだけの傷で済んだのか。腕が鈍ったかね」

靈斬は無言で刀を構える。

両者、同時に動いた。

右腕を狙った攻撃は靈斬の刀で止められる。忌々しげに舌打ちをしたのは男の方だった。そのまま押し切ろうと、男は刀に力を込める。しかし、刀が震えるだけで、圧される様子はない。靈斬は布の下で、冷ややかな笑みを浮かべると、その刀を難なく押し返した。

男が刀をつかみにいつている間に、距離を詰めた靈斬は右脚を刺した。

「っ！」

体勢を崩して、畳に片膝をつく男。

男が顔を上げると、憎悪のためか、その双眸はぎらぎらと輝いていた。

歯を食いしばり、男はなんとか立ち上がる。

靈斬はその様子を冷やかな目で眺めていた。

「おらあ！」

痛みに負けじと大声を出した男が、靈斬に向かって突進してくる。その攻撃を受け止めたものの、踏ん張りが利かず、二人で壁に激突。

背中の鈍い痛みに顔をしかめた靈斬は、未だに刀に力を込めている男を睨みつける。

「まだまだ動けるぞ！」

傷口からだらだらと鮮血を垂らしながらも、男は言い放った。

「動けぬようにしてやる」

靈斬は静かな声で告げると、男の力を利用して受け流し、左肩を斬りつける。

痛みに怯んだ隙を突き、左膝をも刺し貫いた。

男は自分の武器を畳に落とす。拾いにいきたいが脚が言うことを聞かない。

「終わりだ」

靈斬はそう言い、右肩から腕を斬りつける。

「ぐっ！」

痛みに呻いた男は、畳の上に蹲^{うすくま}るしかなかった。

そんな男を冷ややかに見下ろした靈斬は、刀を振り血を落とすと、次の部屋へ向かった。

次の部屋の襖を蹴り飛ばした。

中には怯える女が二人いた。一人は比較的若く、もう一人は年老いていた。若い女について情報はなかったものの、たまたま居合わせただけだろうと思った。怖がりながらも剣を構える、三十過ぎの男の姿があった。

靈斬は鼻と口を覆っている布を乱暴に下ろした。

「人殺し！」

年老いた女が叫ぶ。

「結果を見てから言え！」

靈斬が怒鳴る。

彼の背後には、痛みに呻く男達の姿があった。

「ひいっ！」

「母上に手を出すな！」

——へっぴり腰のくせに、威勢だけはいい。

「貴様の負けは最初から決まったようなものだが」

「うるさい！」

男は姿勢を整えて斬りかかってくる。

その刀をやすやすと受け止め、靈斬はぞっとするほどの冷たい笑みを浮かべてみせる。

その表情に怯えながらも、再度距離をとった男は、突きを入れてくる。それを躲し、右腕

を斬りつける。

「ぐっ！」

「満久！」

「黙れ！」

年老いた女の悲痛な叫びに、すかさず靈斬の怒号が飛ぶ。

「私は、ここで死ぬわけにはいかないんだ！」

「殺さねえよ」

即答だった。

靈斬は攻撃を躲し、左腕をも斬り裂くと、満久がぐくと膝をつく。

「おのれ……！」

ぼろぼろになった満久に年老いた女が駆け寄る。満久が睨みつけてくる。

それでも満久は立ち上がり、靈斬に刃を向ける。

「ここで、賊を仕留めれば、きっと……」

「評価が上がるんでも？」

満久の言葉を引き取った靈斬が冷ややかに言う。

「それはない。俺はこんな場所で死ぬつもりは微塵もない」

満久の心に灯ったであろう、意思を、靈斬は容赦なく、否定した。

その満久の横顔は血の気が失せ、震えていた。賊に向ける刀が震えても、落ち着かせようと必死になった。目の前にいるのは圧倒的な力を持つ、けれど、賊一人なのだから。

——殺せないはずはない。

冷静になり、昂る感情を抑え込む。たかふふっと息を吐いてから、賊を睨みつける。

「やあ！」

負傷しながらも洗練された動きでの攻撃を繰り出してきた。

靈斬はそれを簡単に受け止めるも、満久の変化に驚いていた。

——俺には及ばないが、その辺の雑魚に比べたら、まだましな動きをする。

満久の刃を押し返し、下から斬り上げる。腹から胸にかけてを一閃すると、鮮血が飛び散る。

「ぐっ！」

痛みを堪え、靈斬の胸を狙って横に薙ぎ払う。

靈斬はそれを受け止める。互いに力を込めているので刀がかたかたと音を立てる。

「いくらか、ましな動きをするようだな。いったいなにがあった？」

「教えを思い出しただけだ」

靈斬は冷ややかな笑みを見せるだけに留まった。

その力を利用して、体勢を崩すと、満久が倒れる。

急所を外し、腹に刀を突き立てた。

「ぐああっ！」

身体が焼けるような痛みを訴える。満久はなににも考えられず、悲鳴を上げた。

靈斬は容赦なく傷を抉る。そのたびに満久が叫ぶ。

視界の端で、なにかが動く。同時に、こちらに向かってきた。

靈斬は咄嗟に柄から手を離し、突然繰り出された、隙だらけの攻撃を躲した。

「なんの真似だ？」

「これ以上、満久を苦しませないで！」

攻撃を仕掛けてきたのは、満久の母だった。抜き身の懐刀を両手で持ち、がたがたと震えている。その姿はとても哀れだった。それと代わり満久と同年であろう女は、見ているだけだった。ただ恐怖に目を見開いている。

「ちっ」

靈斬は忌々しげに舌打ちをする。

「だめだ、母上……」

満久はそれだけ口にする。

——そんな動きで、こいつを助けようとしても？ 親子愛など反吐が出る。

靈斬は内心でそんなことを思いながら、懷から短刀を取り出して構える。

と瞬時に満久の母との距離を詰め、右腕を斬りつけた。続いて左腕を。これでもう、懐刀は使えまい。

「ああっ！」

焼けるような痛みに呻いた満久の母は彼と同じく、畳に倒れた。

鮮血を払い落とし、流れるような動きで短刀を仕舞う。畳に落ちた懐刀を遠くへ蹴り飛ばす。

靈斬はよほど恨みでもあるのか、執拗に満久を痛めつけた。

何度も何度も叫ぶ男を、靈斬は冷ややかな目で見ていた。

靈斬が執拗に痛めつけ、もういいかと思ったとき、満久の身体の周りは真っ赤に染まり、傷からはどくどくと鮮血が溢れ出していた。

真っ先に駆け寄ったのは、女ではなく、満久の母だった。痛む腕を無視して、何度も満久に声をかけている。

「っ……！」

女の視線が、靈斬の刀に釘付けになる。恐怖に顔を歪める。

「見逃す……と言うのですか？」

女は刀に怯えたまま、か細い声で言った。

「お前は、なにもしていない」

靈斬はそう言うど鮮血のついた刀をそのままに、部屋から去った。

靈斬は最後の襖を蹴り開けた。

そこにはかつて父だった男がいた。

「そなたはもしや、あかつき暁……」

靈斬は名を口にした男に、無言で刀を突きつける。それが自分の幼名だと、靈斬には分からなかった。

「満久はどうしたのじゃ！」

「放っておけば死ぬほど痛めつけた」

靈斬は冷ややかな声で告げた。

「なっ……！」

「それからな、お前の妻も負傷している。満久に比べれば程度は軽いがな。余計な手出しさえしなければ、無傷でいられたものを。ああ、一人、無事な奴がいたな」

靈斬は鼻で笑いながら、吐き捨てた。

「わしの家族を壊しておって……！」

「それを望んだのは依頼人だ。そんなことより」

靈斬は話題を変えた。

「……三年前、一人の武士が斬られた。その罪を別の者に着せたな？」

「あのときは、そうするしかなかったんじゃ！」

突きつけられた刀に怯えながらも、男が叫んだ。

「貴様は、事実から、目を背けた！」

靈斬は激昂した。

「家を保つには、それしかなかったんじゃ！」

「体面ばかり気にするから、このような結果を招く！ 貴様の思い通りにはならん！」

「そこまで言うのか。ならば……」

男が刀に手をかけた。

靈斬は刀を引き、静かに構えた。

誰の合図もなしに同時に斬り込んだ。

靈斬は左肩、男は右肩から血を流す。それでも両者の動きは止まらない。

男はすぐに己との力の差に感づいた。こちらが殺そうと思って繰り出している攻撃を、躲しながら、自分を殺さないよう、ぎりぎりのところで斬りかかってくる。こんなことくらいなら、いっそ一息に殺してほしいと懇願したくなるような、苦痛に苛まれるつもりなのか、と。

殺さないようにしているなどという芸当、見せられてしまったら、もう二度と刀は持つまい。そう思ってしまった。

こちらの方が有利であるのに、それを感じさせない動きと並々ならぬ殺意。相手が負傷しているのに、それを感じないのだ。

靈斬は流れる水のように刀を振るい、宙に投げた刀を右手で受け取り逆手に構え、下から斬り上げた。新たな鮮血が飛ぶ。

斬り結ぶたびに、右腕、左腕、左肩、右脚、左脚から鮮血が噴出する。

それでもお互いに動きは止めない。片方は殺すつもりで、もう片方は殺さないつもりで、互いに主張の異なる刃が斬り合いを繰り返す。

突き出された刀を右肩で受け止めた靈斬は、痛みに顔をしかめながらも、刀を薙ぐ。すると両腕に赤い筋が刻まれ、鮮血が噴き出す。

鏢迫り合いの状態になったが、互いに一步も引かなかった。

「くっ！」

靈斬は痛みに堪えながら、男の刀を弾き返し、急所を外して腹を斬り裂く。

男は怯んだが、体勢を立て直し、再度左肩を斬りつけてきた。その攻撃を受けた靈斬は、痛みとともに血を吐く。

男も血を吐きながら、動きは止めない。再度攻撃を繰り返す。

それを靈斬がなんとか防ぐ。

大量出血のため、わずかにふらついた靈斬は、男からの下から切り上げた攻撃を腹に受けてしまい、新たな鮮血が飛び散る。

靈斬は仕返しとばかりに、左脚を刺し貫いた。

お互いの鮮血で染まりあいながら、先に動きを止めたのは男だった。畳に膝をついた。

「……殺してくれ」

「断る」

靈斬はその懇願に、冷やかな言葉で返す。

殺さないぎりぎりのところまで、追い詰めた。

靈斬は、全身に傷を負いながらも、なんとか立っていた。

ピーツと笛の音が聞こえてくる。

「自身番がくる。事実のみを話せ」

靈斬はそう言うと、口許をぐいっと手の甲で拭うと、鼻と口を布で隠し、脚を引き摺りながら、その場を去った。

それまでの光景を見ていた千砂は胸を痛めながら、その場を後にした。

利津家の帰り道、靈斬を見つけた千砂は、彼を呼び止めた。

「靈斬」

「きていたのか」

靈斬は刀を杖代わりしてなんとか歩いている状態だった。

千砂は血に塗れるのも構わず、靈斬の左腕を肩に回す。

「汚れるぞ」

「うるさい」

千砂はぼそっと吐き捨てた。

靈斬は思わず、布の下で苦笑した。

やっこの思いで、四柳の診療所に辿り着くと、靈斬が戸を叩く。

「なんだってんだよ！」

怒鳴った四柳は、靈斬の様子を見て顔色を変えると、

「すぐに奥へ」

と指示を出した。

千砂は靈斬を運んだ後、前の部屋で待つことになった。

「今回は一段と派手にやったな」

全身血塗れの靈斬を見るなり、四柳が言った。

「刀傷だけだ」

「多すぎだ、馬鹿野郎」

四柳がそんな突っ込みを入れる。

靈斬はなんとか上着を脱ぐ。複数の真新しい刀傷が目を引いた。左肩に二か所、右肩から腕にかけて無造作に傷つけられた刀傷が複数、左肩から腕も同様。腹にも新しい刀傷がある。両脚の裾をまくると、痛々しい刀傷がある。

「頼む」

「喋るなよ」

四柳はそう言って、傷の消毒から始め、縫合、薬草を塗り込んだ布を当て、晒し木綿で巻くまでを慣れた手つきでこなした。それでも一時間以上はかかった。麻酔のない縫合は彼にとっても苦痛だったに違いないが、靈斬はなんとか堪えてみせた。

「終わった」

四柳は言いながら、靈斬に布団をかける。

「そうか」

「嬢ちゃん、入っていいぞ」

その声を聞いた千砂がそうと入ってくる。

靈斬は横になったまま首だけを向けた。

「大丈夫かい？」

「なんとかな」

「相変わず、そっけのない返事だねえ」

千砂が笑う。

「悪いか？」

「いや、あんたらしいと思っただけさ」

笑いを引っ込めて、千砂が言った。

このとき、四柳が静かに部屋を去っていたが、二人は気づかなかった。

「……どうして、利津家の家族の様子まで、私に調べさせたんだい？」

千砂は重苦しい沈黙の中、そう切り出した。

「言ってしまうば、勘だ。情報は多いに越したことはない。……それから、俺が幼いころ、短い間、そこで暮らしていたからだ」

「え……」

千砂が瞠目する。

靈斬は静かな声で語った。

「最初は忘れていた。ただ、利津家という名を聞いた瞬間、嫌な予感がした。なぜか分からず、困惑するばかりだった」

「それで、いつ思い出したんだい？」

千砂は先を促した。

「雑魚どもの相手をしているとき、納屋が目に入った。それから中庭。それらを見た瞬間に、思い出した」

「……そうかい」

靈斬は溜息を吐く。

「……俺は間違っって人を殺めるところだったよ」

靈斬は静かな声で言った。

「踏みとどまったじゃないか」

「そうだな」

靈斬は苦笑する。

「でも、あんなに怖いあんたは初めて見たよ」

千砂はできれば二度と見たくないと言わんばかりに告げた。

それを聞きながら、靈斬は顔をしかめた。全身の傷が痛むのだ。それでも、声だけは普段通りになるように努めた。

「たまには酒でも呑みにいくか」

「それもいいねえ」

靈斬と千砂は笑い合った。

それから一週間後のある日、行商人が店を訪れた。

「お久しぶりです」

「こちらへ」

靈斬は頭を下げ、そう促した。

まだ全身の晒し木綿が取れておらず、頭を下げた際に傷が痛んだ。が、表情を変えずに、行商人を迎え入れた。

「あの騒ぎの後、瓦版を読みました、あの男は三年前のことを、自身番に話したそうですな」

「ええ」

「あの日を境に、刺客もぱったり止みました」

「それはようございました」

「いえ、靈斬さんのおかげです」

「私は依頼を受けただけです」

靈斬は苦笑する。

「これからどちらへ？」

「江戸を出ようと思います。これでのびのびと商売ができる。……ささやかなものですが、お納めください」

行商人は濃紺のたすきを差し出した。

「よろしいのですか？」

「お礼をさせてください」

「では、ありがとうございます」

靈斬は、たすきを受け取った。

「私はこれにて」

商人はそう言って店を後にした。

その後、靈斬は普段通りの格好で自身番を訪れた。

「おや、刀屋じゃねえか。なんの用だ？」

岡っ引きが顔を上げる。

「利津重五郎に会いにきた」

「分かった。こっちだ」

岡っ引きの後に続いた。

「好きに話すと良い」

岡っ引きはそう言って、去った。

靈斬は牢の柵越しに、正座をしている重五郎を睨みつけた。

着ている着物の合わせ目から、晒し木綿が覗いている。

牢に入れられる前、処置は施されたようだ。

「なんじゃ？」

「満久はどうなった？」

「近くの診療所に運ばれたが、しばらくして死んだわ」

靈斬は鼻で笑った。

「なにがおかしい？」

重五郎は靈斬を睨む。

「いや、あの男らしい、無様な最期だったな、と。あれだけ刺せば、死にもするか」

「お主、少しは罪深さや悲しさなどを感じはしないのか！」

靈斬はやれやれといった具合に、溜息を吐く。

「感じないわけではないが、反応とすれば薄い方だろうな。だが、それがどうした？ もともと俺は穢れている。それが余計穢れたからと言って、気にする馬鹿がどこにいる？」

「なっ……！」

重五郎は息を呑んだ。

異様に感じたことだろう、彼の冷静さに。事実を淡々と受け止め過ぎているのだ。

「お主はいつから、そんな冷酷な人間になったんだ……」

「家を出てから、だろうな。貴様らからは負の感情しか抱けなかった。それもあって、俺は闇に歪められたんだろう」

「……なぜ、責めない？」

「無駄だからだ。そんな真似をしても、俺の時間が戻るわけでもなし」

靈斬は即答した。

「貴様は自分の罪を向き合うことだな。もう、守るものなどないのだろう？」

靈斬は冷ややかな声で言う。

「お主の言う通りじゃ。最初から道を間違えていたのかもしれない」

「今さら気づいたか。馬鹿な男だ」

靈斬はくくつと嗤った。

「お主を歪めてしまったこと、その原因はわしらにもあるのだろう。それは、すまなかった」

重五郎は頭を下げる。

「それは貴様の自己満足に過ぎん。謝罪ごときで、俺は貴様を、あの家の連中を、赦すはずがなかるうが。だから、全員に手傷を負わせた」

靈斬は吐き捨てた。

「俺は生家を潰したことで、実の兄を殺めた罪を背負っても構わない。貴様らのことは、たとえ死んだとしても、俺は憎み続ける」

「お主の憎しみは、そこまで強く深いものなのだ……」

重五郎はぽつりと呟いた。

靈斬はその言葉を最後に、罪人の前から去った。

第九章——人身売買

それから一週間後、まだ傷が完全に癒えきっていない靈斬の許に、一件の依頼が舞い込んだ。

名のある家の武士が店を訪れ、刀の修理と、話を聞くことになった。

「その前にひとつ確認させていただきたいことが。よろしいでしょうか？」

「うむ、なんだ？」

武士は鷹揚にうなずいて、先を促した。

「人を殺めぬこの私に頼んで、二度と後悔なさいませんか？」

「後悔はせぬ。他に頼める相手がいない」

「刀の状態を確認しとうございます」

「これだ」

靈斬は頭を下げると、鞘を抜いて刀身に目を走らせる。

相当使い込んでいるらしく、柄は汗が染みこんで変色し、切れ味が落ちていた。鞘とこすれてできた瑕もあった。

「承知いたしました」

「依頼の件だが」

「はい」

「農民やそれ以下の者どもを集めている武家がある。それを潰してほしいのだ」

「集めている……とは？」

「探らせたところ、どうやら女、子どもを集めているようだな。それで金を儲けているのではないかと」

「……人身売買ですか」

靈斬は苦い顔をした。

「うむ」

「その武家の名はご存知ですか？」

「式部家だ」

武士はそう言って小判五両を差し出した。

「これは、前金じや。成功報酬は小判十両」

「承知いたしました。では、一週間後にお会いしましょう」

靈斬は小判を袖に仕舞う。

「分かった」

武士はそう言って、店を去った。

靈斬はそば屋には寄らず、千砂の隠れ家に向かった。いなければ出直せばいいくらいの軽い気持ちでいた。

「千砂、いるか？」

「いるよ」

千砂が顔を出し、靈斬を招き入れた。

「依頼が入った」

「どんな？」

千砂はお茶を出しながら、そう尋ねた。

お茶を出してくれた彼女に内心で驚きながらも、靈斬は話を続けた。

「人身売買をしていると噂の式部家だ」

「家ごとってことかい？」

人身売買と聞いて不快な顔をした千砂は、そう聞き返した。

「調べてみないと分かんが、おそらくは」

靈斬は言いながら、お茶を飲んだ。

「人身売買の証拠と、人数が分かればいい」

「できたら、人身売買の首謀者も調べてみる」

「どれくらいかかる？」

「三日」

「分かった」

靈斬はそれだけ告げると、お茶を一気に飲んで、隠れ家を後にした。

四柳には、仕事や裏稼業も厳禁だと止められていたが、依頼を受けてしまった以上、やるしかなかった。

その夜、靈斬は以前、行商人からもらった濃紺のたすきをして、刀の修理に取りかかっていた。

身体の痛みを堪え、震える指に力を込め、柄はそのままに、砥石をだんだん粗目の細かいものへと変えていきながら、静かに研いでいく。

その間、靈斬は考える。

使い込まれているのに、手入れが行き届いていない。

——なんらかの理由で、それもできなかったのだろうか？

今度聞いてみることにし、靈斬は研ぎ続けた。

同じころ、千砂は忍び装束に身を包み、式部家へ忍び込んでいた。

屋敷の屋根から、全体を眺めたとき、入り口から数名の女、子どもが入ってくるのが見えた。その後を追う。部屋に入ったので、屋根裏に入るとその部屋の天井を一部ずらして、様子を探る。

「今回は少ないな」

女らを品定めしている男が言う。男の周りには妖艶な格好で女が侍^{はべ}っていた。

「だが、上玉もいるなあ」

嫌な笑みを浮かべた男は、一人の女を強引に抱き寄せる。

残りの女達には去るように命じ、男は女の叫びを気にせず、身ぐるみはがし始めた。

千砂は女の悲鳴に後ろ髪を引かれつつも、部屋を去った数人の女子どもらを追った。

彼女達を通されたのは奥の部屋で、そこには貧しい身分の者達が身を寄せ合って座っていた。

「入れ！」

彼女達を突き飛ばすようにして、部屋に入れた武家の男は、ぴしやりと戸を閉めた。

わずかに差し込む光で彼女達の表情を見ると、皆、絶望しきった表情をしていた。ろくな食事はおろか、水すら与えられていないように思えた。

千砂は今日はこのくらいでいいかと思ひ、式部家を後にした。

翌日の同じ時間、千砂は再び式部家へ。

敵となりそうな人物がどれだけいるか、屋根裏を音もなく駆け回りながら、数えていった。

奥の様子が気になり見にくくと、部屋の奥の方にいた女達が数人、姿を消していた。

千砂は暗い顔をして、式部家を去った。

千砂が式部家に侵入するようになって、三日が経った。

その日も同じように、屋根裏から様子を探った。ちょうど、女を品定めしていた男の部屋を通り過ぎると、声が聞こえてきた。

千砂はその場に立ち止まり、天井の板をそうとずらすと、会話に耳を澄ませた。

「それで、女達の様子は？」

「皆、疲れ切っております」

「これから楽しい仕事があるというのに、なんともったいないことよ、のう？」

「そうでございますね」

いかにも楽しそうな男とは正反対に、そう答える武士の声は冷たかった。

「狂治郎様」

「なんじゃ？」

「いつまで、かようなことを続けるおつもりですか」

「なんじゃと？」

「女子達おなごを売り、里が三つも崩壊しているのですぞ！」

千砂はその内容に驚くと同時に、この武士の勇気を讃えなくなった。

「だからなんだ？」

「もう十分ではございませんか！ これ以上続けても意味がありません！」

「黙れ！ お前は、この家を出ろ。ただし、このことは決して他言するな」

「……承知いたしました」

千砂はその様子を見ながら思った。敵が一人減った。

これ以上女達の悲しい顔を見るのが嫌で、そのまま屋敷を後にした。

そのころ靈斬はというと、刀の研磨を終え、ひと休憩していた。

傷が痛み、靈斬は顔をしかめた。

ゆっくりと床に寝転び、依頼のことに頭を巡らす。

すると、戸を叩く音が聞こえてくる。

「開いているぞ」

靈斬が身を起こして応じると、普段通りの格好をした千砂が入ってきた。

「ああ、終わったのか」

靈斬は言いながら、お茶を入れると、急須と茶碗を二人分載せた盆を持って、奥の部屋へいく。それに千砂が続き、彼女が座るとその傍らにお茶を置いた。

——珍しいこともあるもんだね。

千砂は内心でそう思いながらも、本心とは別のことを口にした。

「良かったら、これどうぞ」

千砂は言いながら、手に持っていた小さな包みを開く。

中には団子が二本、入っていた。

「美味そうだな。いただこう」

靈斬はそう言って座ると、団子を一本手に取る。

「最悪な家だった」

「最悪？」

団子を食べている靈斬が尋ねた。

「子どもを集めて、どこかに売っているのは確かだよ。ちょうど、女達が屋敷に連れ込まれるのを見た。その中でもいい女を見つけると自分のものになっている」

「それで？」

靈斬は彼女の最悪の意味に気づいて納得し、先を促した。

「敵は式部狂治郎をはじめ、およそ十人。女達の保護は自身番に任せてもいいかい？」

「ああ」

靈斬は言いながら、団子をつまんだ。

二人がお茶を飲み終わると、千砂が店を後にした。

——今回はなにも聞いてこなかったな。

そんなことを思いつつ、靈斬は痛む身体に鞭打ち、最後の仕上げに取りかかった。

それから数日後の、決行当日。

依頼人の武士が店を訪れた。

「して、首尾はどうなっておる？」

「その前に、これを」

靈斬は言いながら、直した刀を差し出した。

抜刀して出来栄えを確認した武士は笑みを見せた。

「良い出来じゃ」

「ありがとうございます。依頼の件ですが、私の知り合いが、夜な夜な女子どもが屋敷に連れ込まれたのを見たとのことですよ」

「噂は真実であつたか……」

武士は溜息を吐く。

「彼女らをどこに売っているのかまでは分かりませんでしたが、首謀者を突き止めました」
「誰じゃ！」

武士はその言葉に食いついてくる。

「式部狂治郎と申す者です」

その様子に内心で驚きながらも、靈斬は落ち着いた声で告げた。

「あやつか！」

武士はその名を聞くと怒りをあらわにする。

「ご存じなのですか？」

「なにかと後ろ暗いことに手を出しているという輩よ」

「そうでございましたか」

靈斬はとりあえず、うなずいておく。

「刀にしばらく手入れをなさった跡がありませんでしたが、旅にでも出ていたのですか？」

「そうだ」

「偽りにございますね」

「なぜ分かる！」

「刀の状態を見れば分かります。忍びか刺客か、そのどちらかに命を狙われているのではないですか？」

「そうだ。誰の手の者か分からんが、忍びにな」

武士は敵わないといった表情をしてうなずいた。

「では、頼むぞ」

「承知いたしました」

靈斬が頭を下げると、武士は店を出ていった。

その日の夜、靈斬は着替えながら、右腕の血のついた晒し木綿を見遣る。仕方がないと溜息を吐き、着替えを再開した。黒の長着と同色の馬乗り袴を身に纏う。黒の足袋を履き、黒の羽織りを着る。同色の布で顔の下半分を覆う。黒い刀を腰に帯びる。

式部家へ向かった。千砂も少し遅れて後を追う。

下仕えを眠らせると庭から屋敷へ侵入する。

「曲者だー！」

という叫びが終わるのを待ってから、その男を斬りつける。

痛みに喘ぐ男をそのままにしていると、次々に九人の男達が姿を見せる。それぞれに刀を抜き、やけにぎらついた眼で靈斬を見ている。

靈斬はそれをもとめせず、一人ずつ倒していく。ある者は右腕を、ある者は左腕を。身体の一部を血に染めながら、倒れていった。しかし、最後の一人はよほど体力に自信があるのか、それだけでは倒れなかった。靈斬は忌々しげに舌打ちをした後、刀を振りかざして、男の懷に突っ込むが、刀に阻まれる。その刀を強引に押し出すと、それに堪えきれない

まま、壁へと激突。気を失いかけた男であったが、武器を持ち直し斬りつけてくる。それを躲し、右肩を斬りつける。鮮血が噴き出す。返り血が目に入るも、靈斬は目を細めるだけでやり過ごし、左脚に刀を突き刺した。痛みに叫んだ男を無視し、一度抜いた刀を再度刺す。それはまだ傷が癒えきっていない者とは到底思えない動きだった。

念のため蹴飛ばしておく、狂治郎がいる部屋へ向かった。

「なにごとだ！」

靈斬が襖に手をかけようとした瞬間、勝手に開いた。

「お主、誰だ？」

「名乗る必要はない。御免！」

靈斬は言いながら、返り血の付いた刀を振るう。

「危ねえなあ！」

すぐに躲され、右腕に浅い傷を刻んだだけになってしまった。

奥には妖艶な格好をした女達が怯えている。

それを無視し、靈斬は狂治郎と対峙する。

「お主……わしの部下達全員を、倒したのか？」

「そうだが？」

靈斬は、なにか悪いことでもしたか？　と言わんばかりの軽い口調で返した。

「おのれー！」

激昂した狂治郎は、怒りに任せて刀を振るう。的確に靈斬の急所を狙ってくる。それを蝶のように躲し続け、左腕を刺し貫いた。

「ぐお……」

狂治郎は鼻息を荒くし、憎しみに染まった双眸を向ける。

対する靈斬は冷ややかな目をしている。

靈斬は距離を詰めると、体勢を立て直される前に、右脚を刺そうとしたが、刀に阻まれた。

靈斬は舌打ちをして、距離を取ると、忌々しげに狂治郎を睨みつける。

「こつちからゆくぞ！」

狂治郎は言いながら刀を向けてくる。それを受け止めて弾き返す。体勢を立て直される前に、右脚を刺し貫いた。

「ぐあっ！」

この一撃で、狂治郎は膝をついた。

靈斬は刀についた血を払って、鞘に納める。笛の音が聞こえる中、靈斬は怯える女達に

告げた。

「自身番の連中がくるまで、ここを動くな。そして、洗いざらいすべて話せ。いいな」
女達が一斉にうなずくのを見ると、女達が閉じ込められている部屋へ向かう。鍵を壊すと靈斬は屋敷から去った。

その様子を見ていた千砂も屋敷を後にした。

帰り道、靈斬は屋根を走っていたが、ふと足を止める。顔の下半分を覆った布を外し、血を吐く。掌についたそれをぐいと拭い、足を踏み出す。だが、視界が定まらず、その場に片膝をつく。

「その身体で、依頼をこなすのはやっぱり無茶だったんだよ」

そこへ溜息混じりの声が聞こえてきた。

そのまま振り返ると、忍び装束姿の千砂であった。

「そうかもしれないな」

「あんたも分かっていたんだろう？」

「予想はしていた」

「どうして断らなかったんだい？」

「俺の身体がぼろぼろでも、依頼人には関係がない。それに、俺の身体が断る理由にはならない。たとえ、今回の依頼がほかの依頼に比べて少し辛いくらいなら、俺は受ける。依頼はいつだって辛いものさ。その度合いが変わったくらいで、なんだというんだ」

靈斬は静かな声で言った。

「……」

千砂はかける言葉が見つからず、沈黙した。どういうことだ。身体がぼろぼろだというのに、それを無視して、無茶だと分かっているながら、依頼を受けるとは。そこまで自分に残酷になれるのかと、千砂は思った。

千砂は無言でその場に膝をつく、立ち上がるとする靈斬に手を貸した。

靈斬はそれを素直に受け入れ、一歩ずつ、ゆっくりと歩きながら、診療所を目指した。

いつもの倍以上の時間をかけて、診療所に到着した。

靈斬が顔の下半分を覆っている布を下ろしている間に、千砂が戸を叩く。

「誰だ！」

「俺だ」

そう言うと、四柳は不機嫌そうな顔のまま、靈斬を一瞥した。

「しょうがねえなあ、入れ」

四柳はそう言って、奥の部屋まで案内した。

千砂は靈斬を部屋までいくのに手を貸した後、すぐに前の部屋へと戻っていった。

「無茶をしただろう？」

「ああ」

四柳の言葉に、靈斬はうなづく。

上着をゆつくりと脱ぐと、両肩、両腕、腹に巻かれた晒し木綿すべてが真っ赤に染まっていた。脚も裾をまくると同じようになっていた。

「そんな身体で依頼なんぞ受けたら、こうなることくらい分かっていただろう！」

「ああ」

四柳の怒鳴り声に、靈斬はうなづく。

「お前、本当に依頼を受けてきたのか？ 真新しい傷が見当たらんが」

「受けてきた。攻撃を喰らわないようにしただけだ」

「それが、身体に対してできる最大限の気遣いだったのか？」

「ああ。その気遣いも無駄になったかもしれないが」

靈斬は言いながら、苦笑する。

「……」

——靈斬は彼なりのやり方で、身体を気遣っていた。彼の警鐘がようやく鳴り、実行したのだろう。しかし、かなり痛みがあったはずだ。涼しい顔をしてはいるが、その痛みは相当なものだろう。

四柳はそんなことを思いながら、治療を続けた。

それから数時間後……

「終わったぞ。次こそは無茶するなよ。そんな真似したら、きっと動けなくなる」
「分かった」

靈斬は布団に横になったままうなずいた。

四柳が掛布団をかけてやると、靈斬は首だけ動かして、戸の方を見た。

四柳は前の部屋へいき、頭巾を外した千砂に声をかけた。

「終わったぞ、待たせて悪かったな」

「気にしないでくれ」

千砂は苦笑して言うと、部屋の中に入ってきた。

「靈斬、どうだい？」

「あちこち痛む」

靈斬はそう言いながらも、痛みなど感じさせないように苦笑する。

「強がったっていいことはないよ？」

靈斬の強がりを見抜いていた千砂が言った。

「ばれたか」

靈斬はそう言い、顔をしかめ、ふうっと息を吐いた。

「相当、痛むだろ？」

「ああ、動いていなくても痛みが引かん」

「まあ、無茶したんだからしょうがないよね」

千砂が苦笑する。

「嬢ちゃん、ちよっといいか？」

「はい」

四柳に声をかけられ、千砂はうなずいた。

「こいつ、依頼を受けてきたのに、かすり傷ひとつ負わなかったんだよ」

「それは本当かい？」

「ああ、俺が診たから、間違いない」

その言葉を聞いた千砂は、驚いたように靈斬を見る。

「あんたもやればできるじゃないか」

「あんな面倒なこと、二度とごめんだ」

靈斬はそう吐き捨てた。

千砂は笑みを見せた。

——良かった。靈斬に少しでも自分の身体を気遣おうという意思があつて。

千砂は内心でそんなことを思っていた。

数日後、依頼人の武士が店を訪れた。

「よくやってくれた。捕らえられていた女子どもらも無事に保護されたと聞いた」

言いながら小判十両を渡してきた。

靈斬は黙って袖に仕舞うと、武士は店を去った。

その後、靈斬は隠し棚から黒い刀を出し、その奥にあるさらに小さな隠し棚に手を伸ばす。

板を外すとひとつの黒い箱を出す。蓋を開けると、今までの依頼で受け取った金とその

まま入っていた。先ほどもらった小判十両を加え、元ある場所へ仕舞った。

依頼人が去った後、靈斬は痛む身体をゆっくりと動かして、二階へ向かった。

くるまでは気を張って起きていたものの、全身が訴える痛みに逆らうことができず、布団に倒れ込んだ。

初日に比べれば、まだ動けるだけでした。初日などはまともに動けなかった。一日中、横になっていた。痛みが酷く、眠れもしなかったが、落ち着いてきたのか、少し眠れるようになってきていた。

誰かが階段を上ってくる足音がする。相手が分かっていたが、念のため、靈斬は部屋の入り口に視線を向けた。

階段を上ってきたのは、千砂だった。普段通りの格好をして、倒れ込んでいる靈斬を見て目を丸くした。

「大丈夫かい？」

「なんとかな」

靈斬は首だけを動かして、うなずいた。

「あれからどうだい？ 少しはましになったかい？」

「少し眠れるようになった。それと起きていられるようになった。見舞いにもきたのか？」

「そりゃ良かった。そうだよ」

千砂は安堵したように笑った。

靈斬は痛みを誤魔化すためか、ふうっと息を吐く。

首だけ動かして天井を睨む。

こうも自分の思い通りに動かないとなると、苛立ちしか生まれてこなかった。

靈斬は顔をぎゅっとしかめ、震える息を吐き出した。

その様子を見ていた千砂は、よほど傷が痛むのだろうと感じ、胸を痛めた。傍にいることしかできない自分を呪いたくなった。

「千砂……」

「なんだい？」

「なにもできないからという理由で、自分を呪うな」

千砂が辛そうな顔をしていたのを見ていた靈斬が、口を開いた。

「……っ！」

千砂はただ目を見開くことしかできない。

靈斬の目は誤魔化せない。改めてそう思った瞬間だった。

「こういうとき、誰かがいてくれるだけで、ほんの少しでも、身体の痛みを忘れられるものなんだ」

靈斬は静かな声で言う。

「……そうなのかい？」

「ああ」

靈斬は痛みを押し殺しながらも、笑みを見せた。

「ありがとう」

千砂はそう言い、靈斬の近くに座った。

第十章——鍛冶屋の異変

それから一か月後のある日。靈斬の怪我は先の依頼を受けた直後に比べ、だいぶ回復し、ずいぶんと動けるようになっていた。靈斬は店を開けずに、奥の部屋の床に座ってぼんやりとしていた。

そうしている間に、戸をどんどんと叩く音が聞こえてくる。

「開いている」

靈斬が不満げな口調で応じると、慌てた様子の喜助が入ってきた。

「幻驚！」

「なんだ？ 騒がしい」

靈斬は不機嫌そうに喜助を眺める。

「俺の店の商品が……全部売れた」

「ほう、それは良かったな。……今、全部って言ったか？」

靈斬は流そうとして、もう一度聞き返した。

「ああ。装飾品を含めて全部さ」

だが、喜助は相変わらず困ったのか、今にも泣きそうな子どものような顔をしている。

——そんな情けない顔するなよ。

と思いながら靈斬は、話を続けた。

「お前の刀の価値はどれくらいだ？」

「店にあるのはほとんど、足軽が使うような雑刀ざっぽうばかりさ。銭……良くて銀貨くらいだな」

「それで、商品の補充は足りているのか？」

「あっても刀の二、三本だ。装飾品は注文すれば届くだろうけれど、それでも数日かかる。新しい刀を作って前のように商売するには、ひと月以上、かかるんじゃないかな」

「金は足りるが、時間が足りないのか……。買い取っていったのはいつだ？」

「今し方だ。あー、これからあくせく働かないと追いつかねえよ」

「そうか」

「なあ、幻驚」

「どうした？」

「本当にいるのかな？ “因縁引受人”」

「どうしてそんなことを？」

「今の状況、俺一人ならどうにでもなった。だがな、俺には家族がいる。店にあるもんが全部売れたからって、急激に潤うわけじゃない。金は毎日出ていく。俺がなんとかしなきゃいけないのは分かってる。でも、どうしようもねえんだよ。毎日、少しずつ売れてくれれ

ば、俺達家族も困らずに暮らしていけたんだ！ それなのに。こんな日がくるとはなあ……」

——これは喜助に限った話ではないかもしれない。

靈斬はそう直感し、喜助に尋ねた。

「修理前の刀はあるか？」

喜助はきよんとした。

「えっ……。あるけど……？」

「それを持って、今夜この近くにある袋小路にいくといい」

「なんでだよ？」

「〃因縁引受人〃に会えるかもしれないぞ」

「ありがとうな、幻驚！」

喜助は顔を輝かせて礼を言くと、慌ただしく出ていった。

——本当に、うるさい奴だ。

靈斬はそう思った。

それからしばらくして、靈斬はそば屋へ向かった。

「いらっしやいませ！」

そば屋では「因縁引受人」の話題で持ちきりだった。

常連客の一人が靈斬に声をかけてきた。

「幻驚さん！ 今朝の瓦版、見たか？」

「見ていないが、なにをそんなに騒いでいる？」

「〃因縁引受人、人身売買に終止符、打つ〃だってさ！」

靈斬ははしゃいでいる常連客の話を流し、いつもの席に着いた。

「俺も会ってみたいな、〃因縁引受人〃」

「どんな人なんだろうな」

「男だと思う？ それとも女か？」

「俺は男だと思う」

「女だったら意外だよな」

と想像の「因縁引受人」の話題に花が咲く。

こうも盛り上がってしまうと、靈斬の肩身が狭くなる。

「はあ……」

靈斬は思わず、溜息を吐く。

「そば食べて、元気を出してください」

千砂がお茶とともに、醤油そばを持ってきた。

「ああ」

千砂が小声で言った。

「あたしだって、溜息を吐きたいぐらいさ」

その言葉に苦笑した靈斬は、そばを啜る。

そんな靈斬に常連客の一人が声をかけてきた。

「幻鷲さん、ちよいといいかい？」

「なんだ？」

「喜助のこと、聞いたか？」

「商品が一気に売れたって話か」

「ああ。実は、僕のところもそうだったんだ。幻鷲さんのところは大丈夫かい？」

「俺は幸い、いつもと同じだ」

「自分がなんとかするしかないんだよな。独り身で良かったよ」

「そうか。頑張れよ」

靈斬がそう言っていると、その常連客は離れていった。

靈斬は無言でそばを啜った。

その帰り道、どこかに走っていく岡っ引きに声をかけられる。

「刀屋！ ちょっと退いてくれ！」

靈斬は道を譲って、声をかけた。

「そんなに慌ててどうしたんですか？」

「近くの鍛冶屋で殺しがあつてな。旦那に呼ばれたんだよ」

「そうですか」

靈斬はそう言い、岡っ引きと別れた。

靈斬はその足で、殺しがあったという鍛冶屋に向かった。

物陰に身を隠しながら、現場を眺めた。岡っ引きと定町廻り同心の会話に耳を澄ませた。

「こりゃあ……ひでえ」

現場を見た岡っ引きの一言である。

「そうだな」

骸の近くにしゃがみ込み、観察していた定町廻り同心が短く同意する。

背中から刀で斬りつけられ、うつぶせの状態で骸が転がっている。地面には夥おびただしい鮮血

が骸から流れている。

「商品はひとつも残っていないのか？」

「へ、へえ」

店の中を見た岡っ引きがうなずく。

「盗みにでも入られたか……？ うん？」

定町廻り同心は骸の陰から、なにかが入った袋を見つける。ずしりと重いそれを持ち上げ、中身を確認すると、大量の銅貨と少量の銀貨が入っていた。

「商品をすべて、買い込んだ……？」

定町廻り同心は難しい顔をして考え込んだ。

骸となった人物の顔をよく見ると、昼間そば屋で話をした独り身の男であった。

靈斬は複雑な思いを抱えたまま、死因を推測する。

——今のところは、斬られたことによる出血死か。

靈斬はその場から静かに去った。

その日の夜、靈斬は黒装束を身に纏い、同色の布で鼻と口を隠す。短刀を懷に仕舞うと袋小路へ向かった。

屋根から袋小路を見下ろすと、提灯を持った喜助がそわそわしながら立っていた。

「お前が喜助か？」

屋根から飛び降り、近づきながら尋ねた。

「へ、へい！」

「依頼の前に、ひとつ確認させてくれ。人を殺めぬこの私に頼んで、二度と後悔なさいませんか？」

「後悔なんか、しねえ！」

——いい度胸だ。

靈斬は感心しながら、話を続けた。

「お前の店のものをすべて買い取ったという武士の名前は？」

「な、なんでそれを……？」

「幻驚から聞いた」

「たしか、名取^{なとり}」

「それで、俺にどうしろと？」

「俺以外のところでも同じことが起きてるみたいだし、もう止めさせてほしい」

「分かった。刀を寄越せ」

喜助は闇に向かって、刀を差し出す。

少しぞんざいに受け取った靈斬は、喜助に言った。

「一週間後のこの時間、またこい」

「へい！」

靈斬はその返事を聞いて、姿をくらませた。

靈斬は店に戻って着替えを済ませると、喜助から預かった刀に目を通す。

鞘を抜くと、刀身に視線を走らせる。わずかながらも、刀身の反射が違うことに気づいて目を凝らす。なにかの液体が塗られているようだった。靈斬は、その液体を拭き取り、懷に仕舞う。刀を鞘に戻すと、店を出た。

靈斬が向かった先は、四柳の診療所だった。

「なんだ！」

「そう怒るな。お前に聞きたいことがある」

「靈斬か。分かった、さっさと上げれ」

ころつと態度を変えた四柳は、そう言った。

奥の部屋にいくや、靈斬が本題を切り出した。

「この液体、なんだと思う？」

靈斬は懷から紙を出し、折り畳んだそれを広げてみせた。

「こりゃあ……毒だな」

「たしかなのか？」

「ああ、直接触れるとまずい。意識が飛んじまう。拭き取って水で流せば大丈夫だ」

四柳の言ったことに靈斬は目を剥く。

——本当かよ。

靈斬は驚きながらも、平然を装う。

「そうか、気をつける」

靈斬はそう言って、上着を脱いだ。

「ついでに診てくれ」

「普通は、逆だろう」

四柳は溜息を吐く。

そんな四柳に、靈斬は苦笑するしかない。

「だいたいいいな」

傷の状態を見た四柳が言った。

「それは良かった」

靈斬は安堵する。

「でも、あんまり無茶するなよ」

「分かった」

靈斬はうなずくと、診療所を後にした。

靈斬は店に戻ると、刀を一度手拭いで拭き、それを燃やしながら、刀身を水に浸す。

刀身に触れても大丈夫なことから、毒が取れたのだろうと思い、改めて刀身に視線を向ける。

少々切れ味が落ちている程度だった。粗目の細かい砥石を引っ張り出し、丁寧に研ぎ始めた。

それから靈斬は、一人考え込んでいた。

どうして、毒塗りの刀が修理依頼として出されてきたのか？

——なにも知らない喜助を殺すためか？ それとも他に目的がある？ そう言えば、刀の持ち主を聞いていなかったな。

また会ったときに聞くことに決め、靈斬は思案した。

それからしばらくして、靈斬は千砂の隠れ家を訪れた。

「今回はどんな依頼だい？」

靈斬が顔を見せるなり、尋ねてきた。

「名取家の武士が、周辺の鍛冶屋の商品をすべて買い込んでいるらしい。それを止めてくれとのことだ」

「そうかい。二日で調べておくよ」

「分かった」

靈斬はそれだけ聞くと、隠れ家を後にした。

千砂はその日の夜、名取家に忍び込んだ。

「首尾はどうだ？」

その声を聞いた千砂は、動きを止め、天井の板を少しずらして様子を探る。

「は、二軒の鍛冶屋の商品をすべて買い込みました。三件目は幻鷲にしようかと思っております」

「駄目だ。あそこはどれも値が張る」

脇息に寄りかかっている男がそう言った。

「かしこまりました」

若い武士が頭を下げた。

千砂は内心で呟いた。

——なんてこったい。

この武家はもしかして、江戸全部の鍛冶屋から商品を買上げる予定だった？

あり得ない。と言いたいところだが、二軒も成功させているため、否定もできない。

——早く靈斬に知らせないと。

千砂は屋敷を後にした。

千砂はその足で靈斬の店に向かった。

「幻鷲、起きてるかい？」

戸を叩きながら、千砂が言う。

「開いているぞ」

靈斬の少し眠そうな声が聞こえてくる。

「遅くに悪いね」

「構わない。どうした？」

靈斬は盃を片手に酒を呑んでいた。

——いち早く知らせなきゃいけないのに、どうして酒がこんなに似合うんだい。

千砂は内心で突っ込みを入れながらも、本題を切り出した。

「名取家の連中、もう二軒の鍛冶屋の商品を買い上げていた。あんたの店も標的に入っていたよ」

「そうか」

靈斬は動じずそう言った。

「分かっていたのかい？」

「勘だがな」

千砂は思わず苦笑した。

「呑んでるところ、邪魔したね」

「気にするな」

靈斬の言葉を聞いて、千砂は店を後にした。

翌日の同じ時間、千砂は名取家に忍び込んだ。

昨日と同じ部屋から声がした。

「右今様うこん」

「なんじゃ？」

「二軒目の状態を報告をと思い、参上いたしました」

「どうだ、状態は？」

「これまでと同じく、雑刀ばかりでございます。上様に献上するような品は……」
「ありません、とは言えなかったらしく、若い武士は口を噤んだ。

「見つかるまで探すのだ」

「は！」

「して、刀の修理は？」

「一週間かかるとのこと」

「一週間も経っておれば動けぬであろう。様子は見にいったか？」

「はい。それが……頼んだ鍛冶屋はまだ生きているようでして……」

「こういうことじゃ！ 訳を聞き出してこい！」

右今は憤慨して言った。

千砂はそこまで聞いて、屋敷を後にした。

二日後、靈斬は千砂の隠れ家を訪れていた。

「どうだった？」

「首謀者は名取右今。上様に献上する刀を捜していたらしい」

「……四柳に聞いて正解だった」

「四柳さんに？」

千砂が首をかしげた。

「刀になにか液体がついていたから、四柳に見せた」

「そうだったのかい」

千砂は納得したようにうなずいた。

「なら、あの刀は喜助から返さない方がいいかもしれねえな」

靈斬は考え込みながら言った。

「そうかもしれないねえ」

靈斬は千砂と別れ、店へ戻った。

靈斬は丁寧に三日かけて研磨を済ませると、床に寝転んだ。

——鍛冶職人を殺す理由が分からん。それに、殺したところで得などなかりうに。装飾品まで買い占めたのは、組み合わせ次第で、ものになるとでも思ったのかもしれない。だが、安い鍛冶屋を複数、買い占める理由が分からん。

推測と疑問が混じり合い、靈斬は一人、顔をしかめた。

それから数日後、決行当日。

その夜、靈斬は黒の長着と同色の馬乗り袴を身に纏う。黒の足袋を履き、黒の羽織りを着る。同色の布で顔の下半分を覆うことも忘れない。黒い刀を腰に帯びると、修理した刀を持ち、袋小路へ向かった。

「れ……」

「大声で呼ぼうとするな、馬鹿」

靈斬は喜助から見えない場所で、声を出す。

「依頼された刀だがな、事情により預かる」

「修理は、したんですよね？」

「幻驚がな」

「そうですか」

「あの刀の持ち主は？」

「知りません」

「そうか。もう、いけ」

喜助が去った後、千砂に声をかけられる。

「ここにいたのかい。それで、なにか情報は得られた？」

「なにも」

「乗り込むしか、ないようだね」

「ああ、いくぞ」

「はいよ」

靈斬は千砂とともに名取家へ向かった。

二人は屋根裏から屋敷に忍び込み、千砂が右今の部屋の真上まで案内した。静かにしていると会話が聞こえてくる。

「他の鍛冶屋に頼んだと！」

その大声は屋敷中に響き渡るほどであった。

千砂がそっと天井の板をずらして、二人で様子を見た。

「は、はい」

「そやつは誰じゃ！」

「幻驚と、名乗る者でして……」

「毒でやられていたか？」

「それが先ほどまで様子を見ていたのですが、毒に中^{あた}ってはいないようです……」

「どいつもこいつも役に立たんな！」

先ほどから右今は、憤慨しつ放しである。

「申し訳ございません……」

「痴れ者が！」

床に額をこすりつけた家臣を、右今は抜刀して斬ってしまった。

どさつと重い音を立てて倒れ、畳が血で紅く染まっていく。

「早く片づけなければなあ」

骸を前に暢気なことを言っていた。

その一言に千砂と靈斬は、頭の中でぶつんとなにかが切れた音が聞こえた。

靈斬はさらに天井の板をずらして、右今の左横に飛び降りる。

「なに……」

靈斬は飛び降りるや、右今の首に刀を突きつけて言った。

「させねえぞ。家臣を斬っておいて、周囲に助けを求めるなんざ」

「おのれ……」

右今はそうつと部下を斬った小太刀に手を伸ばす。

それを見ていた靈斬は、距離を取る。

その様子を見た右今が悔しそうに顔を歪める。

——こいつの刀だったのか。

太刀を持っていないことに気づいた靈斬は内心で嗤った。

「ほらよ」

靈斬は言いながら、修理した刀をぞんざいに投げる。

畳に転がったそれを拾った右今は、訝しげな顔をする。

「毒ならな、綺麗に落としてやった」

靈斬は布の下で冷ややかな笑みを浮かべて言った。

「貴様……！」

右今が抜刀し、首を狙って斬りかかってくる。

それをぎりぎりのところで受け止めた靈斬は笑みを深くする。布で隠れて見えないが、それは背筋を凍らせるような笑みだった。

渾身の一撃であるにもかかわらず、靈斬の刀は圧される様子がない。それでも力を込めると自らの刀が震え出し、かたかたと音を立て始めた。

「安い鍛冶屋を買い占めることで、出費を削りたかったのか？」

斬り合いの途中に靈斬が問う。

「……」

靈斬はそのまま刀を前へ向かって振ると、右今が体勢を崩す。まだ楽しみたいのか、右今に寸止めの攻撃を何度も仕掛ける。

「早く言えよ」

右今は挑発に乗り、怒りを募らせていく。

「貴様の、言う通りじゃ！」

右今の攻撃を脇腹に受けるも、靈斬の目は冷ややかなままだった。

「なら、ついでにもうひとつ。買い取った店の鍛冶職人を殺した理由は？」

刀同士がぶつかる固い音が響く。靈斬は再度口を開いた。

「口封じか？ それとも……」

怒りと殺意に燃える刀と、遊びのように振るわれる刀が何度も斬り合い、互いの身体を傷つけていく。靈斬は、左腕、右脚、さらに脇腹を二か所傷つけられていた。対する右今は、右腕と、右脚、左肩を。

互いに息が荒くなっている。

畳は亡骸と、靈斬、右今の鮮血で紅く染まっている。

互いの動きが止まるも、出血は止まらない。

「答えろよ」

靈斬は冷ややかな声でそう言った。

千砂はその様子をひやひやしながら見ていた。ただ、靈斬の戦い方の変化に驚いてもいた。

靈斬は、右今の右腕めがけて鮮血の付いた刀を振り下ろす。受け止めた刀を強引に押しつけ、じわじわと右肩に食い込ませていく。右今の右手が耐えられなくなるまで続けると、跳ね返す力がだんだんと弱まっていくのが伝わってくる。それに合わせ、刀の角度を変えると、右今の刀は畳に落ちた。それを見もせず、靈斬は右肩から腕までざっくりと斬り裂

いた。返り血が飛ぶ。

「ぐうう……！」

右今はたまらず、畳に膝を落とす。

「我らのことを探られぬために、殺した……」

右今の疲弊しきった声を聞き、靈斬は血の付いた刀をそのままに、右今を見下ろす。その姿は、人斬りのようだった。

「己を守るために、罪のない鍛冶職人を殺めたわけか」

靈斬は溜息を吐いて、そう吐き捨てた。

ピーツと笛の音が聞こえてくる。

まだ刀をつかもうとしていたので、右足で払うように柄を蹴り飛ばして、右今から遠ざける。

靈斬は刀についた血を振り落とし、流れるような動作で鞆に仕舞うと、その場から去った。

その様子を見ていた千砂は天井の板を嵌め直すと、屋敷を後にした。

靈斬はその足で、四柳の診療所へ向かった。周囲は夜の帳に包まれている。

「こんな時間になんの用だ！」

「俺だ」

「なんだ、お前か」

相手が分かると先ほどの怒りを引っ込める。四柳は黙って奥の部屋に靈斬を通した。

靈斬が横になるのを待って、刀傷を診る四柳が呟くように言った。

「相変わらず酷いな。人斬りかお前は」

「人は殺めていない」

靈斬が即座に言い返す。

「まあ、いい。少し黙ってろ」

四柳はそう言い、薬草や縫合に必要なものを準備し、助手二人を呼びつける。身体を押さえるように命じると、治療を始めた。

それから数分後、いつも通りの格好をした千砂が診療所を訪れるが、声はかけなかった。一時間ほどで脇腹の二か所の傷を縫合すると、汗を拭う。

靈斬は連続した痛みが一時引いたことを感づき、深く息を吐く。

「もう少し続くが、堪えろよ」

「おう」

靈斬が応じると、四柳は自分に喝を入れるため頬を張る。治療を再開した。それから一時間かけて、すべての傷の縫合を終えると、薬草の付いた布を貼り、その上から晒し木綿を巻く。すべての工程を終えるまで二時間かった。

靈斬は上着を脱がされ、半裸の状態で横になっていた。

四柳は言いながら、晒し木綿を巻いた左腕を出した状態で布団をかける。

「……終わったぞ」

「頭が割れるかと思ったぞ」

「そんなことが言えるなら、大丈夫だな」

四柳は苦笑して、前の部屋へ続く襖を開けると声を上げる。

「嬢ちゃん、きていたなら、声をかけてくれりゃあいいのに」

「治療の邪魔、したくなかったんでね」

「そうかい」

「四柳」

靈斬の掠れた声が聞こえてくる。

「どうした」

「俺が初めてここを訪れたとき、小判一両、払ったのを憶えているか？」

「ああ、今でも持ってる」

そう言った四柳に靈斬は苦笑する。

「千砂には……話したのか」

千砂の顔色でそれを見抜いた靈斬は、四柳に視線を向けた。

「駄目だったか？」

「いや、構わない」

即答だった。

——それなら話は早い。

靈斬は内心でそう思った。顔をしかめた後、大きく息を吸う。

「靈斬、今はあまり喋らん方がいい」

「喋らせろ」

靈斬は怒ったように、ぼそつと言い放った。

「分かった」

四柳は、言っても聞かない靈斬の性格を理解しているのだろう、大人しく引き下がった。

「初めてここにきたとき、俺は——」

靈斬は当時のことを語り始めた。

まだ若かった幻鷲は、稼ぎやすい仕事を探していた。

生きるために盗賊まがいのことや、用心棒もやった。当時、仕事のなかった幻鷲はある武士に剣の腕を買われ、人斬りになった。

生きるために人を殺すことに躊躇ためらいはなかった。

今まで仕事でしくじったことはなかった。だが、幻鷲自身が負傷したことだけが唯一の瑕だった。

幻鷲は一仕事終え、報酬を受け取りに戻った。

「暗殺終了いたしました」

幻鷲は片膝を立てて、頭を下げながら言った。

「ならばよい。報酬じゃ」

武士は小判二両を投げて寄越した。

それを拾い、幻鷲は音もなく去った。

次の仕事がいづるか分からない。支障をきたさないために、仕方なく四柳の診療所に向かった。

そして、治療代として小判一両を置いていった。

話を聞き終えた四柳は呟いた。

「そうだったのか……」

千砂は言葉を発さないまでも、驚いた表情をしている。

その様子を見た霊斬は二人から視線を外すと、痛みに顔をしかめた。

「よく話してくれたな。ゆっくり休め」

「ああ。どれくらいで治る？」

「一か月すれば完治する。今日はここに泊まっていけ」

「分かった」

素直にうなずいた霊斬は眠りについた。

「しかし、霊斬の話には驚いたな」

霊斬の寝顔を見ながら、四柳が言う。

「そうだね。今と真逆じゃないか」

「いったい、どんな人生を歩めば、ああなるんだろうな」

「そうだねえ」

四柳に同意する千砂だった。

第十一章―侵される日常

それから一か月後のある日、一人の武士が店を訪れた。

「刀の修理と、ひとつ、話があります」

「どうぞ」

靈斬はそう言い、武士を奥へ通した。

「ではまず、刀を見せてくださいますか？」

差し出された刀を恭しく受け取ると、刀身に視線を走らせた。すぐに鞘に仕舞うと、武士に向き合った。

「それで、話とは？」

「〃因縁引受人 靈斬〃で間違いないですか？」

「いかにも。人を殺めぬこの私に頼んで、二度と後悔なさいませんか？」

靈斬は静かな声で尋ねた。

「はい、兄に罰を与えてほしいのです」

靈斬は疑問に思い、尋ねる。

「なぜですか？」

「あいつは僕にないものをすべて持っているんです」

「たとえば？」

「地位や名誉、女房がいて仲がいい。僕なりに努力しているけれど、なにも報われたため
しがない。あいつからすべてを奪ってしまいたい。殺してやりたいとすら思う。……でも、
それは、できません」

武士は悔しそうに唇を噛む。

――嫉妬か……。

靈斬はそう思いながら、話を続けさせる。

「昼に頼むそばの値が自分のものより少し高かったり、家臣からの信頼も厚い。報酬を多
くもらっているのは、普段の営みを見ていれば分かります」

靈斬は話を聞きながら、思案する。

「あるときを境に、少しずつ羽振りが良くなっているということですね？」

その言葉に武士はうなずく。

「それがまた苛立つんです。誰かに自慢するわけでもなく、自分のためにやっている
というのが伝わってくるので」

「そうですか」

靈斬は冷静に、武士の怒りに歪んだ顔を見る。

「あいつは仕事をなんでも成功させて、出世していく。それなのに、僕はこのまま。そんなの、僕はもう耐えられそうにありません。お願いです。どうか、あいつに罰を」

「私ができることは、あなたの感情の矛先を、相手に向けることだけです。あなたは、罰を望んでいるのではないでしょう？」

靈斬は話を聞きながら、そう返す。

「僕は……あいつの絶望した顔が見たい。すべてを失くしたあいつの顔を。恨まれてもいい。僕がしたかったのは、あいつの——宗崎そうざきじゅうく従六の笑顔を消すことだ」

こちらがぞっとするほどの笑みを浮かべた武士が、恍惚とした表情で語った。

「承知いたしました。では、一週間後に」

「分かりました」

先ほどの表情はどこへやら、冷静な表情を見せた武士は店を去った。

靈斬は先ほど受け取った刀を傍に置き、先ほどの武士の様子を振り返った。

——嫉妬にかられる姿というのは男や女に関係なく、心が醜い証拠だな。それが表情にまであらわれてしまつては、自ら実行するか、ここにくるしか手はない。あの武士も、自らの手を穢してまでやろうとしたのかもしれない。

靈斬は再度、刀を見て思った。

刀には誰かを斬ったのか、傷つけたのかは分からないが、刃先に血糊がべつとりとついていた。

靈斬は血糊を落とすところから作業を始めた。

それから数時間後、靈斬は休憩も兼ねてそば屋へ向かった。

「いらつしやいませ！」

千砂の元気な声に微笑しながら、靈斬は奥の席に腰かける。

常連客達が相変わらず、因縁引受人のことで大騒ぎしていた。

「因縁引受人、今度は鍛冶屋を殺した武家を成敗！ だつてさ」

「すごいじゃないか！ なあ？」

「一度でいいから見てみてえよ」

「なにを言っているんですか、そんなの無理に決まっているでしょう！」

千砂が怒る。

その光景に、靈斬が笑う。

「どうして、笑っているんですか？」

「あいつらのことは放っておけばいい。噂はいつか別のものにとって代わる」
「それもそうですね」

千砂は同意しつつ、騒いでいる連中に視線を向けた。

「かっこいいよなあ。因縁引受人って」

——なんでそうなる？

靈斬はそばを啜りながらそう思うものの、口には出さない。
お茶を飲み、そばを食べ終えると、お代を置いて店を出ていった。

それから数時間後の日暮れ、靈斬は千砂の隠れ家を訪れた。

「千砂、いるか？」

「なんの用だい？」

千砂が顔を出す。招き入れられた靈斬は、どかっと胡坐をかく。

「傷はもういいのかい？」

「ああ。依頼が入ったぞ」

靈斬は端的に告げた。

「どんな？」

「兄に嫉妬する武士さ。対象は宗崎従六。そいつに関する情報すべて手に入れてほしい」

「なぜ？」

千砂は問う。

「依頼人が兄の絶望した顔が見たいんだと。歪んだ優越感に浸りたいんだらうよ」

「最低な男だね」

「まったくだ」

千砂と靈斬は嗤う。

「あまり、深追いするなよ」

靈斬が忠告する。

「どうしてだい？」

「ここ最近、俺の評判が、裏で有名ウツリになっている。俺と組んでいるのは、ばれたくないだろ」

「そうだねえ。じゃ、ほどほどにしておくよ」

千砂はうなずきながら言った。

「ああ。二日で済むか？」

「あたしを誰だと思ってんだい？」

「そうだったな。では、任せる」

靈斬はそれだけ言うと、千砂の隠れ家を後にした。

店に戻ると靈斬は、血糊を落とした刀にもう一度目を通し、汚れを丁寧に落としていく。すると刀本来の鋼の輝きが戻ってくる。靈斬はその作業を続けた。

日も暮れ夜の帳が下りたところ、千砂は忍び装束に身を包み、宗崎家へ向かった。屋根から侵入し、目星をつけた部屋の位置で待つ。

すると声が聞こえてきた。

「従六。今日も仕事お疲れさん。呑まないか？」

依頼人と思われる声が聞こえてくる。

「悪いな、田助。少し仕事が残ってるから」

「そうか……。じゃあ、また明日」

そう言つて襖の開く音がし、ちょうど千砂の真下から足音がする。

千砂はそうつと天井の板をずらして、様子を見ると書の名で従六の部屋だと分かった。仕事をしながら、従六の独り言が聞こえてきた。

「田助には困ったもんだ。いつまで俺の周りをうろついているつもりなんだ。うっとうしい。なんとかして離れる方法を考えないと……」

——上辺だけの付き合いって感じだねえ。

千砂は溜息を吐いて、天井の板を戻す。

そのまま依頼人の部屋を探し、様子を見に行くことにした。

「ああ！　いらいらする！」

依頼人の怒号で部屋の位置を割り出した千砂はそこへ向かい、天井の板をずらして様子を見た。

依頼人は部屋の中をぐるぐると歩き回っている。

今の生活に嫌気がさしていることは、その態度で分かった。

——一週間、意地でも我慢してもらわないとね。

千砂はそう思いながら、屋敷を後にした。

翌日、同じ時間、千砂は再び宗崎家に忍び込んだ。

従六の部屋に向かった。

「旦那様」

「なんだ？」

「夕餉の支度が整いましたが、こちらでお召し上がりになりますか？」

「ああ」

「かしこまりました」

襖が閉まる音が聞こえてくる。

「一人の方が落ち着くなあ」

その独り言を聞いた千砂は、

——嫁も嫌になったのかね、こいつは。

と思わずにはいられなかった。

千砂は依頼人の部屋へ向かい、天井の板をずらすと、部屋がかなり汚いことに気づいて首をかしげた。

——昨晚、発狂でもしたのだろうか？

そう思わせるに足るほど、部屋は荒れており、あれでは足の踏み場もないだろう。

ぐちゃぐちゃになった部屋の真ん中に依頼人が座っていた。

「疲れた」

それはそうだろう。あれだけのものを引っ張り出したのだから。

千砂はそう思いながら、屋敷を後にした。

靈斬はその間、依頼された刀の修理をしていた。

切れ味を元に戻そうと、粗めの砥石を使って丁寧研ぐ。それを数時間繰り返して、今度

は目の細かい砥石に切り替え、同じように研ぐ。それには二時間をかけて丁寧に仕上げた。

「よし」

靈斬はその出来に納得すると、鞘に納めた。

翌日、隠れ家を訪れると、千砂がお茶を飲んでいた。

「どうしたんだい？」

「調べはついたのか？」

靈斬は静かな声で、聞いた。

「ついたよ」

千砂は言いながら、お茶を飲んでいた。

「ならさつさと」

「まあ、そう焦りなさんな」

千砂は靈斬の言葉を遮り、お茶を出す。

「……それで？」

靈斬はお茶を飲みながら尋ねた。

「依頼人も宗崎従六も最低な男だったよ」

千砂は溜息混じりに言った。

「というと？」

靈斬が先を促す。

「依頼人は、どうにかならないかって部屋のものに当たってる。宗崎の方は、夫婦仲、兄弟仲、ともに冷え切っているようですね」

「想像以上だな」

靈斬は溜息を吐きながら、お茶を飲む。

話の内容とは裏腹に、のほほんとした空気が漂う。

「念のため数日、夜だけ少し様子を見るかい？」

靈斬は考え込む。

「……いや、いい。それでお前が身体を壊してもらっても困る」

「おや？ 一応、心配してくれるんだね」

千砂が笑みを見せる。

「そりやな」

靈斬はそっけなく言って、お茶を飲んだ。

それから数日後、依頼人が店を訪れた。

「そういえば、これを忘れていました」

武士はそう言って、小判五両を渡してきた。

靈斬は黙ってそれを袖に仕舞い、代わりに修理した刀を差し出す。

依頼人は出来を確認せず、腰に帯びる。

「刀に血がついておりましたが、なにかあったのですか？」

「なんでもありません。それで、従六のことは調べがついたのですか？」

靈斬は静かな声で答える。

「大方は、ですが」

「そなたから見ても、従六はどのような人間だと思いますか？」

武士がどこか嬉しそうに尋ねてくる。

「最低な男です」

嬉しそうにする質問がそれかと、内心で呆れながらも靈斬は答えた。

「そうですか」

武士はその言葉を聞いて、嬉しそうに店を出ていった。

決行当日。靈斬は黒の長着と同色の馬乗り袴を身に纏う。黒の足袋を履き、黒の羽織りを着る。同色の布で鼻と口を隠す。黒い刀を腰に下げると、宗崎家へ向かった。

靈斬は下仕えの者に裏口を開けさせ、そいつを昏倒させる。

そのまま、千砂に聞いていた従六の部屋を目指す。

新たな敵に見つかり、騒がれる前に倒す。

靈斬の身体に新たな返り血がかかる。

靈斬は気にせず、一直線に部屋を目指した。

襖を開けると、じろりと睨む従六と目が合った。

同時刻、千砂はすでに屋根裏から屋敷に侵入し、天井から様子を見ていた。

「なに奴だ」

従六は右手を刀の柄に置く。

「誰でも良からう」

靈斬は冷ややかな声で応じた。

靈斬は黙って刀を抜く。それに従六も倣う。

「やあ！」

先手必勝とばかりに、従六が右手で刀をつかんで、斬りかかってくる。靈斬には左肩が左腕を庇っているように見えた。

その刀を躲し、左肩を狙うも、従六の刀に阻まれる。

靈斬が狙い、攻撃し、従六が防ぐ。

そんな斬り合いが幾度となく続く。

互いに一滴の血も流さず、刀同士のぶつかり合う音だけが屋敷内に響く。

斬り合いからおよそ十分後、その形勢に変化が起きる。

靈斬が、刀を振り下ろし、従六の左肩を斬りつけたのだ。

着物が切れ、鮮血とともに晒し木綿が顔を覗かせる。

以前、依頼人に斬られたのかもしれないと、靈斬は推測を立てる。けれど、口にはしなかった。

それをきっかけに、切り結ぶたびに、一筋の鮮血が飛び散る。

自分のものか、従六のものか分からぬ鮮血と、互いに血に染まっていく刀。

靈斬は相手を殺さないよう、両肩、両腕、両脚に狙いを定める。一方、従六は首と腹を狙っている。

従六は首に向かって突きを繰り出してきた。靈斬はそれを半歩右にずれて躲す。続いて腹に向かって一閃。その刀を受け止め、左側に向かって弾き返した。従六が持っていかれそうになる刀を引き戻している間に、靈斬は右肩と右腕を斬りつけた。

「ぐううっ！」

右手ではなく、左手で刀をつかんだ従六は、痛みに呻いた。

靈斬はさらにたたみかける。左脚を斬りつけようとしたが、刀に阻まれる。今度は従六が脇腹を狙って、突きを繰り出してきた。それをあえて受けた靈斬は、脇腹から鮮血を流す。焼けるような痛み^{とほ}に顔をしかめるだけに留まった。

攻撃を受けても表情が乏しい靈斬に、従六は不思議に思った。なぜ、それだけの表情でやり過ごせるのか、分からなかった。

互いに息が上がっている。そろそろ、決着をつけた方がいいかもしれないと、靈斬は思った。

靈斬は右脚を刺そうと攻撃を繰り出す。反応が遅れてしまった従六は、それを受けてしまふ。

「ぐああああ！」

肉を断つ嫌な音と、強引に刺してくる感覚とが、その身を襲い、従六は叫んだ。

靈斬が刀を抜くまで、その叫び声は続いた。

刀を抜くと、負傷した右脚でなんとか立とうとしたが、がたがたと右脚が震える。左脚に全体重をかけることで、ようやく、なんとか立つことができた。

そんな状態でも、従六の双眸からは、戦意が消えていなかった。そんな彼に感心しつつ、靈斬は刀を右肩に向かって振り下ろした。

身体の釣り合いを取ることで精一杯な従六の身体は、それを受け止めるだけの力がなかった。焼けるような痛みが襲い、鮮血が溢れ出す。

従六はその攻撃を受けた後、戦意を無くし、畳に膝をついた。

従六の四肢は血に塗れていた。

靈斬は立っているものの、両腕や左肩、脇腹に傷を負い、そこらばたばたと鮮血が滴っている。

ピーツと笛の音が聞こえる。

靈斬は無言で刀を仕舞うと、その場から去った。

千砂も屋敷を後にして、靈斬と合流した。

「誰だ！ おい、待て！」

間違って岡っ引きに追いかけられ、靈斬と千砂は必死で逃げる。

靈斬が途中で転ぶ。

「俺のことはいいから、先にいけ」

千砂は唇をぎゅっと噛んで、指示に従った。

靈斬はなんとか体勢を立て直すと、屋根に上って身を隠した。

「うん？ どこにいったんだ？」

岡っ引きは辺りをきよろきよろしたが見つけられず、その場から去った。

靈斬は大きく息を吐くと、顔をしかめる。

「早くいかなければ……」

靈斬はふらつきながら、四柳の診療所を目指した。

それから十分後、ようやく四柳の診療所に辿り着く。

そこまでに何度血を吐き、倒れそうになったか、今の靈斬には分からなかった。

「靈斬！」

慌てた四柳の声が聞こえるが、それに答えることができなかった。

靈斬はその場に倒れてしまった。

四柳と先にきていた千砂は、二人で靈斬を運び込み、四柳は治療に専念した。

「こんなになってまで……。どうしてもっと早くこなかったんだ。……この馬鹿」

四柳は言いながら治療を続ける。出血を止めるため、傷の周りを縫合する。それを幾度も繰り返し、両腕と左肩の縫合を終えると、混ぜて潰した薬草を塗る。その上から丁寧に晒し木綿を巻いていく。その手つきは慣れたもので、傷を労わるように優しさも込められているようだった。

それから二時間後――。

「嬢ちゃん、終わったぞ」

「まだ、目が覚めないのかい？」

「ああ。もう一晩つてところだろうな」

「そうかい」

「なにがあった？ 詳しく聞かせろ」

四柳の声には怒りが滲んでいた。

千砂は、見たまま、すべてを話した。

「馬鹿が、さっさと終わらせりゃあいいのに」

「依頼には応えないとね」

四柳は食い下がった。

「そんなこと言ってられねえよ。本当に身体が持たねえよ」

四柳はいらしながら言った。

「でも、その通りだよ」

千砂はその言葉に同意した。

翌日の夜、靈斬はようやく目を開けた。

「ここは……？」

靈斬は掠れた声で言った。

「おう、目が覚めたか」

四柳の顔がぼんやりと見える。靈斬は何度か瞬きをした。

「嬢ちゃん、靈斬の馬鹿が目を覚ましたぞ」

「馬鹿は……余計だ」

靈斬は掠れた声で突っ込みを入れた。

「無理に喋るんじゃないよ」

千砂が枕元まできて言った。

靈斬は黙ったまま、顔をしかめた。傷が痛むのだ。

「お前は無茶ばかりしやがる。少しは、俺の言うことを聞け」

「……断る」

「なにをお！」

「四柳さん！ 落ち着いて！」

千砂の声で四柳は冷静になる。

「おい、靈斬。今回、お前は気を失った」

「……そうなのか」

靈斬は咳払いをして答えた。

「なんで驚かないんだい？」

「予想は、していたからな」

「なんだい！ つまらないね！」

千砂は鼻を鳴らす。

「靈斬よお。お前、人を怒らすの、天才じゃないか？」

四柳は苦笑する。

「……それを言われても、嬉しくない」

靈斬は大きく息を吸った。

「まだ痛むだろう？」

「ああ」

靈斬は溜息を吐く。

「少しは懲りたかい？」

「いや、まったく」

靈斬は苦笑する。

四柳と千砂は顔を見合わせ、苦笑した。

それから数週間後、靈斬は少しずつ身体を動かせるようになり、休業していた。

休業中であるにもかかわらず、戸を叩く音がする。

「開いていますよ」

靈斬は言いながら玄関に向かう。

「久しいですね」

姿を見せたのは依頼人の武士だった。

「では、奥に」

靈斬は武士を案内した。

靈斬は正座を、武士は胡坐をかいて座ると、本題に入った。

「実に見事な手際でした。兄は医者にいったきり。兄の妻は心を病んだとのこと。ああ、実に愉快です」

その様子を冷ややかに見ながら、靈斬は愛想笑いを浮かべた。

「そうでございますか」

「では、成功報酬を」

武士は言いながら、小判十五両を渡した。

靈斬は黙って報酬を受け取り、袖に仕舞った。

「ひとつ、質問があります」

「为什么呢？」

笑顔のまま、武士が応じた。

「……実の兄に刃を向けましたね？」

「なぜそう思われたのですか？」

武士は見破られたことに動揺しつつも、そう言った。

「刀に付いていた血糊と、従六殿の左肩に晒し木綿が巻かれていたからです」
靈斬は冷ややかな声で告げた。

「……その通りです。酒に酔った勢いで、少々やりすぎました」
言葉とは裏腹に、喧嘩をして叱られた子どものように、笑ってみせた。
去っていく武士を見送った後、靈斬は思う。

——実の兄を殺しかけたというのに、清々したというあの表情。人とはなんと恐ろしい。
ほんの少しでも、暗い顔でもすれば、まだ人らしいと思える。しかし、それすらないと人ではないのかと思えてしまう。

靈斬はそんなことを思った。

さらに数週間が経ったある日、靈斬は店を閉めたまま、ぼんやりと考え事をしていた。
すると、荒々しく戸を何度も叩く音が聞こえてくる。

「なにごとですか？」

靈斬は言いながら戸を開ける。

そこには定町廻り同心がいた。

「いったいなんの用でございますか？」

「因縁引受人 靈斬と名乗る者を知っておるか？」

「いえ、存じ上げませんが……。その方がどうかなさったので？」

「少し前、お家が潰れるまで暴れまわったそうだ。幸い死人が出なかっただけ良いが」

「そうでございましたか」

靈斬はうなづく。

「もし、彼の者の情報が入ったら、なんでも良いから、自身番へ報告を」

「かしこまりました」

定町廻り同心は戸を閉めて去っていった。

「驚いた」

靈斬は店の中で一人呟く。

——あれだけ店で噂になっていれば、こうなるのも仕方ないのかもしれない。

靈斬はそう思った。

それから数日後、戸を叩く音が聞こえてきた。

「開いておりますよ」

と靈斬が言いながら顔を出すと、怖い顔をした岡っ引きと目が合った。

「これは、親分。いったいなんのご用で？」

靈斬は動じることなくそう言った。

「今から一か月前くらい、武士が何度かここを出入りしてるって聞いてなあ。たいてい夕方に。あんたなにか隠していやしないかい？」

靈斬は愛想笑いで答える。

「それは刀の修理を依頼なさった方々ですよ」

「そうか。じゃあ、宗崎家で怪しい者を見たんだが、心あたりないかい？」

「ありません」

即答だった。

「あんた、怪我してるようだけど、なにか面倒事にでも巻き込まれたかい？」

「いえ、そういうわけではございません」

その問答に割って入る声があった。

「おい、五朗！ いままで話している！ そなたが幻驚か」

「す、すいやせん！」

「はい」

頭を下げる五朗と代わり、靈斬はうなずいた。

「その怪我はなんだ？」

「なんでもございません」

「自身番へ連れていけ！」

「ちよつと、旦那！ いったいどういうことで？ こいつを疑ってんですかい？」

「武家で有名な鍛冶屋だぞ。そんな奴が怪我をしているだなんて、怪しいに決まっておろう！」

靈斬は抵抗することなく縛につき、自身番に連れていかれた。

靈斬は取り調べを受けることになった。縄で両手を縛られ、上着を脱がされた。晒し木綿も外され、傷だらけの、引き締まった上半身があらわになる。

「利津家で三年前に起こった刃傷沙汰について、なにか知っていることはないか？」

「ない」

そう答えた瞬間、腹を殴られた。

「世を騒がせている」因縁引受人 靈斬「という者について、知っていることは？」

「……ない」

右頬を殴られた。

「この刀傷はどうした？」

「答えるつもりはない」

左頬を殴られた。

靈斬が閉じ込められてから二日が経過し、その間寝ずの拷問が続いていた。寝そうになれば水をかけられ、殴られる。その繰り返しだった。

同心が靈斬の身体を見て言った。

「この古傷……すべて刀傷だな、どうしてこんなに多いんだ？」

「だいぶ昔のことだ。思い出せん」

靈斬が答えると、腹を殴られる。

靈斬は痛みを顔をしかめた。

「思い出せ！」

靈斬は黙った。

それから一週間後、また定町廻り同心が顔を出した。

「言えば、楽になるぞ？　楽になりたいとは思わないのか？」

靈斬はその問いかけには一切答えなかった。

「おぬしの部屋を調べた。隠し棚のようなものがあつたが、開け方が分からぬ。あそこにはなにが入っている？」

その問いにも靈斬は答えなかった。

「やれ」

その声が響くと、大男が入ってきて何度も靈斬を殴った。

靈斬の呻き声と殴る鈍い音だけが周囲に響く。

「言えば楽になると、何度言えば分かるのじゃ？」

定町廻り同心は靈斬の髪をつかみ上げて、そう言った。

「……」

靈斬は無言を貫いた。

「そうか。続ける！」

それは、止まない暴行が始まる合図だった。

それからさらに一週間後、靈斬は自らの舌を血が出るほど噛み、叫びを押し殺していた。

「ぐっ……！」

ちようど、炎で真つ赤に焼けた鉄の棒を背中に当てられていた。肉が焼ける音と臭いが、斬られるよりも嫌な痛みが全身を襲う。

それが終わると同時に水をかけられ、わずかだが痛みが弱まる。

大きく息を吐いていると、同じ問いが告げられる。靈斬は決して答えなかった。

それから、靈斬は火傷の痛みのせいで、一睡もできなかった。空腹と痛みに堪え続けた。

そのころからもう、なにも聞かれることはなく、一方的な暴力に耐える日々を余儀なくされた。

腹の右側を殴られる。ただの拳ではなく、武装でもしているのか、なにかが突き刺さった。腹からは鮮血が溢れ出す。男の手をよく見ると大きな棘がついた布を拳に巻いていた。

——道理で血が出るわけだ。

靈斬は内心でそう思った。

腹の左側に先ほどと同じ痛みが襲う。思わず、血を吐き出した。続いて腹の真ん中を。気のすむまで武器を喰いこませると、一息に抜いた。

「がはっ！」

靈斬は咳き込んだ。

戸が開く音がして、暴力を振るう男が、交代する。男は鞭を持っていた。

出会い頭に、腹に一発。火傷でまだ痛みの引かない背中に一発。

「ぐっ！」

これには、靈斬は呻き声を上げた。当たり前だ、まだ痛んでいる部分を叩かれたのだから。

縛られた両腕にそれぞれ一発。鞭が肉を叩く鋭い音が、何度も、何度も、響いた。

靈斬が自身番から出られたのは、それから二週間後だった。

地獄のような日々が終わったことに、靈斬はただただ安堵していた。それを感じさせまいとするかのように、火傷が痛む。それだけでなく、全身が痛みに声なき悲鳴を上げていた。

先の依頼でぼろぼろだったのにも関わらず、一方的な暴力を受け、靈斬はともに歩けない状態だった。

「幻驚！」

真っ先に駆け寄ってきたのは、四柳と、千砂だった。

意識だけはなんとか保とうと躍起になり、二人に両脇を支えられ、診療所へ連れていかれた。

治療を受けているときの記憶は断片的で、靈斬はいつの間にか目を閉じた。

靈斬が眠っている間、千砂と治療を終えた四柳が話をしていた。

「連中はなにを考えているんだ。靈斬を殺す気か！」

四柳は怒っていた。まだ傷が癒え切っていない靈斬の身体を、完膚なきまでに痛めつけたことに対して。

「たしかに、鍛冶職人があれだけの怪我をしていれば怪しまれるけれど、連行まではしなくてもよかったはずさ。……それで具合は？」

千砂も怒りをあらわにしつつ、尋ねた。

「殴打した傷が大半だが、一か所、背中に大きな火傷の痕があった。それと腹に三か所の傷。これはなにか尖ったもので刺されたようになってる。それにかなり衰弱している」

四柳は冷静に告げた。

「奴ら、靈斬をあるかないかも分からない程度の疑惑で、拷問したってのかい！」

「どうやらそうらしい」

四柳は溜息を吐きながらも、内心で怒っていた。

「いつ目覚めるんだい？」

「五日のうちには目覚めると思うぞ」

五日と聞いた千砂は、その程度で良かったと、安堵した。

「じゃあ、あたしはこれで」

「ああ、靈斬が目覚めたら、知らせる」

「頼んだよ」

千砂はそう言って診療所を去った。

それから五日後、靈斬は横向きのまま、うつすらと目を開けた。

「ここは……診療所か？」

靈斬が小さな声で言う。

「そうだ。大丈夫か？」

四柳の優しい声が耳朵を打つ。

「……なんとかな」

「靈斬！」

四柳の助手から知らせを受けた千砂が、急いできたのか肩で息をしながら、入ってきた。

「千砂か」

靈斬は無意識に千砂に向かって手を伸ばす。

その様子を見ていた四柳はそうとその場を後にした。

その手を握った千砂は、安堵のあまり、涙する。

「泣いて、いるのか？」

靈斬が千砂の顔をよく見ようと、目を細めて聞いた。

「心配させるからだよ、馬鹿！」

「悪かったな。今回は妙な疑いをかけられちまったが、次からは気をつける」

「そうしてくれないと困る」

靈斬と千砂はそう言って笑い合い、手を離した。

「なあ、お前の話が聞きたい」

突然、靈斬が言った。

「あたしのなにを話せていうんだい？」

「昔のお前が知りたくなった」

「寝るんじゃないよ」

「痛みが酷くて寝れん」

靈斬は苦笑して、即答した。

「あたしは忍びの里で、いじめられていた」

千砂はそう言い、遠い目をした。

千砂は里親の許で生活をしていた。

家の裏手で、同じ歳の男子ら五人に囲まれ、殴られていた。

「なんでお前が」

「女が忍びになんかなれない」

「ここにいない方がいい」

などと暴言を吐かれ、暴力を受けた。

彼らへ喧嘩を売った覚えはない。普通に日々の生活を送っているだけだ。女らしく、普通の生活を送ることも考えた。けれど、彼女には忍びになるだけの才があった。

ものは試しで取り組ませた、勉強、武術、体術ともに素晴らしい結果を叩き出したのだ。大人達はこれ幸いと、千砂にありとあらゆる武術や知識を叩き込んでいった。

喧嘩などやり返すこともできた。それをしなかったのは、自分が偉いと認識させることは違うと気づいていたからだ。

——殴って気が済むのなら、それをやらせるまで。

幼いながらも、固い意思を持っていた。

千砂がめきめきと腕を上げていっても、男子らに暴力を受ける日々は終わらなかった。むしろ酷くなっていった。

それから数年経ち、十五歳になっても暴力は続いていた。

「女のくせに、調子に乗っているんじゃないか！」

罵声とともに、腹を蹴られ、頬を殴られる。武器を持っていれば、殺されてしまうような勢いがあった。

いつもは修業が終わった午後から日暮れまで続けられる暴力だったが、この日は違った。「お前ら、そこでなにをしている！」

誰かの怒鳴り声が聞こえてきた。

「やべえ！ 早く逃げるぞ！」

その一言を合図に、千砂の目の前から男らがいなくなった。

「つたく、なんでこんなことが起こってんだ？」

溜息混じりに言った男は千砂に手を差し出す。

「大丈夫か？」

千砂よりも五つ上くらいの青年だった。その手を取ることはせず、ふらふらと立ち上がった。

「お前さんが女子おなこの忍びか？」

千砂はこくんとうなづく。

「仲間達から話は聞いていたよ。だけど、どうしてあんなことに巻き込まれていたんだ？」

「あなたは……誰ですか？」

千砂は痛む口を強引に動かして尋ねた。

「おれは飛虎ひこ。最近まで長い任務があつてな。帰ってきたところなんだ。べっぴんさんの顔が台無しだな」

飛虎は言いながら苦笑する。

「あいつらは……女の私が気に入らないだけ。自分達の方が優れている、って示したいだけかもしれない」

「そうか。また殴られるようなら、おれに言いな」

「どうして？」

千砂は首をかしげる。

「放っておけないからさ」

飛虎は笑って見せると千砂の前から去った。

その日の夜、千砂は里親に尋ねた。

「飛虎さんって人に会ったんだけど、知ってる？」

「その人って……。ああ、最近戻ってきた精鋭の忍び集団の中で二番目に強い人じゃないか」

——そんなにすごい人だったのか。

千砂は里親達と会話をしながら、そう思った。

——たしかに女というだけで殴られ続けるのは辛い。けれど、喧嘩など本気で相手にしてはいけないとも思っている。女だからと舐められ続けているのか？ 彼らに反撃する術はもう身に着けた。一度くらい、反発してもいいのかもしれない。

翌日の同じ時間、同じ場所で、千砂は一発殴られた。頬が痛い。逃げたところでこいつらは追ってくる。それは長い間殴られ続けた千砂だからこそ分かることだった。

千砂は深く息を吐く。

「どうした？ 怖くなったのか？」

男達の耳障りな猫撫で声が、千砂を苛立たせた。

掌を握り、それをその男に向かってぶつけた。その動きに隙はなく、他の者達は一瞬、その動きに見惚れてしまった。

「女が偉そうに……！」

「知らないでしょ。私がどれだけの修行をしてきたか」

千砂の修行は誰の目にも触れない環境で行われていた。だから、実態は里の者の一部を除いてほとんど知られていない。

「やっちまえ！」

人数で有利だと思ったのだろう。男達が一斉に襲いかかってくる。

最初に襲ってきた男の攻撃を躲すと、男の手首をつかんで捻り上げる。それを隙と思われたのか二人同時に拳を繰り出してきた。それをしゃがんで躲すと、お互いにぶつかってしまい、痛みで悶絶する。

その様子を見ていたこの集団の中で一番偉ぶった奴が、忌々しげに舌打ちをする。

そいつは、隠し持っていた苦無を引っ張り出して、襲いかかる。その手首をつかんで止めた者がいた。

一瞬、時が止まる。

いつからそこにいたのかは分からないが、飛虎がいた。手首を捻って苦無を落とさせる
と、地面に落ちたそれを拾う。

「これはおれが預かる」

飛虎はそう言い、苦無を懷に仕舞った。

「差は分かっただろ。とっとと帰んな」

飛虎は男達に向かって冷ややかに言い放つ。

男達は悔しそうな顔をして、その場を後にした。

「いつから……見ていたんですか？」

「最初から。前みたいになおぼこにされるなら、助けに入ろうと思っていた」
そんな必要なかったかもしれないが、と言わんばかりに飛虎は苦笑する。

「修行、辛くないか」

「……今は、楽しいです」

千砂は初めて笑顔を見せた。自分にできることが少しずつ増えていく。それが嬉しかった。

飛虎は千砂の頭に手をやると、よしよしといった具合に撫でた。
突然のことにぼかんとする千砂だった。

それから五年後、千砂は里から出て、江戸に向かった。

「それからずっと、情報売り捌いているのさ」

千砂は苦笑して言った。

「……そうか」

靈斬は低い声で言った。

「話は終わり。もう眠ったほうがいいよ」

「気遣い感謝する」

靈斬はそう言って、目を閉じた。

千砂は靈斬をちらりと見てから、診療所を去った。

終章——明かされる過去

それから一か月後のある日。夕方、旅の者が店を訪れる。

「……貴州さん^{きしゅう}」

「久しぶりだな」

「はい。どうぞ」

靈斬はその男——貴州を招き入れ、商い中の看板をひっくり返し、戸を閉めた。

「お前と会うのは十数年ぶりだな」

「はい」

「店は繁盛しているか？」

「はい。貴州さんのおかげです」

「俺はなにもしていない。お前に素質があったただけだ」

貴州は十数年前、靈斬が家を出て旅をしているときに会った鍛冶職人。見た目は四十歳くらいの大男だ。

「今回はどうしたんです？」

「お前、後ろ暗いことをしているだろう？」

「後ろ暗いこと、とおっしゃいますと？」

靈斬が惚ける。

「俺もかつて裏の世^{こち}にいた人間だ。お前の噂を聞かなかった日はない。裏稼業から足を洗え」

「なぜそのことを？」

「話題なんだよ。武士に媚びを売っている奴がいるってな」

靈斬は忌々しげに舌打ちをする。

——武士に媚びを売った憶えはない。自分にできることを淡々とやっているだけだ。

「貴州さん、俺は人斬りをしていたところからずっと、自分の命だけは軽んじて考えるようにしてきました。そうしてないと、俺は生きているという実感ができないのです。俺は誰かの恨みを晴らしながら、顔も知らぬ誰かの恨みを買っている。それを分かった上で、この稼業を、因縁引受人を、続けています。……平穩だけで、この世は回っていないのです」

それでも貴州は食い下がる。

「だがな……」

「貴州さんの忠告はともありがたいです。ですが、俺はもう引き返せないとどこまできているんです。俺はかつて、多くの命を奪った。その罪は消えませんが、贖罪だけでもさせ

てください」

靈斬は頭を下げる。

「……その証拠に、上着を脱げ」

靈斬は黙って上着を脱ぐ。

「……っ！」

貴州は息を呑んだ。

靈斬の引き締まった身体には、真新しいものから古傷まで、全身に刀傷が刻まれていた。

背中も見ると大きな火傷が目を引いた。

「もういいぞ」

靈斬は無言のまま、上着を着る。

——相当な覚悟がなければ、あんな風はならない。

貴州はそう思わずにはいられなかった。

誰よりも多くの血を流し、痛みに耐え続けた身体だった。それもたった独りで。

貴州が願ったとおりの人に、靈斬はなったのだ。だが、こんな哀しい気持ちになるくらいなら、願わなければ良かった。そうすれば、靈斬はこんなにも哀しい人間にはならなかったはずだ。

貴州は内心で悔やんだ。

「背中の火傷はどうした？」

暗い表情をしてそう問うと、靈斬は苦笑して答えた。

「先日、あらぬ疑いをかけられ、自身番に連行されまして。二週間で出てこられました」

「そうか。……靈斬」

よほど痛く、辛かったろうに、靈斬が笑ってみせた。靈斬は「痛み」に慣れてしまったのかもしれない。貴州はそう思った。

「はい」

「……生きろ」

「……はい」

靈斬は頭を下げた。

靈斬はその日の夕方、一度そば屋へ寄り、千砂に伝言をすると、店を出た。

よくいく飯屋へ足を伸ばした。

「いらっしやい！」

「よお、大将」

「いつもの席でいいかい？」

元氣な大将の声に、靈斬は内心、ほっとする。

「ああ」

「ご注文は？」

「酒」

「あいよ」

靈斬は大将との会話を終えると、奥の襖を開けた。

中は四角い大きめの机が一つと座布団が二つの個室だった。

靈斬は壁の方に座ると、溜息を吐き、酒がくるのを待った。

そのころ千砂は、伝言の通り、飯屋を訪れた。

「ごめんください。幻驚さん、きていますか？」

「ああ」

と笑みを見せた大将は、奥の襖を指さした。

「失礼します」

応じる声を聞いて、千砂が中へ入ると、徳利をかたむけている靈斬がいた。

「急に呼び出して悪かったな」

襖を閉めてから千砂が口を開く。

「気にしないでおくれ。なんだい？ 話って？」

「ちよっとした昔話をな」

靈斬はそう言い、酒の追加を注文する。

「まあ、聞いてくれよ」

出された徳利を手にとると、盃に注ぐ。

「はいよ」

「俺の家のこと、話したよな？」

「聞いたよ」

「その続きだ」

靈斬はそう言って酒を呑みながら、語り始めた。

家を出てから、彼と乳母は、乳母の実家に向かった。

訳を大雑把に話し、納得してもらったので、二人はしばらくそこで世話になることに。

彼は礼儀正しいが、ほとんど言葉を発さなかったし、誰かに心を開こうとしなかった。

その様子を乳母と乳母の両親も心配していた。

そのころ、彼は乳母の父親の手伝いで田んぼに出ていた。あぜ道を近くの子どもらが、楽しそうに駆けていく。

彼はその様子を見送った。

その様子を乳母の父親は悲しそうに眺めた。

それから二年後、乳母の実家で生活していくうちに、彼は美しい少年へと成長していた。そんな彼が、乳母に言った。

「旅に出たい」

会話そのものが久し振りで嬉しかった乳母とは異なり、彼は静かな声で言った。

「どうして？　ここは安全なのに」

「自分になにができるのか、知りたい。それが仕事になればなおさら。そうしたら、あなたに恩返しができる」

乳母は思わず泣いてしまった。

辛い思いをしてきたのは他でもない彼なのに、そんな優しい子に育っているとは夢にも思わなかった。

乳母はそれを了承し、旅支度を整えてくれた。雑刀まであることに、彼は内心、驚いた。

「身を守るものくらい、ないといけないからね。これをあげよう」

なんの装飾もない黒一色の短刀を、乳母の父が渡してくれた。

「ありがとうございます」

彼が受け取ると、乳母の父は破顔して言った。

「実は、私も武家の出身なんだ。君のために磨いておいて正解だったようだ」

彼は再度礼を言い、乳母の家を旅立った。

彼の中に恐怖はなく、ひとまず旅を試みようという気分だった。油断しているわけでもなく、ただ自然とそう思えた。

歩いてしばらくすると日が暮れてくる。

彼は火を起こそうと荷物と雑刀を木の近くに置き、登って枝を折っているところを、野盗に絡まれた。人数は五人。

「こんなところでなにしてんだ？」

「……」

彼は無言で木から飛び降り、その場を去ろうとするが、行く手を阻まれる。

「いい顔してんな。捕まえて金にするか」

——冗談じゃない！

彼はそう思った。

警戒心をあらわにしていると一人の男の手が伸びてくる。

彼はとっさにその手を払う。懷から短刀を取り出して鞘を投げ捨て、構えた。鋼色の刀身が夕焼けに反射して、ぎらりと光った。

「餓鬼のくせにいい根性してるじゃねえか。死んでも知らねえぞ？」

その一言で男が襲いかかってくる。彼はそれを躲し、懷に入り込むと心臓を刺し貫いた。まだ脈打つ心臓の鼓動を得物越しに感じながら、彼は短刀を抜いた。

頬に返り血を浴び、鮮血で真っ赤に染め上げられた短刀を持った少年が、男達に暗い双眸を向ける。

男達は情けない悲鳴を上げて、逃げていった。

彼は今日で十三になったばかり。しかし、初めて人を殺めた日になった。

彼は地面に転がっている鞘を拾い、刃を仕舞うと、骸はそのままにその場から去った。

それからの彼は酷かった。

乳母が作ってくれた握り飯も血の味しかせず、飲み水も同じだった。せめて水だけは飲むように心がけ、旅を始めて数か月。彼は敵にのみ、その刃を振るった。その腕を買われ用心棒となり、わずかな金を稼ぎながら、飯にありついていた。といっても、水しか飲まなかったが。

旅をして一年が経ったある日、彼が道を歩いていると三十歳くらいの男に声をかけられた。このころ、少しの飯くらいは食べられるようになっていた。

「お前さん、ちよっとこれ、見ていきなよ」

多くの刀を背負った旅の鍛冶屋だった。

「金がない」

「なくてもいいからさ」

仕方なく彼は、鍛冶屋の商品を眺めるも、良さが分からず困惑してしまった。

「刀の良さなんて、使い手にはよく分からんか。……お前さん、血の匂いがする」

鍛冶屋は突然、核心をついた台詞セリフを言った。

「血の匂いだと？」

彼が警戒心をあらわにする。

「そうさ。いくあてはあるのか？」

「ない」

「なら、俺と一緒にくるといい」

——なにを言っているんだ、こいつは。

彼はそう思ったものの、言われたことが気になって、鍛冶屋に同意した。

鍛冶屋は貴州と名乗った。歩きながら、貴州が尋ねる。

「名は？」

「忘れた。……だから、ない」

「なら、俺がつけてやろう」

貴州はにやつと笑った。空を見上げるとちやうど驚が飛んでいた。

「幻驚靈斬」

靈斬は与えられた名を呟いた。

「いい名だろ？」

靈斬は、ひとつ、うなずいた。

「どうしてその名を？」

靈斬が尋ねた。

「答える前に、ひとついいか？」

靈斬は黙ってうなずく。

「今まで、大勢、斬ってきただろ？」

「そこまで多くはないが、どうして分かる」

靈斬の声には苛立ちも混じっていた。

「だから言っただろ？ 〃血の匂いがする〃って」

靈斬は納得するしかない。着物に染みついた血が匂ったのか、この男の勘なのか定かではないが。

「仕事で斬っているのか？」

「ときどき、用心棒を引き受ける」

貴州の問いに靈斬が、静かな声で答えていく。

「そうか。……どうせ斬るのなら、人ではなく、目には見えないものを斬ってほしいんだよ」

「目には見えないもの……？」

靈斬は困惑した。

「いっぺん、稽古でもしてみるか？ いいや、止めておくか」

「どっちだ？」

靈斬が突っ込む。

「止めだ」

「なぜ？」

「お前さんが相当な使い手だからさ」

「なぜ……それを」

靈斬は啞然としつつも、そう尋ねた。

「強いて言うなら、殺気だな。俺といっても殺気が消えん」

貴州は顎に手を当てて言った。

「そうか」

「なあ、靈斬よ。刀鍛冶になる気は、ないか？」

「なぜだ？」

靈斬が訝しげな顔をする。

「俺の勘だ。お前はいい刀鍛冶になりそうな気がするんだよ」

「今より稼げるか？」

靈斬は問いかけた。

「店が持てれば、な。それまで金と時間はかかるが」

——好都合だ。

靈斬は今の生活に嫌気が差していた。刀鍛冶になって、どこか身を落ち着けるのも悪くはない。手に職をつけたいという想いがある。なにより、靈斬の願いが叶うかもしれない。

「分かった」

「そうと決まれば、行先決定だな」

「どこにいくんだ？」

「俺の秘密の鍛冶場さ」

貴州はにやりと笑った。

一か月かけて、貴州の言う鍛冶場に到着した。

貴州は休む間もなく、靈斬に技術の基礎を教え込んでいく。靈斬は水を得た魚のように、知識を吸収していった。

それから半年をかけて、基礎を徹底的に学び、実践に入った。貴州の教え方もうまく、靈斬は呑み込みが早かった。二人は良い師弟関係を築いていった。だが、貴州はなぜか自分のことを師匠と呼ばせなかった。

それから三年後、靈斬はめきめきと腕を上げ、ようやく一人前だと貴州に言われるようになった。

「一人で、一本、作ってみろ」

靈斬はそう貴州に言われ、食事は一切摂らず、水だけを飲んで、刀作りに没頭した。

二週間かけて、靈斬が初めて鍛えた刀が完成した。

「いい出来だ」

貴州がそう言うに足る実力を、靈斬は身につけていた。

「ありがとうございます……ございます」

「敬語は止めろって言ってるだろ。堅苦しいのはごめんだ」

靈斬は呆れた貴州に、うなずいてみせた。

——良かった。

内心で、靈斬は素直にそう思った。

——これで、金さえあれば、店を立てられる。

靈斬は師に向かって、頭を下げた。

「俺はお前をここまで育てられたことに満足してんだ。顔、上げな。飯にしよう。腹、減っただろ？」

靈斬は夕餉の手伝いを始めた。

靈斬が刀鍛冶の修行を始めて四年が経ったある日、靈斬は貴州にこう申し出た。

「旅に出る。いつか、俺の店を作るために」

「分かった。準備してろ」

貴州は短く告げて、奥に引っ込んでしまった。

靈斬は不思議に思いながらも、旅支度を始めた。

乳母の父からもらった短刀を撫で、懷に仕舞った。

靈斬が旅支度を終えるころ、貴州に声をかけられた。

「靈斬」

呼ばれていくと、貴州は一振りの刀を靈斬に渡した。

柄や鍔、鞘に至るまで黒一色の刀だった。抜いてみると刀身までもが黒だった。

「前の雑刀じゃ、みすばらしい。……持っていけ」

貴州はぶっきらぼうに言った。

「ありがたく、使わせてもらう。感謝する」

靈斬は言いながら、頭を下げた。

貴州は手を伸ばし、その頭をがしと撫でる。

突然撫でられたことに驚きつつも、されるがままの靈斬は、もう少し優しくやれよ、と思った。けれど、そんな撫で方がこの人らしくもあつた。

「いってくる」

「嫌になったら、いつでも戻ってこい」

貴州は笑いながら言った。

「いつのことになるんだか」

靈斬は肩をすくめると、貴州の許を旅立った。

「俺と貴州さんの出会い、今の仕事に就くきっかけは、ざっとこんな感じだ」

靈斬は酒を呑みながら、あっさりと告げた。

「へえ、やっぱ面白いね。あんたの話」

千砂がくすつと笑って、靈斬の空いた盃に酒を注ぐ。

「靈斬という名に、目に見えないものを斬ってほしいという想いが込められていたとはね。今の靈斬はそれを実行しているじゃないか」

「まあ、そうだな。だが、久しぶりに会ったとき、貴州さんは暗い顔をしていたぞ」

「それはどうして？」

「貴州さんは、俺に裏稼業から足を洗うよう、忠告にきた。俺はそれを突っぱねた。貴州さんに言われるがまま、上着を脱いだ。そうしたら、暗い顔をしていたんだ」

「もしかして、火傷の痕も見せたのかい？」

「そうだが？」

靈斬はなにか悪いことでもしたか？　と言わんばかりの、軽い口調で言った。

——自分が一番苦しんだというのに、それをなんとも思わずに他人に晒すなんて。普通ならそんなこと、隠したがるものなのに。靈斬は下手に隠すより、見せてしまった方が良いと判断したのだろう。火傷の痕なんて惨いもののはずだ。

「そんなの見せられれば、誰だって暗い顔するさ」

千砂は溜息混じりに言った。

「そうか」

靈斬は酒を煽ると、話を再開した。

その後、靈斬は用心棒の傍ら、稼ぎのいい仕事を探し、江戸にきていた。その中でも危険だが羽振りのいい暗殺が稼ぎやすいと噂を聞き、ある武家の屋敷を訪れた。

「そなたが腕の立つ武人か」

「はい」

「この男を殺めてまいれ」

下仕えの者が男の名を告げる。

「かしこまりました」

靈斬は下仕えの者から必要な情報を聞き出し、屋敷を後にした。

この日、霊斬は人斬りとなるにあたり、表向きには幻鷲と名乗ることにした。幻鷲は男が通るといふ道の物陰に隠れ、待ち伏せる。

しばらくすると標的の男が通りかかる。鯉口を切りながら駆け出し、下から斬り上げた。男は血飛沫とともに、地面に倒れる。その返り血を浴びながら、怒号を聞く。

「なに奴だ！」

幻鷲は邪魔する者は全員斬り捨てろとの命に従い、その場にいた五人の命を散らした。鮮血がべつとりと付いた刀を振って仕舞うと、頬についた返り血は拭わず、その場を後にした。

「戻りました」

「きちんと殺めてきたか？」

「はい。連れも含めて全員もろとも」

「よくやった」

武士は下卑た笑みを浮かべた。

「報酬じゃ」

目の前に出されたのは小判五両。

用心棒では決して稼げない額の大金を目にする。

幻鷲はそれを袖に入れ、武家を後にした。

幻鷲は拠点としているぼろ屋へ向かうと、床につけられた隠し棚に稼いだ金を納めた。

幻鷲として、人斬りの日々が始まった。

依頼は主に夜。誰もが寝静まったときに、迅速に進む。幻鷲はどんな依頼もこなした。そのおかげでしばらくすると、裏の世で幻鷲の名は広まり、あちこちから依頼がくるようになった。

幻鷲は用心棒を辞め、暗殺を稼ぎの主軸にすることを決めた。

かなりの大金を稼ぎながら、幻鷲は命の尊さを忘れていった。

多くの命を奪い、その血を浴びながら、幻鷲は店を建てるための金を稼ぎ続けた。

——そう、血塗られた金を。

人斬りになってから三年が経ち、幻鷲は十八になっていた。ある日、貴州が突然彼の許を訪れた。

前もって居場所は伝えていた。

「久し振りだな」

「はい」

靈斬は硬い表情で返事をした。

「今はどんな仕事をしている？」

「……人斬り」

靈斬は重い口を開けて答えた。

「そうか……。店はいつまでに構える予定だ？」

「二年後」

貴州は顎に手を当てて聞いた。

「人斬りをやって、どれくらい経つ？」

「三年」

「慣れてきたか？」

「よく分からない」

「飯は食べているのか？」

「多少は」

貴州は靈斬に視線を向けると、以前より痩せているように思えたが、口にはしなかった。残念でならなかった。金を稼ぐために人斬りになった者は哀れでしかない。その姿はまるで昔の自分を見ているようだと、貴州は思った。

——いや。

貴州は胸の内では否定する。

——まだ、店を持つために金を稼ぐという目的があるだけ、まだましかもしれん。

貴州はそう思った。

なんの目的もなく、人を斬るのは危険でしかない。そういう輩は必ず、斬ることそのものを楽しいと感じてしまう。不幸中の幸いにも、靈斬にそんな様子がなさそうだと分かり、内心安堵する。

ただ、生気を失っていることが気がかりだった。それは慣れるまで時間がかかるという証拠でもあった。

「……無理はするな」

「はい」

貴州はそれだけ告げて、靈斬の許を後にした。

「そのころの俺は、自分を保つことで精一杯だった。人を斬るたびに心が擦り切れるような感じがして、どうしようもなく遣る瀬無かった」

「それで？」

千砂が酒を呑みながら、先を促した。

「それから二年……二十歳で、店を開くことができた。それを機に人斬りから足を洗った」
靈斬は淡々とした口調で語った。

「生き返ったわけだ？」

千砂が少し笑って尋ねた。

「まあな」

靈斬が苦笑する。

「靈斬、あんた、なにか大切なもん、失くしたんじゃないのかい？」

千砂が盃を置いて、真面目な表情で問いかけた。

「大切なもの……？」

靈斬は首をかしげる。

「自分を大切にすることを、あんたは忘れちゃったんじゃないのかい？」

「……たしかに。でもな、それは必要なことだった」

靈斬は静かな声で語り続ける。

「そうしなければ、人斬りや因縁受人など、やっていられない」

千砂にはその言葉があまりにも残酷だと思った。

「靈斬……」

無表情で酒を呑む彼を見て、千砂は言葉を失った。

「どうして……」

「ん？」

靈斬は、千砂に視線を向ける。

「自身を犠牲にし続ける道を捨てなかった？ 刀鍛冶をしていれば、幸せだったんじゃないのかい？」

靈斬は酒を呑み、乾いた笑みを浮かべた。

「俺も最初はそう思った。そうだと信じたかった。でもな、違ったんだ。店をやっていくうちに、聞こえてきたのは、悪に対する、嘆きと怒りの声だった。どうしようもないほど、追い詰められた、苦しみの声もあった。俺は、それを聞かなかったふりを、見て見ぬふりを、したくなかった。だから……」

靈斬は言葉を切り、決意に満ちた目で千砂を見た。

「店を開けて五年後、裏稼業の因縁受人を始めた。身分なんかどうでもいい、そんな人達のために、なにか、したかっただけだ」

「そのためとはいえ、あんたの払う犠牲は大きすぎる！ あんたが、他人にそこまで肩入れして、最悪、死んじまったら、なんにもならない！」

千砂は涙を堪えながら、怒鳴った。自分でも泣いていることに内心で動揺していたが、それどころではなかった。

「泣いてくれるな」

靈斬はそんな千砂を見て微笑した。

「どうして笑うんだい？」

千砂は泣きながら聞いた。

「笑うしかないだろ」

靈斬はぶっきらぼうに言った。

「そんな話を聞かされて、泣かない方が不思議だよ！」

千砂は泣きながら、苛立ちをあらわにする。

「感情が、麻痺、しているのかもしれないな」

靈斬は苦笑して、酒を呑んだ。

「感情が麻痺しているって……」

千砂は茫然としながら、その言葉を反芻した。はんすう

——感情を殺さなければならぬほど、靈斬が選んだ道は過酷なのだろう。自分ならおそらく、いや、早々に逃げ出しているだろう。誰だって自分のことは可愛い。しかし、靈斬は、そんなこと微塵も思っていない。一番、自身を貶め、犠牲にしている。それを分かっている、胸を痛めることすらない。痛んだとしても、やり過ぎしてしまうのだ。

「自分の心の悲鳴を、葛藤を、どうすれば無視できる？」

千砂は内に浮かんだ言葉を、ゆっくりと吐き出した。

「沸き起こる感情、ひとつひとつに構っている余裕などなかった。俺自身が傷ついたと自覚するよりも先に、他者の絶望の方が遥かに重要だった。俺は『自分について考える』ことを止めたんだ」

靈斬は冷ややかな声で、とても残酷な言葉を口にした。

——舐めていた。靈斬の覚悟を。

自身の大事なものを犠牲にしてもなお、それを止めない。靈斬の放った最後の言葉は、自分を呪っているようにも思えた。

千砂は内心で様々なことを考えながらも、ただ名を呼んだ。

「……靈斬」

「なんだ？」

「あんたが因縁引受人をするきっかけはなんだったのか、聞いてもいいかい？」

千砂の問いに、靈斬は少し考え込んだ。

「……分かった」

靈斬はそう言い、酒を呑むと、静かな声で語った。

「今から三年前の冬、乳母が誰かに殺されたことを、乳母の父からの文で知った。俺はすぐに、乳母の父の許を訪ねた」

「お久しぶりです」

「逞たくましくなったな」

靈斬の姿を久し振りに見た乳母の父がそう言った。

「元気にしているか？」

「はい」

「旅は続けているのか？」

その問いに靈斬は笑みを浮かべて答えた。

「今は江戸に身を置き、幻驚靈斬と名乗り、刀鍛冶をしております」

「良い名だな。自分でつけたのか？」

乳母の父はそう言いながら尋ねた。

「いえ、ある人がつけてくれました」

「そうか……。娘にも今の君の姿を、見せたかったよ」

「殺されたのはいつごろなのですか？」

靈斬が尋ねた。

「一週間ほど前だよ。突然、賊がやってきて、家を荒らし、妻と娘が殺された。二人に駆け寄っていったら、声が聞こえてきたんだ」

「そうでしたか」

靈斬はうなずく。その双眸には憎しみが宿っていた。

「ここにいる人間を殺せば大金が手に入るって武家の人が言っていた。それから男を捜せと。多分、君のことだろうね」

「今さら連れ戻しにでもきたのでしょうか。それにしても、殺す必要はなかったはずだ！」

靈斬が激昂する。育ての親であり、幼かった靈斬の味方でいてくれたのは常に彼女だけだった。

「私もそう思う」

靈斬は自分が昔いた武家の名をすっかり忘れてしまっていた。あのころの記憶は消せなくても、その象徴となるものだけでも忘れていたかった。その方が少しでも楽になれる気がしていたから。

靈斬は立ち上がる。

「どこへいくつもりだい？」

「江戸に戻ります。せめて賊だけでも、なんとかします」

「殺しちゃあ、いけないよ？」

「……そうせずに済むよう、動いてみます」

靈斬は頭を下げ、江戸へ向かった。

それから数日の間、賊と武士の情報を集め、ついに、目的の賊を探り当てた。黒の長着と同色の馬乗り袴を身に纏う。黒の足袋を履き、黒の羽織りを着る。同色の布で鼻と口を隠す。愛用している黒い刀を腰に帯びると、その集団がいるという家に向かった。

靈斬は新人を装って、その集団に潜り込んだ。

「今日からお世話になります、幻と言います」

「堅いのはなし！ ゆるくいいこうぜ！」

頭領と思しき男に肩を抱かれ、靈斬は委縮したふりをしてうなずく。

「は、はい」

それから数日のうちに、近くの米問屋に盗みに入り、祝杯を上げていると、下っ端の男が靈斬に話しかけてきた。

「幻よお。前な、利津家からある男を探すのと、男と女二人を殺せって依頼を受けたときにな、結構稼いだんだ。金は、みんな、酒に使っちゃったんだけどな」

皆一斉にがははと嗤い出す。

「あのときはよかった。男は見つからなかったのに、報酬たんまりくれてよお」

「俺達さえ良ければ、他はどうだっていいのさ！ いや、またああいふ依頼こないかね？」

「そうだな」

靈斬は途中から会話に参加していなかった。人の命を奪ったことをなんとも思わない屑に出くわした。

靈斬は腰に下げていた刀に手をかけ、周辺に座っていた男達に一太刀浴びせた。

「なにすんだ！ てめえ！」

別の男の怒号が飛ぶ。

靈斬はその男を斬り捨て、次々に男達を血飛沫と肉塊に変えていく。

血に濡れた着物を翻し、ひろがえ返り血を浴びながらも動じない。靈斬は男達を斬り続けた。数多くの断末魔を聞きながらも、靈斬は冷静だった。

「うるさいんだよ」

靈斬はそれだけ告げると、惨状と化した住処を後にした。

その足で、利津家に向かった。

その男はちょうど、重五郎と話をしていた。屋根裏から話を盗み聞く。

「賊の一団がやられました」

「なんじゃと！ 誰がそんなことを！」

「分かりませぬ。しかし、あの場の状態から言って、相当、腕の立つ者ではないかと」
「さっさとそやつを捕らえよ！」

「は！」

「その必要はない」

靈斬は屋根裏から飛び降り、男と重五郎の間に降り立った。

「貴様が賊に指示を出したのか？」

靈斬は冷え切った声で尋ねた。

「……」

男は沈黙する。

その沈黙を肯定と受け取った靈斬は、問答無用で斬り捨てた。
先ほどまで話をしていた男が一瞬のうちに、骸へと変わった。

血の付いた刀をそのままに、靈斬は重五郎に向き直った。

「わ、わしになにをするつもりじゃ」

怯えた声でそう尋ねる重五郎の姿は、あまりにも哀れだった。

「なにも。せいぜい苦しみながら生きろ」

靈斬はそう吐き捨てると、刀を振り血を払う。

「陸奥！」

重五郎は自分を主とする武家の名を呼んだ。
襖を挟んだ向こう側から声がする。

「いかなされました？」

「今から言うことすべてに、はいと答えろ！」

重五郎は骸を前に叫んだ。

「は」

呼ばれた陸奥は、なにを言っているんだと思いつつも、指示に従った。

「刃傷沙汰が起きた。陸奥家の者の手にかかってしまったと、わしは奉行所に伝える」

「お待ちください。話が……」

「口答えするな！」

すかさず重五郎の声が飛ぶ。

「……はい」

「分かったら、もう用はない。去れ」

「はい」

陸奥はその言葉を最後に、その場を後にした。

「なんのつもりだ？」

靈斬は冷ややかな声で尋ねた。

「この家で刃傷沙汰など、あつてはならない。それだけじゃ」

「その決断で、不幸が起こらぬことを、祈ってやるよ」

靈斬は冷ややかな声で言い、屋敷を後にした。

「俺は忠告を無視して、賊と武士を殺めた。後悔はない」

靈斬は淡々とした口調で、話を続けた。

「それでも、俺の心に空いた穴は埋まらなかった。それをあえて埋めないまま、生きてきた。その必要もなかったんでな」

「……そうだったのかい」

千砂は言いながら、酒を一口飲んだ。

——哀しかっただろう、辛かっただろう、苦しかっただろう。けれど、それを決して口にしない。一番傷ついたのは靈斬なのに、誰かに頼りたいときだつてあるだろうに、決して頼らない。そんな彼のそばにいたかった。心の傷は癒せないかもしれない。けれど、寄り添いたかった。誰よりも強くて、誰よりも孤独で。誰よりも怒り、誰よりも哀しんで、誰よりも苦しんでいる靈斬に。

千砂はそう思った。

「よくもまあ、そんなんで今まで生きてこれたねえ」

靈斬が苦笑する。

「俺もそう思う。いろんな奴らから、恨みは買っているだろうな」

「さらっと怖いことを言うんじゃないよ」

千砂にようやく笑顔が戻る。

「話してくれてありがとうね。あたしはこれで」

千砂が立ち上がった途端、体勢を崩す。それを慌てて支えた靈斬は、思わず申し出た。

「送っていく」

「悪いねえ。だいぶ吞んじまったようだね」

千砂が靈斬に支えられたまま苦笑する。

格子から外を見れば、空に月が浮かんでいた。

「そのようだ」

靈斬は千砂を座らせると、部屋を出る。

「大将、長い時間すまなかったな」

「気にすんな。よくあることだから」

大将はひらひらと手をふってみせた。

「そうか」

袖から財布を取り出した靈斬はお代を支払った。

靈斬は部屋に戻り、千砂を背負うと飯屋を後にした。

千砂を背負って歩いていると寝言が聞こえてくる。

「……独りで抱え込むんじゃないよ。ばーか」

——一言、余計だ。

と思いつつ、靈斬は内心で感謝し、背負いなおすと隠れ家に向かった。

隠れ家に着くや、奥の方に布団を見つける。

靈斬は千砂を起こさないように寝かせ、布団をかけてやると、声をかけられる。

「靈斬」

「起きていたのか」

靈斬は苦笑した。

「途中からだけだね」

千砂がくすつと笑う。

「悪いね。わざわざ送ってもらっちゃって」

「気にするな」

靈斬は微笑すると、隠れ家を後にした。

その帰り道、靈斬は思う。

どんなに辛くても俺はこの仕事を続ける。けれど、それ以上に、最後まで生き抜いてみせる。

靈斬は夜空に浮かぶ満月に、そう誓った。

完